

---

# 私と犬（アナタ）の世界で

暁理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と犬アナタの世界で

### 【Nコード】

N1732L

### 【作者名】

暁理

### 【あらすじ】

前世で恋人へんじん同士だった2人がそろって転生してしまった。幼馴染として一緒に育った2人が、そのまま幸せな生活を送るのかと思いきや、前世で自分たちだけだった2人の世界は転生を機に大きく広がってしまっ……。広がり続ける世界と自分の気持ちとの間で揺れ動くヒロインの純愛ストーリー。（\*あらすじはイメージです。実際の作品内容からは異なった印象を抱くことができます）

## 1・閉ざされた記憶（前書き）

簡単な登場人物紹介です。

この段階で話の展開に不安を覚えられた方は、ブラウザバックで御戻り下さい。

さいとう きょうこ  
彩藤叶湖：現在2歳

本作ヒロイン。転生前の名前は嘘々（こはく）叶湖。  
情報屋を営む傍ら、猟奇殺人を繰り返していた。痛いのが苦手な性格破綻者。

きりはら くろえ  
桐原黒依：現在2歳

本作ヒーロー。転生前の名前は無灯黒依。

元・天才暗殺者で、叶湖に拾われてポチ（犬）となる。こちらも性格破綻者。

## 1・閉ざされた記憶

女の叫び声。すすり泣く音。

……ああ、鬱陶しい。

赤々と燃えあがる炎。狂った笑い声が聞こえる。

……ああ、これは……。記憶？

カチャリ、と鍵のハズれる音がして。

そして、私の頭の中で何かがはじけた。

『叶湖さん。あなたはどうして僕を助けたんです？』

『顔が好みで、悲鳴がドンピシャだったから……。です』

時代遅れの暗殺者組織を満身創痍で逃げ出した元暗殺者と、それを拾った一見普通の連続猟奇殺人犯。

2人の物語が、映写機のように頭の中で流れていく。

『今現在のあなたの立場は、私の拾得物です。拾得物のお礼、1割分を私がアナタで楽しんだ後は、アナタの人権をお返しします。』

それまでは、アナタの人権をはじめ、生殺与奪の権利を含む全ての権限は私のものです』

出会いは偶然。そして最悪。

『性格悪いって言われたい？』

『残念ながら、『いい性格』としか言われたことがないんです』

マイペースで自己中な殺人犯に、しかし孤独の暗殺者は間もなく捕らわれて。

『ちよつと、躰に失敗……？ あら？ ある意味成功なのかしら？』

『僕はアナタが好きなんです。僕を見て。僕を認めてください。』

叶湖さんだけ居れば、他は要らないんです』

『だから嫌なんですよ。懐かれると面倒だ』

そしてその絆はやがて2人の間に愛としてあらわれる。

『そんなに大事？』

『ペットに名前をつけると情がうつるんですけどっけ？』

『叶湖さんのために、廃業したつもりだったんです。けど。叶湖さんから僕と言う所有物を断りなく奪う人は、僕の敵以前に叶湖』

さんの敵です。だから。……殺してしまってもかまわないでしょう？」

『黒依は私のものです。名前で呼んでいいのも私だけ。……私  
のものを、私の許可なく、私以外のものが害すなんて。私は一切許  
容も我慢もしませんよ』

似たもの同士の恋人たち<sup>へんしん</sup>の世界は、そして……。

暗転した。

「あ、起きたね、叶湖」

「……どちらさまですか？」

ああ、ここはどこで、私はどうして縮んでいて、そして、あなたは  
一体ダレ……？

10代半ばの少年の腕で抱きあげられたまま、叶湖は内心で深く息  
を吐き出した。

## 2・新しい家族（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：ヒロイン。 3歳。

桐原黒依：幼馴染。

彩藤直<sup>なお</sup>：叶湖の兄。

彩藤和樹<sup>かずき</sup>：叶湖の兄。

桐原香里<sup>かおり</sup>：黒依の母。

## 2・新しい家族

「それでは」

叶湖は無言で朝食の食器を片づけると、ダイニングの出口から振り返ってつけた。

その時に、部屋の隅で上手くさかさまを向いて転がっているランドセルが目に入るが、気付かなかったことにして、視線をテーブルへ向ける。

「んー」

ダイニングに1人残った少年は、行儀悪くパンにかぶりつきながらヒラヒラと後ろ手に手を振る。整った顔と大きな瞳はテーブルの間に挟んだテレビへと向けられて、叶湖を振り返ることはなさそうだ。

叶湖はそんな少年の様子に間もなく視線を外すと、ダイニングの扉を後ろ手に締め、まっすぐに玄関へと向かった。

「っ叶湖!? ちょっと待って、送っていくから!」

と、玄関近くの階段を降りていた青年が、靴を履く叶湖の姿に目を見開いて声をかけた。よほど慌てたのか、普段の彼ではあり得ない大きな音をたてて、残りの段を駆けおりてくる。

「……ご飯、食べてないでしょう? 私は1人で行けますから、お気づかないなく」

「そついう問題じゃない!」

1言告げてドアノブに手をかけた叶湖に半ば怒鳴るように言い放つと、青年は廊下を足早に進み、先ほど叶湖が出て来たドアを開け放つ。

「和樹! 遅刻するからもう行くんだ」

「……もうちょっとゆっくりでも間に合うもんねー!」



室内に向かつてかけた言葉に、小憎たらしい少年の声が返る。

「まったく、兄さんは心配症だなあ。叶湖が1人で行けるって言うんだから、行かせておけばいいんだよ。……幼稚園くらい。いつてきまーす」

間もなく、先ほど部屋の隅に転がしてあったランドセルを背負って廊下へ出て来た少年が、叶湖の脇を通り扉から飛び出していく。

「そういうわけには行かないだろう。……叶湖、待つんだ」

その後ろを追おうとした叶湖に、ため息交じりの声をかけると、青年は自分もカバンを肩にかけて靴をはいた。青年のカバンは叶湖の家からは近いとも遠いとも言えない距離にある、高校学校の指定の物で、要するに私立校のもの。彼も今年入学であるから、使いふるされた感はなく、上品に光を弾いていた。

今の時間からでは、叶湖を幼稚園まで送っていては遅刻するだろうに、青年がそれを気にすることはなく、むしろ当然のように叶湖を振り返った。

「行くぞ」

「……」

叶湖のもみじのような手を握りしめ、玄関を出ようとする青年に、叶湖はわずかに家の中を振り返って、そうして結局何もせず、自分の手を引く力に従って家を出た。

叶湖はため息をつきながら、12歳も年上の兄を見上げた。

自分の手を引く男の名は、彩藤直。そして先ほど叶湖が出かける

際の言葉をかけたのが、7歳年上の彩藤和樹。双方とも、叶湖の2番目の家族だった。

とはいえ、叶湖が俗にいう『もらわれっこ』というわけではない。叶湖が2歳の時に、自我と共に叶湖の1回目の人生の記憶がよみがえったのだ。

しかしその記憶によって、それまでの僅かながらの記憶はすっかり上書きされてしまい、結局残ったのは新しい家族に対する違和感だけ。

そんなわけで、叶湖にとっては今の家族は2番目でしかなかった。

もともと、そんな家族に対するイメージでは、毎日息が詰まってしまうのではないのかもしれないが、幸い叶湖の生まれた家庭は夫婦関係が冷え切っており、家族団欒の時間を過ごした記憶など全くなかった叶湖はそんなこともない。

詳しくは知らないが、叶湖の母・麻里亜は父・賢司の後妻で、賢司が亡くした前妻を今も忘れられないことが原因の一端のようである。

結局、麻里亜は自分を見ない賢司を避け、家に寄りつかなくなり、賢司は賢司で前妻を忘れるように仕事に打ち込んで帰ってこない……。

金はあるくせに、手伝いなどが雇われたことのない家で、実際に叶湖を育てているのは、年の離れた長兄のようなものだった。

叶湖と年の離れた兄2人、特に強い責任感を持つ直の方は、実の親2人に放置されている叶湖に対していろいろ思うことがあるのか、叶湖のあまりにも子供らしくない特異性を受け入れた上で世話を焼いてくれている。しかし叶湖は表面上はともかく、内心では特にありがたいと思うこともなければ、両親2人の様子を厭ったこともない。どちらかといえば、現状になんら不満はなかった。

「叶湖さん！」

交差点に差し掛かった時、信号待ちをしていた叶湖と同じ年くらいの男の子が、まるで自分に近づく叶湖を知っていたかのように振り返った。

「おはようございます、黒依、桐原さん」

知っていたかのように、ではなく、知っていたのだ、と確信を持っている叶湖はそんな少年の様子に驚くこともなく、いたって普通に挨拶を返すと、その脇。少年を追うように叶湖とその兄を振り返った女性にも頭を下げた。

「おはよう、叶湖ちゃん。どう？ 幼稚園は楽しみかしら？」

赤ん坊を抱えた女性が、危なげなく叶湖に視線を合わせるようにしゃがみ込むと笑顔を向ける。確か赤ん坊の方は、去年生まれたばかりの彼の妹だったか……。

頭では全く違うことを考えつつも、女性にはその質問に肯定するような笑顔を見せた叶湖に、しかし女性はうれしそうに頷くと立ちあがって、今度は直に視線を合わせた。

「おはようございます、桐原さん」

「おはよう、直くん。いつも直くんは偉いわね」

「そんな……桐原さんにはいつもお世話になって……」

いつの間にか交差点への侵入を許す色に変わっていた信号がチカチカと点滅し出した。

もう1度待つことになるだろうな、とすっかり話しこんでいる兄と女性から少し距離をとる。女性の名前は桐原香里。叶湖の父親と知り合いで兄2人が居ない間、叶湖の面倒をよく見ている。

叶湖は今まで張り付けていた笑顔を深め、大事そうに赤子を抱く香里から視線をそらすと、案の定自分を追って2人から距離をとっていた黒依に視線を合わせた。

「幼稚園は楽しみかしら……ですって。黒依はどうです？」

漆黒の髪に瞳。幼稚園の制服まで黒だから、黒づくめである。もつとも、黒依は元々が黒を好んでいたのも、本人にとっては光栄なのかもしれないが。自分の胸についているものと揃いのエンブレムを見つめ、華やかな笑顔を浮かべる叶湖に黒依は苦笑した。

理由は簡単。叶湖の笑顔が綺麗であればあるほど、彼女の機嫌は悪いのだということを知っているからだ。

「僕は……アナタが心配ですよ、叶湖さん。子供は無邪気ながら残酷です。そして、『違うこと』に敏感だ。問題が起きるのではないかと……」

叶湖をまつすぐ見つめたまま眉を寄せて苦しそうにする黒依に、叶湖はわずかに機嫌の直った笑顔で、風に遊ばれている自分の長い髪を片手で押さえつけた。

「行きましよう？ 入園式に遅れてしまいそうです。初日から目立つなんて嫌ですからね」

叶湖は、横断歩道を渡り始めた子供2人に漸く気付いて、慌てた様子で追って来た香里と、その腕に抱かれた赤子を綺麗な笑顔で一度だけ振り返ると、あとは振り返ることなく黒依を伴って幼稚園へと向かった。

## 2・新しい家族(後書き)

読了ありがとうございます

幼稚園篇？ 神様（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年少組（4歳）

桐原黒依：上に同じ

## 幼稚園篇？ 神様

「叶湖さん」

園児たちが各々の望む遊び場で好きなことをして遊んでいる端で、叶湖は1人、木陰に腰かけて分厚い本を抱えていた。そんな彼女を呼ぶ声がして、叶湖は視線をあげる。

「室内でなくていいんですか？」

「……煩わしいんです。園児をすべて一元化できると思っている人間が。異端が嫌なら放置すればいい」

叶湖が表情を崩して眉を寄せる。いつ何時でも笑顔を顔に張り付けている叶湖がその表情を崩して、正直な心中を表に出すのは唯一、黒依の前だけである。それを知っているからこそ、黒依はそんな機嫌の悪い叶湖に対してしようがないな、とでも言うように浅く息をつくと、その隣に自分も腰を下ろした。そして、叶湖の膝におかれた本を見る。

前世では、どこまでが本気か分からないが、世界征服を企み、その下積みとして情報を操っていた（そして、情報世界では征服を達成してしまった）叶湖である。読まれている本は童話どころか日本語ですらない。その事実には、その言葉が何語かすらも分からずに終わった黒依は、内心で苦笑する。

確かに、叶湖と、そして黒依も共に幼稚園で異端扱いをされているのは事実であった。そもそもが2人だけの世界を築いてしまっている上、外見が同年代の子供たちとは会話が続くわけもない。

周りが絵本の読みきかせを楽しみにすれば、2人は部屋の隅で経済学の専門書を持ち込んで読んでいる。お絵かきをさせてみれば、

叶湖は自分勝手にこの世界ではまだ目の目を見ていないようなプログラムを構成しはじめる。なおかつ、c言語の並んだそれを絵だと言いつける上、それを解読できるものなどその場には居ないので、それがまかり通ってしまうのも問題だろう。黒依は黒依で精密すぎる人体（の断面図）を描いて、他の園児のトラウマを作り上げてしまった前科を持つ。

おまけに、子供に対するような宥め方では、2人そろって慇懃無礼に論破されてしまうのだから、大人も立つ瀬がないといえるだろう。下手に生意気を言われるより、敬語を標準装備として操る2人にスムーズに論破されてしまえば、そのダメージは計り知れない。そんなわけで、入園から1カ月も経つ頃にはおおよその大人は諦観してしまった。とはいえ、今でも2人を子供とみて、なんとか言うことをきかそうとしてくる者もいる。そんな連中を避け、この時ばかりは小さい体を駆使して、2人は自分たちだけの世界を作り上げていた。

今日も今日とて、自由時間が始まった途端、姿を消した叶湖を追って黒依がその場所へやってきた、というわけである。今は春と夏のちょうど間ごろの季節で、天気の良い今日はひなたに出ればさすがに肌の焼ける感覚があるが、木陰で居れば時折木の枝をくぐり、カサカサと音を立てる風が心地よかった。



「それとも異端だからこそ、矯正されようとしているんだと思います？ 異端を嫌うだなんて、日本人的習性かと思っただけです……どう思います？」

叶湖が言つて、膝の上の本を軽い音を立てて閉じると、まるで眩しいものでも見るように目を細めて、まっすぐ顔を向けた先の白い建物を視線で指した。

白い外壁に、茶色の屋根。そしてその上に見える十字の形。叶湖と黒依の通う、キリスト教を信仰する幼稚園の所有物である。

「そういえば、覚えています？ 以前、神様について、話したことがありましたっけ？」

叶湖がふ、と懐かしい昔話に浸るように問いかけた。

「……そうでした？……っ！？」

それに対して、何かを考える素振りを見せた黒依が僅かに小首をかしげる。瞬間、叶湖の小さな手がまっすぐに、むしろ何の迷いも無いことが不自然なほど、一直線に黒依の頸動脈を押さえた。

他人に弱点を晒すことなど、就寝中であっても有り得ない黒依が、反射的に身を強張らせるが、叶湖の手を振り払うことはない。

「話した、でしょう？」

叶湖がにっこりと、花の綻ぶような笑顔で黒依に問いかける。しかし、黒依は花は花でも、それが人を殺せる毒を持つことを知っている。

「……ええ、まあ。名前を出すのもおぞましいほど大嫌いだ、と」

やがて、黒依は自分の血脈に触れる、ひんやりとした冷たさに音をあげた。

「ええ、その通り。アナタと私が出会ったころ、私のことを、その神様と重ね合わせていたんですよね？」

尚も笑顔で追及する叶湖に黒依は諦めの混じった笑顔を浮かべて頷く。

「今は？」

ふと、短く問いかけられたことが理解しきれずに、黒依は叶湖の問いに首をかしげた。

「今は、どうだと言ったんです。その、『名前を出すのもおぞましいの』を信仰する中に入ってしまったわけですけど？」

黒依も、今度はしつかりと意図を把握できたようで、苦笑を浮かべたまま何かを考えるように視線を彷徨わせ、そして光を反射させている白い建物を見つめた。

「今でも、叶湖さんのことはアレのように思うこともありますよ。救世主<sup>メシヤ</sup>、らしいですから？ ……でも、前ほどアレが嫌いではなくなりました。」

黒依の返答に、楽しそうな笑顔で叶湖が首をかしげる。それを促しの意味ととって、黒依は先を続ける。

「別の世界で終わった、アナタとの関係を、1からはいえ続けられている。もし、これがアレのおかげであるというなら、僕は感謝せざるを得ません」

「神様に？」

感謝する、と言うくせをして呼称を呼ぶことすらない黒依に、その好奇心を満たすように、叶湖は瞳の中を覗き込む。

「まさか。 ……アレの思し召しかどうかはともかく、それに従ってください。 ……触れても？」

黒依がささやくように告げ、今まで一切拒むことなかった、自分の頸動脈に置かれたままの叶湖の手をとる。そしてそのまま叶湖を

引き寄せ……。

「っ痛」

逆の手で喉に爪を立てられ、黒依はわずかに声をあげて叶湖を見つめた。

「いい、なんて言つてませんよ。お手付き禁止」

今は赤くなっているだろうが、帰るまでにはキレイにソレもひくだろう、絶妙な力加減。相変わらず、人間の弱点を突く洞察力と翫り殺すための力加減は天才的だ、と内心でため息をつきながら、黒依は楽しそうにキレイな笑顔を浮かべた叶湖を見つめたのだった。

それを穏やかな気分で許せるようになった自分は、神への印象どころではない、もっと根本的な何かがああ頃とは劇的に変わったのだと。その『変わったもの』についてもある程度の予測が安易に立つことも含めて、黒依はとても満足していた。

幼稚園篇？ 神様（後書き）

読了ありがとうございます

幼稚園篇？ 葛藤（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年少組（4歳）

桐原黒依：上に同じ

桐原香里：黒依の母

桐原茜：黒依の妹

## 幼稚園篇？ 葛藤

その日、叶湖は幼稚園が終わると、桐原家へと訪れていた。理由は簡単。直が部活の合宿で家を空けざるを得ないため、まだ小学生の和樹では面倒が見きれないからだ。

「私、買い忘れを思い出しちゃって……ごめんなさいね。黒依と遊んでいてくれるかしら？」

エプロンの下の方で濡れた手を拭きつつ、香里はリビングに顔を出すと、黒依とならんでソファに腰かけ新聞を読んでいた叶湖に声をかけた。

もつとも、香里は叶湖がその内容を十二分に理解しているとは思ってもよらないのか、特に気にすることもなく、エプロンを脱ぎながら部屋の片隅のベビーベッドに寄ると、そこで寝ていた赤子……桐原家の長女である、茜を抱き上げた。

「何かあっても困るから、茜は連れていくわね。今までお料理してたから、鍋が熱いの。火は消してあるけど、危ないからキッチンにあんまり近づいちゃだめよ」

「はい、香里さん」

「大丈夫だよ、母さん」

普段から大人しい2人に軽い注意をすると、返った返事に安心したのか、やがて香里は家を出て行った。

「……テレビ消して下さい。うるさいので」

料理の音と、別の人間の気配がなくなり、シンと静まり返る部屋

の中で、黒依が今まで見ている風を装っていた教育番組が子供に笑いを提供しようと頑張っている。元々、ニュース番組以外に必要な感じていなかった叶湖は、黒依もそうであることを知っているため、すぐさまその騒音を消すことを命じる。

「ええ……何か飲みますか？」

子供の短い手では、ソファに座ったままで届かない距離にあるリモコンを取るついでに立ちあがった黒依が、叶湖を振り返って尋ねた。

「私の水筒にコーヒーが入っています」

「分かりました」

元々、ジュースを始め、おおよその子供が好む飲み物は好まない叶湖が飲む飲料といえ、コーヒーか紅茶であった。黒依も同じくとはいえ、桐原家は豆から挽くコーヒーを愛用していることもなければ、基本、インスタントかペットボトルや紙パックに入ったコーヒーが置いてあるだけ。かなりのカフェイン中毒な叶湖からすれば、そこがそもそも気に入らないし、何より子供2人のみがいる場面で冷蔵庫のコーヒーの量が減っていれば怪しまれてしまう。

実の家族や、幼稚園関係者の前では自らの特異性を隠そうともしない叶湖であるが、黒依の家族に対しては別であった。

リモコンでテレビを黙らせ終わった黒依が、叶湖のカバンから水筒を取り出し中身をそのコップに移せば、コーヒーのいい香りと魔法瓶にその温度を守られていた湯気が、黒依の鼻孔をくすぐる。

「……それにしても、めずらしいですね。叶湖さんが新聞を読まれ

るなんて」

新聞から視線をあげ、黒依に寄って注がれたコーヒーに満足そうに口をつけた叶湖に、問いかけながら、あらかた役目を終えた黒依はソファには座らず、それに腰かけた叶湖の足元に腰を下ろした。

前世ではいつの間にか定位置になってしまったその場所は、黒依の家族が居ないところでは今でも変わっていないかった。

「今の情報世界と、それを守る力。それから、経済のことには興味があるんです」

言外に、それ以外……平和と謳われる国で日々殺される罪のない人間のことや、他国で起こっている内乱や戦争はもちろん、著名人の恋愛関係などにはちっとも興味がないことを告げる。

「ああ、否、あまりに治安が悪すぎるのは少し困りますね。今は網を張り巡らせていなければ、武器もないので、自衛もままなりませんし。何より……アナタはアナタで無能ですから」

叶湖が笑顔で言い放った事実、ピクリ、と黒依が反応した。そう、その通りだ。

叶湖は自分と比べればあまりに脆すぎる、黒依の笑顔の仮面が崩れ去ったことに気分を良くしながら、その様子を見守る。

黒依は黒依で、そんな叶湖の様子に気づいていながらも、手を握りしめて顔をしかめた。前世で叶湖と出会った時、そして叶湖に堕ちた時。彼はすでに不本意ながらも身につけた暗殺技術で、その強さでは叶湖の情報を目的に集まるアングラを生きる者たち相手さえ、追従を許さなかった。暗殺者から足を洗って真、現役が集まっても



その壁を越えられないほどの強さ。黒依はもちろん、叶湖も、黒依の強さは認めていた。その強さが決して自分を害しえないことも、その強さでもって彼が自分の敵をなぎ払うだろうことも、叶湖は理解しきっていた。

もつとも、彼女を敵に回そうとした途端、それを察知できる叶湖の情報収集能力を前に、本当に叶湖の前に立ちふさがるだろう相手など、皆無も同然だったのだが。

ところが。

今、現在。叶湖と黒依には、そのどちらもが欠けている。黒依の絶対的な強さも。叶湖の、支配的な情報収集能力も。黒依は身体的にはまだ5歳。成長期以前に、身体すべてが安定しきっていない状態で、能力を奮う以前に、強くなるための訓練すら満足に行えない。万が一にも、叶湖を害そうとする者に遅れを取るかも知れない。その不甲斐なさは、日々、黒依を苦しめていた。もつとも、叶湖はそのことも分かり切った上で、黒依を追い詰めるような言葉を発したのではあるが。

「叶、湖さん……。ごめんなさい。すみません。……すぐに、必ずすぐに、アナタをお守りするための力、を。必ず……」

グラグラと瞳を揺らし、その奥に闇を過らせる。出会った時と変わらない。闇の職業から足を洗ったところで、黒依の根本から抜けない、その特性。彼が傷ついたときに見せる癖だ。

「まあ、特に今はアナタ以外の人間に興味はありませんし。この体で、別の人間を抱えるにも面倒が増えるだけですから。……もつとも、私が気まぐれなのはアナタもよく知っていることでしょうか。先がどうなるかなんて、分かりませんけれどね？」

「叶湖さんっ」

呼び声に僅かな悲痛を含ませた黒依を置いて、叶湖は静かにソファから降りる。どこかへ消えてしまふのか、と強い不安をにじませたままの黒依が自分も立ち上がるうとするのを、花を摘みに行くだ

けど、と言い聞かせて1人、リビングを離れる。

パタン

静かにトイレのドアを閉め、叶湖は機嫌よく装っていた表情を消した。彼は彼で、表情を偽る黒依の瞳の色すら読めちゃう叶湖だが、黒依は黒依で他人の心の機微を読むのには長けている。暗殺者は暗殺者でも、ただ殺すだけではなく、拷問を利用した情報収集や、寝ることで相手を罠にかけること、それから……誘拐など、本当に『暗』殺かと疑いたくなるほど手広くやっていた大きな組織であったので、黒依の対人技術はかなり高かった。相手を観察し見抜くことに関しては、猟奇殺人者で、弱点を見抜く力や生死ギリギリを判別する力、決して意識を飛ばせず拷問し続ける力などを持つ叶湖が黒依に劣ることはなかったが、他は完敗。また、叶湖が前世の体質を引き継いだことを鑑みれば、黒依もそうであるのだろう。どういうことかと言えば、先ほど取り乱していた黒依であるから、叶湖の表情を読めなかったに違いないが、今、叶湖が心中のままに舌打ちなどをすれば、防音効果のない桐原の家のこと、黒依にははつきり聞こえてしまうに違いない。

身体能力……おもに筋肉の発達が必要不可欠である、戦闘能力でこそ、黒依は無能と言えるが、その他の体の成長を必要としない能力に関しては、黒依はすでに一般人を軽く凌駕しているに違いない。昼と変わらず見える夜目、聴覚も嗅覚も獣並みに違いない。本能レベルの問題である、反射も、相当素早いに違いない。……もつとも、いかに素早く敵の存在を察知したとすれ、投げたナイフが届かない身体能力であれば、やはり無能には違いないのだが。

叶湖はそんな、とりとめのないことを考えながら、ぐしゃぐしゃと髪を掻きあげた。

前世のままの、ゆるく天然のパーマでうねる黒い髪。さらさらと、指通りのいい黒依の髪を何度か羨んだものだが、いつにも増して、指に絡むそれが自分をイラつかせる。

安易にため息できない状況で、自分を鎮めるのも大変だ。とくに用があるわけではないのに、トイレに引き籠もらざる得ない状況に、さらにイラつく。

そののそもそのきっかけが、あまりにも黒依が容易に口にだした『母さん』であるとは、おそらく黒依も気付いていないだろう。そして叶湖自身も内心で呆れてしまう。

叶湖はなんとはなしに、自分の家庭を思い浮かべた。おそらく、自分が帰るべきと周りが思っているその家は、今日は無人に違いなし。母親と父親の都合など聞きもせず、自分が家を空けると言うだけで、勝手に桐原家への話を付けてしまっていた直のこと。普段、どれほど両親が家に帰っていないのか、分かるというものだろう。

以前は手伝いが何人が出入りしていたが、あまりの叶湖の特異性に、まさか雇い主の娘を職場内で気味悪い、と罵ってしまう間抜けばかりだったので、それらも直の手によって追い出されてしまった。その上、自分が世話をするといい張られてしまえば、家庭内に興味のない父・賢司のこと、それ以来手伝いが家に入ることはなくなつた。

そんな直でこそ、後妻であり、兄2人にとっては義母である麻里

亜を母と呼ぶことこそないが、賢司のことは父と呼ぶ。二男の和樹も、直と同じで賢司のことは言葉は悪いが、父親を表す名詞で呼んでいる。

ところが。両親ともに血のつながりを持つ叶湖本人が、母と、父と、その呼称を使ったことは、『嘘々叶湖』の記憶が目覚めてから、1度もなかった。そして、自分を可愛がる、兄2人でさえも。

叶湖にとって家族は2番目の家族であり、他人である。その事實は揺らぐことはなかった。

そんな叶湖の前で、黒依はあまりにも母、という単語を口に出す。もちろん、表面上穏やかな黒依であるし、面倒回避のため、叶湖の関わりないところではその穏やかさを保っているわけで、叶湖も分かってはいた。事実、始めはぎこちなく発せられるその呼称を、何度か聞いたこともある。

それなのに。

黒依の妹の誕生を機に、叶湖の中で何かが危機感として現れてしまった。

黒依を誰にも渡したくはないと。その、独占欲と共に、彼に家族と過ごす普通の幸せを与えるべきとする、自分ですら信じられない、愛しさ故の気持ちだ。

黒依の両親については、叶湖は何も知りえなかった。出会った当初、黒依について調べた時に出てこなかったことを考えれば、捨てられたか、亡くしたか。ともかく、それほど関わりは無かったに違

いない。

しかし。

黒依の『妹』。そのファクターは、叶湖自身も印象深い。それほど、黒依にとつて大きな存在であった。どれほどかと言えば、それこそ、彼が叶湖に出会うまでの、彼のすべてだったのだ。

なぜなら。彼は、彼の妹を誘拐した組織に脅され、妹の命の保障と引き換えに彼もまた、組織の1員となったのだから。もともと、彼が組織の闇にどっぷり浸かる頃には、妹はあっさり殺され、やがてそれを知った彼は組織を抜けるわけであるが。叶湖は自分と出会った当初の黒依が、相当な自殺志願者だったことを思い出した。それも、妹に会いたいのが故なのだから、彼の妹への執着は相当であるといえる。

そんな彼が。もう1度妹を手に入れた。もちろん、組織に誘拐され、利用され、殺された彼女ではないが。それでも。

叶湖はなんと面倒なことか、と嘆きたくなる。ジレンマなど、本能がままに生きる叶湖は久しく抱いた記憶がないというのに。

そのモヤモヤと、それからストレス故、普段より強く沸き起こる衝動の抑制に、叶湖は常に苛立っていた。

叶湖の内に沸き起こる衝動。……彼女の1番強い本能とも言えるだろう、嗜虐性であった。前世では、その行き先として散々の拷問の末、猟奇的といわれる殺人を続けてきた叶湖だが、黒依と出会ってからは、叶湖が手をそれ以上汚すことに彼が拒否を表し、そし

て彼以外に叶湖の興味が向けられることを嫌がったため、その方向は常に黒依に定まっていた。

が、生まれ変わってからというものの、それも思うようにいかない。叶湖に対しては抵抗しない黒依を害すことなど、さすがの叶湖でも簡単である。前世と違い傷ひとつない身体を傷つけることに、白を汚す恍惚然とした期待を抱くのも事実だ。とはいえ、周りに一般人が多すぎるこの状況で、黒依に目立つ傷をつけるのは、さすがにまじくことくらい叶湖も分かっている。もちろん、黒依以外に危害を加えるのは、人体の弱点を知りつくした叶湖とはいえ5歳の身体では難しい。

いくつもの望みや、欲望に、これ以上ないほど心中を掻きまわされながら、叶湖はため息すらついていられない状況にまた1つ、眉間のしわを増やすのだった。

そんな叶湖が、ようやく表情の仮面を整え終わってトイレを出るのは、買い物を終えた第三者が帰った後で、結局長い不在の理由を黒依に問い詰める機会を与えぬまま、叶湖は飄々と桐原家の日常へもぐりこんで行った。

幼稚園篇？ 葛藤（後書き）

読了ありがとうございました。

幼稚園篇？ 恐怖（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年少組（4歳）

桐原黒依：上に同じ

名無し：ガキ大将



## 幼稚園篇？ 恐怖

「おまえ、いつつもムカツクんだよ！ 先生困らせてばっかの、悪子のくせに！」

それは、一瞬だった。叶湖が、今の4歳児は言葉が思いのほか達者なのね、なんて普段会話をしないものだから気付かないくだらないことに気を取られている間に、目の前の“ガキ大将”然とした男の子が拙い蹴りを放つ。一応、犯罪者としてそれなりの反射神経や動体視力、身のこなしをもつ叶湖であるので、それは危なげなく避けた。  
だが。

「つきやつ。やあああ。ふえええええつつ」

泥だらけの靴が蹴りあげると同時に、地面の砂を巻き上げたのだ。風によつて叶湖へと迫るソレ。咄嗟に目を瞑った叶湖は、しかし間に合わなかった。

「叶湖さんっ!?!」

目に砂が入った痛みで、まるで子供のように泣きわめく叶湖に、当の犯人は呆然とその様子を見つめる。まさか、いつも大人しく、気味悪いとすら思っていた少女が、この程度のことまでここまで恥も外聞もなくおお泣きするとは思ってもよらなかったのだろう。

だがしかし。叶湖の泣き声を聞いて一瞬と間をおかず、4歳の平

均をはるかに超えた速度で、ガキ大将と叶湖の間に割って入った黒依には、叶湖が泣きわめく理由など悩むまでもなく明らかであった。

叶湖は、酷く『痛み』を恐れているのだ。

その恐怖心と、彼女の嗜虐趣味と、発症はどちらが先だか分からない。しかし、彼女は痛みが怖いだからこそ、他人を痛めつけ、その姿を目に焼き付けることで、自分の中の警戒心を刺激し、常に自己が痛みと離れたところにあるように、警戒心を養って来たという。逆に、彼女の他人に対する嗜虐心から、己に対する痛みに敏感になつとも言えよう。

もっとも、先か後かなど、どうでもいい。大事なところはそこではないのだ。

叶湖は、自己の中で発症し、そして自分で自分を追い詰める趣味の暁に、自分の精神を病ませていたのだ。彼女の中での『痛み』に対する恐怖心は、精神を刺激し、彼女が痛みを感じた瞬間、それは危険信号として体中を駆け廻る。

要するに。

彼女は己の性質から、人の数倍、痛みを感じる体質を持っているということであった。

「ふえええ。痛い痛い。とれなつ。黒依えつ」

出会った当初から、痛みを感じると、その恐怖のあまり子供返りするようで、普段の彼女では考えられないほど、黒依に泣いてすりつく様子に、黒依は僅かに気分を高揚させながらも、叶湖の涙でぬれた顔を見れば、その気分などどこかへ吹き飛んでしまった。

「こすらないください。今、取って差し上げますから」

「っふええん。痛いよおおっ」

黒依の言葉など聞こえないように泣き続ける叶湖の顔を固定し、涙の分泌量がやけに多い、右目に唇を寄せる。叶湖が反応するより早く、軽く目を開かせると目の端の異物を舌で取り除いた。

「ふっ。ふえっつ……」

「どうです？」

目に見えて落ち着きを取り戻した叶湖をもう1度、その顔全体が見渡せるまで距離をあけて問いかける。

「ん、大丈夫」

言いながら、泣きつかれたのか、身体を黒依に寄りかからせたままの叶湖を軽く抱きしめて、黒依は背後の少年を睨みつけた。

一瞬……ではなかった。黒依本来の速さを考えれば、新幹線と徒歩ほどの差があるかもしれない。それほど遅くではあったが、しかし、相手の子供にとっては追い付かない速度であった。

黒依は少年まで距離を詰め、そしてその両手を相手の首にかけた。

「っ、ぐっ……っ」

確実に主要の血管を止めるそれに、みるみるうちに少年の顔色が悪くなる。

「黒依、駄目です」

が、しかし、その殺人行為は叶湖の言葉で達成されることはなかった。

確実に血管を狙った犯行に、首周りに目立つ後が残らなかったのを確認すると、叶湖は地面に力なく座り込んで、恐れるように2人を見つめる少年に近寄り、その首の後ろへ手刀を落とした。途端、クタリと力が抜け、地面に倒れ込む少年。

「叶湖さん……っ」

「ここで、これを殺して、今の私たちにどれほどの処理ができる？ 私は情報をコントロール術を持たず、アナタはアナタで死んだ彼を運ぶ筋力すらないのでは？ バラすにしても、その方法は？」

力はおろか、道具もない。アナタが捕まりたいなら自由ですが、私まで巻き込まれるのは激しく迷惑です。……私を害されて怒るのは、ともかく、それでアナタまでさらに私に被害を持ってこられては、鬱陶しいにもほどがある。役に立たないのを我慢しているだけでも感謝してほしいくらいなのに……これ以上面倒をかけるなら、捨てますよ？」

いつもの叶湖であるならば、機嫌が悪い時特有のそれはそれは綺麗な笑顔と共に、相手を追い詰めるような言葉を吐くハズであるのだが、今の叶湖にはその表情もない。未だ、泣いた後の倦怠感でも残っているのか、終始気だるげなまま、面倒臭そうな表情で黒依を見つめる。しかし、黒依にとってはいつもの笑顔よりも、まさに今彼女の心情を表していると見える、その表情により、心を深くえぐられる気がした。

「申しわけ、ありません……」

呆然と呟く黒依に、叶湖はもういい、とばかりにため息をつき、

その場から身を返す。

「帰ります。ソレについてはある程度の記憶障害を起こすよう殴っておきましたけど、まだ覚えているようならもう1回くらい落としておいてください。それから、今回の制裁などくだらないことは考えないよう。……今のアナタじゃ無理ですから。私が後始末をつけます。それでは」

叶湖は要件だけ告げると、本当にスタスタと立ち去ってしまった。その後ろ姿を何とも言えない表情で見つめる黒依が、ギリツと手を握りしめた。白い手のひらに僅かな赤がにじむ。

「力が、欲しい……なんて。こんなにも……。アナタを守る、力が。……人を、殺すすが……。僕は、どうすれば……」

黒依の中で葛藤として荒れ狂っていた嵐が一段と大きくなる。叶湖に捨てられる。その事実を、決して彼が受け入れることはできなかった。

幼稚園篇？ 恐怖（後書き）

読了ありがとうございました。

幼稚園篇？ 母親（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年中組（5歳）

彩藤麻里亜：叶湖の母

彩藤直：叶湖の兄

彩藤和樹：叶湖の兄

## 幼稚園篇？ 母親

「こんな、こんなものでっ……」  
ぐしゃり、と直の手の中で、はがき大ほどの紙切れが音を立ててつぶれた。

今日は直の部活が休みのようで、比較的早い時間に迎えに来られた叶湖は直と並んで家まで戻ってきていた。

そして、ひんやりとした空気の流れるリビングで、こげ茶色のテーブルに乗った白い紙に気付いたのだった。

特に何の感慨もなく、テーブルに近づいて紙を取り上げようとした叶湖より少し早く、半ば奪うように直がその手紙を取り上げたのは、昼間に戻って来ていたらしい、母からのものだと思っただけからだろうか。

兄2人、特に真面目である直は、育児放棄をした叶湖の母、麻里亜を母親であると認める様子は全く無いようで、むしろ、いっそ家に近づくなとばかりに、とりわけ叶湖と距離を取らせるようにしていた。

もちろん、直が指定するまでもなく、あちらも叶湖と関わるつもりなど無いのだろうか。

直が勢いよく手紙を取り上げた拍子に、その裏に重ねてあったらしい、万札が2枚、テーブルの上を泳いだ。

「これは？」

普段、最低限の養育費は、直が所持している通帳の口座へ直接振り込まれているらしい。それが、母からか、父からかは知らないが、ともかく、今まで現金をそのまま渡されたことはあまりなく、叶湖は直を見上げて首をかしげた。



「……なんでもない。……こんなもの」

直はそれすら丸めて捨ててしまいたいそんな勢いでお金を拾い上げると、叶湖の目から隠すようにした。

「手紙、見せてもらえますか？」

「叶湖には関係のない内容だったんだ」

いたって静かに問いかける叶湖に、直もようやく落ち着きを取り戻したのか、丁寧に答える。

しかし、いつもはそれで納得する叶湖も今日ばかりは首を振った。

「それ、私の誕生日プレゼントでしょう？ それなら、私が預かります」

「……叶湖は、こんなものが誕生日プレゼントでいいのか？」

残された現金の意味を理解しきっている叶湖に、直は腹の中でくすぶる熱を思い出したように、しかし冷静を装って尋ね返す。

果たして、現金の意味はその通りで、今日、叶湖は5歳の誕生日を迎えた。そして手紙には、『誕生日おめでとう』の言葉すらなく、ただ、現金を叶湖に渡すようにだけのメッセージ。さすがの直が、読んだ直後に手紙を握りつぶすのも自然というものだろう。

「こんなもの……。確かに手抜き感は否めませんが、どうせ直さんのことですから、普段の私の様子など、伝えていないんでしょう？ それなら、私の趣向など知れているハズもありません。逆に一般的な知識で絵本やぬいぐるみなど買ったところで、邪魔なだけですから、ある意味効率的とは思いますが。かといって、今更、この家に戻って来られた方が迷惑なんですから、私の好みを知らないことに文句もありませんし。それなら、貰えるものは貰っておきます」

叶湖の言葉に直が僅かに眉を寄せる。

「欲しいものがあるなら、少しくらい買ってあげる。あの女からの金に頼るほど、困っていないだろう？ これは、返しておくから」

その言葉に、しかし叶湖は首を横に振った。彼女は今、とても欲しいものがあるのだ。

「勝手なことをされては困りますね。もうしばらく、せめてどうしても必要になるまでは構わないか、とも思いましたけど。いろいろ欲しいものがあるんです。高価なので、無理に強請ったりはしませんよ。自分ですべて準備しますから」

あくまで譲らない叶湖に、直はすっかり不機嫌な様子のまま、叶湖のプレゼントを引き渡した。本当は、5歳児に与えるような額でないのは分かっている。しかし、叶湖のことを考えれば、言う通りにするのが1番だとも思えたのだった。

それは、彼女が自分より深く考えることができる事実を知り、認めてしまっているからでもある。

「ただいまーっ！」

と、丁度そのとき、和樹が帰ってきたのか、玄関から声が聞こえた。間もなく、元気よく足音を立てながら、リビングへとたどり着いた和樹は部屋へ入ってくる。どうやら、学校が終わってそのまま遊びに行っていたようで、背負っていたランドセルを床に投げるように肩からおろした。

「おかえり。早かったな」

「なんだよ。叶湖の誕生日だからって、絶対遅くならないように言ったのは兄貴だろ？」

意外そうな直の言葉に、口を尖らせる和樹の姿に、直の表情が僅

かに緩む。

「ってか、なんで叶湖、お金持ってんの？ うっわー、しかも諭吉じゃん。俺も欲しい！」

「……麻里亜さんからのプレゼントだ」

「……なんだ。じゃ、いらない。ってか、叶湖は欲しいの？」

叶湖の手に握られたものを目ざとく見つけ、和樹がはしゃぐが、直から出所を告げられた途端、あからさまに眉を寄せて拒絶した。

「欲しいものがあるんで」

「ふうん。ま、どーせ、また難しいこと考えてるんだろ？ 俺わかんないしー」

叶湖の言葉に、早々に白旗を振った和樹は、もう興味がないとばかりに叶湖から目をそらす。昔は、他人と大いに違う叶湖に対し、異質感を感じるのか何かと反発することも多かった和樹であるが、ある時、叶湖にちよっかいをかけた際に一方的に殴りつけてしまい、叶湖の体質故におお泣きされてしまったからは、叶湖の異質性よりも、兄としての使命感が上回るようになった。人一倍責任感の強い直の影に隠れがちではあるが、和樹も和樹で末の妹をひどく可愛がっているのである。

「和樹、何か飲む前に手荒いうがいをしてこい。叶湖も、それを仕舞ったら同じように」

「へいへい」

「……はい」

直の言葉に、和樹と叶湖が、それぞれ指示されたように動き出す。なんだかんだ異質であったり、生意気だったりする弟妹の素直な一面を見れば、自分の兄としての使命感にある種の達成感が付随する気がして。直は2人を見つめて苦笑をもらすのだった。

「とりあえず、さきに元手を。その後、ある程度まで増やした後には揃えましょう。……私の武器と、それから城を。……いつ、また一人になっても構わないように」

与えられた1人部屋に戻り、叶湖は呟く。気付かない間に、握りしめられた札に皺が寄っている。

「私なら……大丈夫」

それから叶湖が事あるごとに貯金をし出したのは、兄弟にすぐ知れ渡り、また、黒依には知られることなく進められた事実であった。

幼稚園篇？ 母親（後書き）

読了ありがとうございました。

幼稚園篇？ 誕生（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年中組（5歳）

彩藤和樹：叶湖の兄

## 幼稚園篇？ 誕生

「叶湖、聞いた？」

幼稚園から帰宅し、自室で読書に勤しんでいた叶湖は、わざわざ部屋を訪ねてきた和樹に首をかしげた。

「何を？」

「黒依ん家のこと！ 今日生まれるみたい！」

視線を合わせて聞いていた叶湖だが、す、と目をそらす。

「そうですか」

黒依の母、香里の妊娠が発覚したのは、春も終わりの頃、叶湖の誕生日が済んだあたりだったと思う。今は冬。10月10日と言えば、そろそろなので何もおかしいことはない。

「オレ、抱かせてくれよ、って頼んであるんだ。叶湖みたいに可愛い女の子だといいな！ ま、茜くらい元気でも困るけど」

黒依の妹、茜であるが、まだ3歳だというのに、立ち歩きを始めた当初から、随分なヤンチャ具合らしい。うれしそうに香里が語っていたのを思い出す。

最近、サラリとタラシ発言をするようになった和樹に将来の心配をしつつ。叶湖は首をかしげた。

「女の子、なんですか？」

「うん！ ま、産まれてみないと100%とは言えないらしいけど、そーらしいよ！」

そうですか、と先ほどと同じ返事を返し、叶湖はもう1度本と向き合った。和樹は新しい命の誕生が純粹にうれしいのだろう。

直とは違い、和樹は実の母親の記憶が曖昧である。そんな和樹が、『母親』に対して幻滅せずにいれたのは、一重に、彩藤家と付き合っている桐原家の母……香里が、和樹にとってもいい母であったからに違いない。

黒依の末の妹を、自分の妹のように感じている和樹を、叶湖はそれ以上見続けることはできなかった。

「ちえー、なんだ。叶湖は赤ちゃんより、本のが好きなのかよ」  
面白くないのか、和樹は文句をいいつつ、部屋を出て行ってしまふ。その後ろ姿を見送って、叶湖は本を閉じた。

どれほどの知識が詰まった本でも、どれほどの面白さを秘めた本でも。今の叶湖の気持ちでは、読む気になれない。

茜が生まれた当初。叶湖が抱いた気持ちは焦燥だった。それゆえに、今でも茜に対し、いい印象で接することはできない。それでも黒依の茜に対する態度を見るうち、次第に叶湖の心は落ち着いていった。確かに、黒依は茜に優しく、兄たらしんでいた。しかし、彼が前世での妹と茜とを混同していないことはハッキリと分かったからである。

しかし。

茜の時よりも感じる焦燥感に、叶湖は自分の胸を押さえつけた。

「……また、妹……」



まだ100%確かとはいえないらしいが、おそらく妹であろう。  
叶湖は、その赤子が、茜と同じであるとは思えなかった。自分の胸の痛みが訴えることが現実となってしまうたら。

叶湖は今夜生まれるだろう、彼の妹を、和樹と同じく望むわけにはいかなかった。

幼稚園篇？ 誕生（後書き）

読了ありがとうございました。

幼稚園篇？ 進路（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：年長組（6歳）

桐原黒依：上に同じ

彩藤直：叶湖の兄

桐原香里：黒依の母

桐原杏里：黒依の妹

## 幼稚園篇？ 進路

咲き誇る梅。にぎわう園内。

「卒園おめでとう、叶湖」

今日、叶湖は幼稚園の卒園式を迎えていた。

「黒依くんも、おめでとう」

「ありがとうございます」

式が終わったところで、黒依と共にそれぞれの家族と合流する。

叶湖は声をかける和樹に他人行儀な一礼を返すと、す、と目をそらした。視線の先にあるのは、先月、1歳の誕生日を迎えたばかりの、黒依の末の妹である。杏里と名付けられた彼女は、春の陽気の下で気持ちよさそうに寝入っていた。

「おめでとう。もう卒業なんてあっという間ねえ……。と、いつても、叶湖ちゃんも同じ小学校だものね。これからも黒依と仲良くしてやってちょうだいね」

「こちらこそ」

しみじみと時間の流れについて語る香里の言葉に社交辞令を返しながら、内心でため息をつく。叶湖も黒依も、春からは地元の公立小学校へ通うことになっていた。幼稚園でこそ、2人はある程度の異端や自由が認められていた。しかし、小学校へ進学すれば、それは少なくなるに違いない。そして、更に進学すれば、尚更。自由時間が減り、決められたカリキュラムにそって学びを進める。しかも、その学びの内容が、ひらがなや足し算から始まるというのだから、

叶湖が毎日頭痛に悩まされるだろうことなど、簡単に想像がつく。結果として、叶湖がため息を抑えられるハズなど無いのであった。

「そつえば、直くんは来年から大学生よねえ？ どこへ進学するんだっけ？」

「帝都大学の医学部へ……」

「まあ、帝都大のそれも、医学部！？ 随分優秀なのねえ……。お医者様なら、お父さんの後を継ぐのかしら？」

国内随一の国公立大の名前を受けて驚く香里の無邪気な問いに、直は苦笑する。父、賢司については、過去の女をひと思い続けた拳句、仕事に逃げているのが現状とはいえ、それでも必死に支えようとしている直である。しかし、二男の和樹は、なかなか家にも戻ってこない賢司をあまりよく思っておらず、直が医学部への進学を伝えた際にも大ゲンカが勃発したのは記憶に新しい。

それを受けての苦笑であろう、と叶湖は静かに伺いながら、自分に近づく黒依に視線を戻した。

「と、いつことはこれまで以上にお兄さんの帰りが遅くなるんですかね？」

「さあ。どちらにせよ、もうそろそろ過保護な扱いはいらないのですけれど」

困ったように呟く叶湖に、黒依は苦笑する。

「まだ小学生ですし、叶湖さんのお兄さんたちは、随分叶湖さんを可愛がっているようですから、しばらくは我慢することになるのでは？」

「私を可愛がるなんて、随分と奇特な兄2人ですよ」

「そうですか？ 前だって、叶湖さんの周りは叶湖さんを慕っている方が集まっていたでしょうに」

「あれは慕っていたのではなく、崇高していたんですよ。普通から踏み外した人が何故か私に寄ってくるのはアナタも知っているでしょう？ けれど、兄2人は至ってまとも。普通よりもさらに真面目なくらいだと思いますよ？ なんて。普通じゃない私が普通を語っても、何の説得力もないかもしれませんが」

叶湖の言葉に、確かに、と黒依も1つ頷く。前世で叶湖の周りに集まっていたのは、毒薬から拳銃、子供のおもちゃまで扱う裏商人であったり、生粋の異常性愛者……死体収集家であったり、快樂殺人者であったり、真性マゾヒストであったりと様々である。そのどれもに共通して言えるのは、普通ではないということのみ。叶湖は、なぜかそういう人間に好かれる性質を持っていたのだった。

ちなみに、同じく普通からは逸脱している黒依から見れば、叶湖の兄2人は至ってまともな人間だといえる。黒依はしばらく考えた後で口を開いた。

「なら、多分、お兄さん2人の愛は親愛なんでしょうね。アナタが妹であるから、無条件に可愛がっているんですよ」

「それは、聞こえがよくもあり、悪くもありますね。よく言えば、それは無条件。見返りなど求めていないということ。悪く言えば、血のつながりさえあれば誰でもいいということ、ですか？」

「事実、そうかもしれませんし、違いかもしれない。それは、僕たちには分かりません。けれど、叶湖さんは随分変わってられますから、その可能性もまた高いかもしれません」

黒依は叶湖が今の家族に何の興味もないことを知っている上で、遠慮なく告げた。叶湖もまた、黒依の言葉に興味ありげな笑顔を浮かべるだけである。

「それでも、僕は叶湖さんが叶湖さんであるからこそ、叶湖さんを愛しています。……そういう結論で構いませんか？」

「何か、恩着せがましいですけどね。あと、それから……知っていますよ、そんなこと」

黒依に向かってほほ笑みかけ、叶湖は春風を受けて揺れる髪を掻きあげた。

新しい季節がめぐってくる。風が運び告げる春の訪れが、今の叶湖にはとても心地よかった。

幼稚園篇？ 進路（後書き）

読了ありがとうございました



小学生篇？ 才能（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学1年（7歳）

桐原黒依：上に同じ（6歳）

## 小学生篇？ 才能

叶湖と黒依が小学校に入学してある程度の時間が過ぎ、周りの子供たちはあと1カ月ほどで訪れる夏休みに心浮き立つ様子で毎日を通り過ぎていた。

「それじゃあ、この間の授業でした、算数のプリントを返します。呼ばれたら前に取りに来てくださいね」

にこにここと、すっかり子供対応な担任を横目に見て、叶湖はわずかにため息を落とした。精神年齢は三十路に突入する叶湖のこと、さすがに『おはじきの個数』を数える問題で間違えようがないのだ。

とはいえ、小学校の1年生といえば、クラスの中に半々程度の割合で論理的思考能力が備わってきた者と、そうでない、未だ直観的思考能力で物を考えてしまう者とが混在する。ただ、産まれの早さの問題だけであるので、できが悪い悪くないの基準ではなく、学校のカリキュラムは双方に対応できるように組まれてしまっている。どういう意味かといえば、3たす8の計算を行うのに、いちいち『算数セット』などという優しい名前のついた箱の中から、おはじきを3個と8個で取り出し、改めてすべてを合わせて計算するという、叶湖にとってはもちろん、産まれるの早い者にとっても、それなりに手間のかかる作業を行わなければいけないということであった。

もともと、異端扱いに慣れてしまった叶湖と、それから黒依が教師の言うことを全く聞こうとしない子供であるのは小学校でも同じことであつたが。しかも、授業中に騒いだり、立ち歩いて授業を妨害するのではなく、ただ静かに授業に参加するものの、指示を受け付けられない……それでいて優秀であるので、教師にとってはこれ以上扱い難いことのない生徒であるうことは明らかである。

結果として、授業中15分で終わらせることを科されたプリントをわずか1分ほどで終えてしまい、その裏面がc言語で埋まってしまっているのは仕方のない結果ともいえる。もつとも、それをおそらく理解しえない教師にしてみれば、c言語とも分からないかもしれないが。

さて、2人の異端は勉強面ではなかった。すでに、黒依の身体能力は未熟とはいえ、小学1年生のレベルではないのである。黒依もある程度の手加減は行っているが、それでも黒依の身体能力が突出しているのは誰の目に見ても明らかであった。

「……先生、気分が悪いので退室します」

授業中、チラチラと自分の腕時計に視線をやっていた叶湖が、プリントを受け取った際に1言告げ、教師の言葉を待たずにさっさと教室を出て行ってしまった。

本来であれば、教師も勝手に消えた7歳児を呼びとめて諫めたり、集中力の途切れた生徒たちがざわつき始めたりするのであるが、この2カ月ほどで毎度お馴染みになってしまったその光景に、誰も気を止めることはなかった。

黒依は教師としてはどうなのか、と内心で考えつつも、行動のし易さを優先して『担任無能説』に気付かなかったフリを通す。

「すみません、僕も気分が悪いので休んできますね」

黒依もそれだけ一方的に告げるとさっさと叶湖の後を追うため、

教室を離れた。

2人の生徒が消えた教室では、それでも変わらず授業が続行されている。これが教室崩壊の1歩なのかもしれないと、内心で苦笑した。

黒依が図書室に入ると、叶湖は教室の奥、入口付近からは死角になっっているところのパソコンと向き合っていた。

「どうですか？」

「悪くないです」

叶湖は画面から視線を外さず、問いかけた黒依に答えた。

叶湖が今にらみ合っているのは、株の取引のサイトである。7歳になると同時に、叶湖は今までの貯金……その大半が親の自己満足に与えられたものであるが、それを使ってデイトレードを始めた。

これも、叶湖の情報収集能力の為せる技であるが、叶湖はそれだけでなく、今現在自分が取引に使っている株のレートを腕時計に送信する機能をつけ、授業中でも株価の上がり下がりをチェックできるようにしていた。

結果、叶湖はちやくちやくと自分の資産を増やし続けている。

「来年の今頃には私の城が完成し、再び網の目を張り巡らせることができるようになると思います」

自らの武器を手に入れつつある状況で、確実に生き生きとし始めた叶湖をほほえましく見つめつつ、黒依はわずかに胸の痛みを感じる。

「叶湖さん……」

叶湖が自らの能力を遺憾なく発揮できるようになれば……叶湖は黒依と出会う前、情報という力なき力を操り、アンダーグラウンドで見事に生き抜き、そして征服者として君臨していたようになれば。叶湖は実際、現実世界で危険に直面することが無い限り、危険をかなり早い段階で察知でき、それを回避することが可能なのである。

黒依は自分が叶湖にとって本当に役に立たない存在であるように感じ、心に押し込めていた黒いものが溢れそうになる。

「黒依……アナタは、私がアナタの能力をよほど欲していると思っているようですけれど……。そもそも、私はヒトを捨てた覚えはありませんし、ただの拾得物だとか、ペットだとかに、曲芸レベル以上の何かを期待も望みもしていませんよ。アナタが多少身体能力に優れていたところで、それは副産物以外の何物でもありませんし、私はそれが目当てでアナタを捨てたのでもありません。……言いませんでした？ 顔と声が好みだったので」

叶湖が回転いすを僅かに軋ませ、黒依を振り返った。

「それでもっ……僕は、アナタが傷つけられるかもしれない状況で、黙って指をくわえて見ていることなんて……。僕は力が欲しいんです……アナタのために使える力……」

黒依の言葉に、叶湖は浮かべた笑みを深くした。彼女が気分を害したことを知り、黒依が僅かに目を見張る。

「私の為、だなんて。押し付けられても困りますねえ……。アナタはせいぜい、私のモノが傷つけられないように、アナタ自身のお守

をしていけば十分ですよ。私は自分のことくらい、自分で面倒見られるつもりですので。むしろ。正当に報復できる機会に横やりを入れられては困りますよ、黒依」

叶湖の僅かに喜悦が入った笑みに黒依は2年ほど前、叶湖を泣かせた子供を思い浮かべる。あの日からひと月もしないうちに、父親の会社は倒産し、母親は詐欺にあい、夜逃げするように転校する八メになった、彼。転校した後のことは誰も知らないであろうし、黒依自身、知ろうとしなかった。なぜなら、精神的苦痛よりも肉体的苦痛を与えることに歓びを感じる人間である叶湖が、本人以外の親族の社会的地位の抹消程度で満足するはずがないことを知っているからである。

「……すみません」

いつも通りの叶湖の姿に、それでもいくらか心が安らぐのを感じながら、黒依は自分の頬に間もなく添えられた叶湖の白く細い腕をたどり、その顔を見つめる。

彼女は笑顔で黒依に告げるのだ。

「アナタは私のモノなんですから。……自覚なさい」

そして、それは黒依の存在証明となる。

黒依は確かに叶湖の掌から与えられるぬくもりに安堵していた。

小学生篇？ 才能（後書き）

読了ありがとうございました。



小学生篇？ 装備（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学2年（8歳）

桐原黒依：上に同じ

## 小学生篇？ 装備

「ようこそ、私の城へ」

マンションの入り口のドアをくぐったところで、叶湖が黒依を振り返り、微笑んだ。

やっとのことで手に入れた、自分だけの城に大層満足しているように、その笑顔にいつもの偽りは見られない。

「本当に、およそ1年で出来上がってしまうなんて」

黒依は目を見張りながらも、叶湖に促されるままに彼女の城を奥へと進む。

2人の通う小学校からも、それぞれの自宅からも、電車で5駅ほど離れた場所。交通の便は悪くないが、都心に比べるとずっと静かで、閑静な住宅街である。

その一角にある、高層マンションの最上階にほど近い部屋の一室。それが、叶湖曰く彼女の城である、新しく手に入れた彼女の別荘であった。

叶湖がデイトレードを始めて1年と少し。ちやくちやくと貯め込んだ資産はその一室と、そして室内の装備を兼ね備えてまだ、余りあるものであった。

装備。それは彼女の私室として備えられた部屋のパソコンやその周辺機器である。

もちろん、普通であればそれほど大きな買い物も、まだ10にも

満たない子供ができるわけがない。しかし、叶湖であればそれが可能であった。どうやったのかは知らないが、自分に纏わる情報の操作か、それとも手っ取り早く、オンラインでつながったコネクションでも利用したのか。

叶湖は両親はもちろん、普段保護者を努める兄2人に気付かれることなく、それだけのものを手に入れてしまったのだから、つくづく彼女の持つ力なき力の大きさを感じさせられるというものだろう。

「私の私室以外は、アナタの出入りは自由ですから、気にせずどうぞ」

一応、私室まで案内した叶湖が、黒依を連れてリビングまで戻る。室内の調度は、以前のマンションを真似たように、ひと揃えで、黒依に懐かしい気持ちを感じさせる。

「いいんですか……？」

叶湖が私室に誰も入れないのは黒依にとってよく知ったことではあった。彼女の武器が揃う、まさに彼女の心臓部といえるその場所を、彼女が誰にも晒したくないのは当然といえるだろう。

とはいえ、普通なら誰にも許されることのない彼女の私室への侵入を、黒依は何度か果たしている。

普段、黒依すらリビングのソファで寝起きしていた以前のマンションに、寝具があるのは叶湖の私室だけであったし、何より隠密行動を得意とする黒依がいかに叶湖が警戒したとしても、侵入に困らなかった、という理由もある。

もつとも、黒依と叶湖が1番長い時間を過ごしたのは、やはりリビングルームで。懐かしさ溢れるその場所で、叶湖はソファに腰掛け、黒依はその足元へ座る。所定の位置についた黒依へ、叶湖は柔らかな視線を向ける。

彼女の態度が、再び情報という防具を身にまとった余裕からであることは、黒依には容易に想像ができた。

それと同時に、ずっと先へ先へ、自分の望むものへ近づいていく叶湖に対し、自分の意思の通りにいかず、足踏みを続ける自分自身に、苦い気持ちがあふれそうになるのを抑え込む。

すでに、自分の見せる負の感情で、叶湖の手を煩わせている。面倒を嫌う叶湖に嫌われぬためには、自分を押し殺さなければならぬ。黒依のそんな様子に気づいてか否か、叶湖はわずかに目を瞬かせるが、口から何かを発することはなかった。

「それにしても、随分とネットの環境を整えましたね」

「……とはいえ、家族が近いので、面倒事に巻き込まれるわけにはいきませんしね。しばらく仕事をするのは控えるつもりですよ」

前世では両親を亡くし、遠い親戚しか血縁者の居なかった叶湖がこともなげに告げる。

「なんだかんだいって、叶湖さんもお兄さん2人が大切なんですね……」

黒依の言葉に、叶湖はわずかに目を見開く。

「意外、ですね。私は以前の家族に対しても大切に扱っていたつも

りでしたけど？ 両親にとって、私は普通の娘であったでしょうし、従妹はどれほど腹がたつても自分で殺すことはしなかった」

叶湖の言葉に黒依が苦笑する。確かに叶湖が口に出したことはその通りである。一見、腹が立てば、さっさと本能のままに行動してしまう叶湖にとって、やはり身内補正のかかった対応だと思えてしまいが、実際はそうでもない。

実の両親に関しては、その命が狙われているのに気づいたものを見殺しにし、その拳句、後処理が面倒だという理由だけで、叶湖は自らの戸籍を抜き取り、その死を弔ったことすらない。おまけに、その犯人は叶湖を病的に愛していた従妹であったが、身内である関係性やその動機から、自分が面倒を被ることを避けるために、従妹の情報を隠し警察の捜査をかく乱した。

結果、捕まらずに済んだ従妹であったが、その後、叶湖の後を追って来たことで、黒依と何度か衝突した。叶湖に言わせれば、その時の黒依の扱いに何度か腹を立てたようだが、結局彼女が何か行動を起こすことはなく、キレた黒依が自分で始末をつけようとするとそのまま放置した。とはいえ、その後、キレていた黒依が殺す気無くすほど、自分の従妹に精神的な攻撃を加え、ともすれば数瞬の後に自殺させるほどに追い詰めたことも忘れてはならないだろう。

そんな叶湖であるから、兄だから大事に扱う、といった公式が成り立つわけもない。

「まあ、なんとでも。少なくとも、彼らはまだ私の周りで生きていますし、なにより、彼らの中で私は、非凡ではあるかもしれません

が、まだ一般人です」

「彼らの中では、なんて。この世界ではアナタはまだ一般人でしょう?」

「それならアナタも、では?」

ただの性格の問題を平凡と非凡に、犯罪経歴の有無を、一般人か否かに置き換える彼女らの言葉で言うなら、叶湖も黒依も非凡ではあるが、確かに一般人である、未だ。

「おかしいですね。僕の手がまだ汚れていないなんて」

無意識のように、呆然と自分の手を見つめる黒依に叶湖は内心で苦笑する。事実をいえば叶湖は、以前自分を泣かせた少年に対してグレイゾーンどころか、思いっきり犯罪行為ど真ん中のことをやってのけているのだが、黒依にとってもそれは忘れたのか、黙認であるのか。

確かに、未だ2人は自分の手を直接汚したことはない。

なんて、まだ8歳の自分たちを思い、叶湖は自分も無意識に手の平へ向けていた視線を伏せると、僅かに唇で晒ったのだった。

小学生篇？ 装備（後書き）

読了ありがとうございました

小学生篇？ 妹？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学3年（8歳）

桐原黒依：上に同じ

桐原香里：黒依の母

桐原 茜：黒依の妹

桐原杏里：黒依の妹



## 小学生篇？ 妹？

「いつてらっしやい、黒依、茜。黒依、茜をよろしくね。茜も、お兄ちゃんに迷惑かけちゃ駄目よ？ 叶湖ちゃんも、茜と仲良くしてやってね」

春。まだ日によつては冬の寒さが残る時期、叶湖は桐原家の玄関で、そんな香里の母親ぶりを、一步離れたところで見守っていた。

香里の腕の中には、冬の終わりごろ、ようやく3歳を迎えた桐原家の末っ子が抱かれている。桐原杏里。黒依の末の妹で、そして、出会ったびに叶湖に警鐘を鳴らさせる張本人である。自然、叶湖は彼女から視線をはずし、黒依と、それを追うように家を飛び出してきた少女へ向けた。この春、叶湖と黒依の通う小学校へ入学したばかりの桐原家長女、茜である。

「大丈夫だよ、母さん。いつてきます」

「茜は大丈夫だもん！ お兄ちゃんに迷惑なんてかけないよっ！」

元々、とても元気がよく手を焼かせる子供らしかった彼女を、自分にとってはめずらしい人種であると、興味深げに見つめていた叶湖は、自分もいつも通りの笑顔で香里を見る。

「こちらこそ」

実際のところ、有り得ないと思ひながらの嘘。もつとも、叶湖にとって香里への嘘偽りは日常茶飯事であつたので、今更良心が痛むことはない。……もともと、叶湖に痛む良心があるのか否かすら、不明であるが。

茜は本能や直感で生きている部分が多いのか、叶湖と黒依のただならぬ関係を察知している節があった。否、ブラコンの気があるの  
で、案外子供にありがちな独占欲かもしれないが。兄を取られると  
でも思ったのか、とにかく。叶湖と茜が顔を合わせるたびに、茜の  
叶湖への対応はあまり良くなかった。

警戒。その一言につきるだろう。

人の心の機微に気がつく人間でなくとも、誰でも気付く。それほ  
どに、茜は叶湖を警戒していた。近づくこともなければ、話しかけ  
ることすらない。普段は兄にべったりだという噂であるのに、叶湖  
が側にいれば、その兄にすらなるべく近寄ろうとしなかった。

とはいえ。ここが茜の、否、子供の恐ろしいところか。それほど  
警戒しているにも関わらず、茜は1度も叶湖に対して噛みついたこ  
とがなかったのだ。

思慮深い大人ならいざしらず、感情的になり易い子供であれば、  
叶湖に対し癩癩を起したり感情をそのままぶついたり、という可能  
性もありうる。にも拘らず。

茜は叶湖に対して警戒しかあらわにすることはなかった。

もつとも、その判断は正解で、叶湖はいくら黒依の妹であろうと、  
個人的に何か迷惑をかけられれば、それ対応の仕返しをしたのであ  
ろうが。

そうして不干涉を保っていた叶湖と茜ではあるが、この春からその関係は小さいながら変化をよんだ。

叶湖はちらり、と桐原の兄妹を見つめる。叶湖から隠れるように、黒依の影に引っ込んでいる茜。その手は兄の腕をしっかりとつかんで握りしめている。

僅かでも、その事実には面白くない、と感じてしまっている自分に、改めて面白くないと。叶湖は内心のみでため息をつく。

自分より実際にも2歳年下。精神的には30近くも年下の少女相手に、しかも恋愛がらみの嫉妬などと。あまりにも自分らしくない事態に呆れて二の句がつけない。

それほどにまで、自分自身も狂わされているのだと、その事実に天を仰ぎたくすらなる。

しかし、そんな自分自身すら仮面をかぶせて、ごまかして。

叶湖は茜にそれはそれは、綺麗な笑顔を向けた。叶湖と茜の不仲をよく知っていた黒依がそれを目に留めて、僅かに瞠目する。理由は叶湖があまりに不機嫌だったから、ではない。

綺麗な笑顔と言えば、叶湖の代名詞。ともすれば、数瞬後に精神的か、肉体的か、ともかく被害者が生まれるような危険を孕むものである。が、今回は。

叶湖の笑顔に嘘が無かったのである。

それもそうだ。叶湖は表面上で花も霞む笑顔を浮かべたまま、内心では声を出して笑う。

叶湖は笑っている。茜にはない。黒依にでもない。もちろん、香里でも、この偽りの世界にでもない。……自分自身だ。

いいだろう。自分がそこまで狂ってしまったのだというのなら、そのまま道化であり続けよう。自分の体裁と、黒依と。どちらが欲しいか？ 叶湖は可笑しくなる。

そんなもの、即答できるほどに黒依が欲しくなってしまったのだ、自分は。

他の何ものよりも、黒依を選ぼう。

実際は30も下の、まだ10にも満たない少女に対してだって、争おう。

それが、彼を手中に収め続けるためなのだとしたら。

叶湖は笑っていた。当の本人、叶湖がそれほどまでに望んでいる彼には何も告げないまま、彼女は自分自身の狂気を改めて受け入れたのだった。

その数時間後に、その決意が揺らぐともしらないで。

小学生篇？ 妹？（後書き）

続く

小学生篇？ 妹？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学3年（8歳）

桐原黒依：上に同じ

彩藤 直：叶湖の兄

桐原香里：黒依の母

桐原杏里：黒依の妹

## 小学生篇？ 妹？

叶湖は放課後、黒依と共に帝都大学附属病院を訪れていた。小学校を出たところで、叶湖の兄である直に呼び止められ、そのまま彼の車で駆けつけたのだ。

今日は半日授業であった茜は、昼を過ぎたところで下校し、今は家に一人でいるのだろう。

その病室は静かだった。

本来なら、騒ぐ他の患者や、病院独特の喧騒で耳に煩わしい騒音も多いはずであるのに。

理事長の知り合い、という特権で特別室を用意されていることはすぐに分かった。しかしその静けさが、沈痛な気持ちを抱える人間に対して良い働きをしているとは決して思えなかった。

「黒依……叶湖ちゃんも、来てくれたのね」

「母さん……っ」

いつもの澁刺とした香里ではなく、ひどく疲れを滲ませた人間らしい顔がそこにあった。負の表情を人間らしいと捉える自分に、自



分らしいと思いながら、叶湖はゆっくりとベッドへと近づくと黒依を見つめた。

「心配しなくても大丈夫よ。……大丈夫、きっと……。きっと、よくなるから」

黒依を安心させるため、というよりも、むしろ、自分自身を納得させるために紡がれた言葉のようだった。

「なんで……どうして……」

黒依の足がベッドにたどり着く前に止まってしまふ。その肩を、香里が優しく撫でた。

「杏里……」

香里に肩を抱かれながら、ベッドに眠っているはずの少女の名前を呼ぶ。黒依は籠が外れたようにベッドに近寄り、転落防止の柵を覗き込んだ。

そして、叶湖は目撃するのだ。力なく眠る少女を、彼の妹を瞳に入れたとたん。彼の瞳に闇が過った、その光景を。

叶湖はバツと身を翻した。自分の心中に動揺が走ったことは気取られただろう。『嘘々叶湖』であれば、我関せずの笑顔である場に堂々と居座らねばならなかった。

音などいくら殺したところで、どうせ黒依には聞こえるのだ。ならばいっそ、堂々と病室から出て行こう。

叶湖の様子に気付いた直が慌てて追ってきて叶湖を捕まえる。

「どうした、叶湖？ 大丈夫だ。杏里ちゃんはすぐに良くなるからそんなことは嘘だと知っていた。叶湖は直に車に乗せられてすぐに、病院の電子カルテへハッキングを仕掛けていたのだ。今回杏里に発見されたのは、慢性の心疾患。すぐ、以前に治かどうかすら、定かではない病気である。」

叶湖は苛立つ内心のまま、咄嗟に掴まれた腕を振り払った。

「気易く触れないください」

笑顔の仮面が剥がれおちそうになるのを、一瞬、手で覆い隠した隙になんとか修復する。

「すみませんが、ひと足先に戻ります。直さんは今日は遅くなりそうですし、和樹さんは今日はご友人宅へお泊りの予定。私も今日は自宅へ戻らないことにします」

「ちよつと……帰らないって、じゃあ、どこへ!？」

そう言っただけでロビーへと歩みを進める叶湖に、直が僅かの当惑の内に声を発する。

「明日の放課後は戻ります。それでは」

叶湖は笑顔でそれだけつげると、さっさと廊下の先へ消えてしま

その後ろ姿を見送るしかできない直は、彼女に振り払われた手を握りしめ、短く嘆息した。

今の表情のままでは、人に会いたくもない。

叶湖は直が追って来ていないのを確認すると、職員用の休憩室へもぐりこんでいた。

自分の別荘へ帰るにしたって、タクシーを呼ばなくてはならない。交通の便がそこまで悪いわけではないが、どちらかといえば郊外に位置する場所だ。今の精神状態で何十分も電車に乗るなんて面倒は遠慮したかった。

職員用の休憩室、には似合わない座り心地のよいソファ。休憩室ではなく誰かの私室のように整えられた調度は叶湖の乱れた心を僅かに落ち着かせる。上品な調度は華美すぎず、好感が持てた。

あれほどまでに自分が動揺したなんて、記憶にある限り、初めてではないか、と思うほどめずらしい。僅かの疲れを感じて、いつそしばらく眠ってしまおうか、なんて誘惑に駆られる。

その場所で、誰か別の人間と出くわす危険性を、叶湖は考えていなかった。

理由は簡単である。表向きは職員用の休憩室、となっているその場所は前理事長夫人の病院内の私室であったのだ。同じ大学の看護

学部生徒だった彼女は、そのまま叶湖の父、賢司と恋仲となり、看護師としての道へ進んだ。

叶湖が今いる場所は、賢司がその権力を僅かに濫用し、何かと病院へ詰めている自分たち夫婦が病院内でも夫婦に戻れる場所として作り、妻に捧げた思い出の場所である。

今現在その部屋は、室内は彼女が死んだ当時のままに、定期的に掃除の手が入る以外は静かに保管されている。思い出の場所に眠る甘酸っぱいはずのソレは、今の賢司にしてみれば、悲しい色をしているのかもしれない。

結果、入口には賢司と業者以外は故人以外知りえない電子ロックがかけられ、表向きの使用権利者である病院職員にはどうやっても入室できない部屋となっていた。もつとも、権利濫用といえは違いないが、彼女が死んでからの賢司を知る人間が、たった一室に詰め込まれた彼の気持ちに文句をつけられるハズもないのだろう。

叶湖自身、ハッキングの試しに病院の様々な情報を引き出した際に部屋の存在を知って以来、特に興味も持たず放置していた部屋である。どれほどの思い出があるのか知らないが、結局は叶湖が生まれるよりも先に死んだ人間のことだ。今を生きる叶湖の興味が向けられることはない。

事実、パスワードすら特に調べもしていなかったのであるが、いかに権威ある病院の優秀な電子ロックとはいえ、叶湖の手にかかれば、僅か30秒のロスであった。

叶湖は本格的に寝入ろうとするかのような体制で、心中を巡る動揺を落ち着けようとする。

彼は確かにその瞳に闇色を宿した。今まで決して叶湖以外の理由で与えられることのなかったその色を。

叶湖と出会った当時、彼のすべてが妹に向けられていた時のように。

自分の中で鳴っていた警鐘はこれを示していたのだと、叶湖は納得する。彼にとってこの世の妹は、茜ではなく、杏里であったのだと。

殺してしまいそうだ。叶湖は自嘲を浮かべる。部屋には誰もいないのだと、表情を取り繕ったりはしなかった。

自分が、今までだって私欲のために殺してきたに違いなかったけれど、それでも、くだらない理由だ。まさか、嫉妬だなどと。そんな理由で殺したいなんて。

叶湖は髪を掻き撫でる。苛立った時は、普段から気に入らない髪がさらに気に入らなくなる。彼女の癖であった。

黒依からすべてを奪ってしまいたい。家族をすべて惨殺すれば、彼は自分を恨むのだろうか。始めて手に入れた、暖かい家族を奪われて。この自分を、殺したいほどに、恨んで憎んで……想ってくれるだろうか。

本当に殺されることがないのは今でも変わらないと、叶湖は知っていた。黒依の世界は叶湖の世界に比べてずっと広がったが、それでも、中心に叶湖が居るだろうことを疑ったことはなかった。

彼が自分に狂い、まさに狂愛を抱いていることは知っていた。そして、叶湖自身、その狂気に自分も狂ったのだ。だから。

例え、叶湖が黒依のすべてをもう1度。今度はこちらで奪ったとして。彼が本当に叶湖を恨み、憎んだとしても、その愛が冷めることなどあり得ないのを知っていた。

だからこそ、彼は恨み、憎み、叶湖を想い、もう1度。叶湖に深く堕ちてくるのだろう。それを考えれば、叶湖の心中に甘い渴望が芽生える。そうしたいと。そうなる未来がなんと素晴らしいのだろうと、嘘偽りなくそう思う。

もう何度も何度も考えた未来だった。

叶湖は湧き上がる高揚を鎮めるように、体中の力を抜いて弛緩させた。

結局、自分が未だ実際の行動に対して、ありえないためらいを抱いているのに変わりはなく、そしてそのブレーキの根拠こそが……。「ああ、愛とは何と面倒なことなんでしょうね……」

その想い故だとは。彼を兄にするつもりはなかった。妹にやるだなんて、そんなつもりもない。

黒依は黒依、叶湖の所有物で、犬でしかなく、叶湖だけのものがある。けれど。

彼がようやく掴んだそれを、自分が奪い、捨てる。壊す。そのの、なんと哀れなことか。

叶湖は模索していた。愛と、欲を、どうにかして両立させる方法を。……今は、まだ。

そして叶湖は、そんな終わりの見えない葛藤から逃れるように、そのまま眠りに落ちるのだった。ある種の狂愛に包まれた、その部屋で。

小学生篇？ 妹？（後書き）

読了ありがとうございました



小学生篇？ 先生（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小4年（10歳）

桐原黒依：上に同じ

宮野先生：2人の担任

## 小学生篇？ 先生

「彩藤さん」

夕暮れ時の学校。秋の近づくその頃、窓の外から真っ赤に照らされて、廊下が輝いている。

叶湖は自分を呼ぶ声に笑顔で振り返った。

「何か？」

最近の日課である図書室での自習を終え、帰宅しようかと廊下を歩いていた叶湖に声をかけたのは、彼女の担任である女教師、宮野であった。

「ちょっといいかしら？」

「ええ、構いません」

叶湖は内心とは全く異なったことを言いながら、宮野に促されるままに空になった、自分のホームルームへと入り、席に着く。

「彩藤さん、来週、宿泊体験学習があるでしょう？」

「ええ、お知らせはずっと前にもりましたね」

叶湖の前の席の椅子を反転させ、叶湖と向かい合うように座った宮野が本題を切り出す。

「そう。それで、お泊まりの部屋を昨日決めたわね？」

「ええ。生徒が、というよりも前もってアナタが決めたものを確認した、に過ぎませんけれどね」

叶湖はただ、笑顔で頷く。

「……そう、ね。それで、そう、アナタと同じ部屋割になった3人が揃って、今日、アナタをもっと友人のおおい部屋に移動させてはどうか、と私に言うの」

「それで？」

叶湖は静かに足を組むと、髪を掻きあげた。口の端が綺麗に持ち上げられ、テレビや雑誌で愛想を振りまく芸能人にも劣らないだろう、綺麗な笑顔。

「この体験学習は、いつもとは違ったお友達と活動することで、お友達を増やそう、というものだから、もちろんアナタが今のお友達とずっと一緒、というのも良くないのだけれど、1人では心細いかもしれないから、一応彩藤さんのお話も聞こうと思って……」

叶湖の機嫌が目に見えて悪化していることなど思いもよらない宮野が言葉を続ける。

「そうですか。……それで、わざわざ私にお話しを持ってきてくれたんですね。ありがとうございます」

叶湖は綺麗な笑顔のまま、宮野を見つめる。

「もしかして、宿泊体験学習とは名ばかりで、生徒に1人部屋を用意できる度胸がアナタにあるとは思いませんでした」

「え？」

宮野はたった今告げられた言葉の真意が理解できず、きよとん、と叶湖を見つめる。その素振りすら、目の前の教師を無能どころか、マイナスの評価をつけた叶湖をさらにイラつかせる原因となり、また、叶湖の笑みが深くなる。

「どこから説明すれば理解できますか？ 1から？ アナタが普段どれほど自意識過剰な視点でクラスを見ているのか知りませんけれど、私はこのクラスでアナタのいう『お友達』を作った覚えはありませんよ。ここまで不快に感じた教師はアナタが初めてですので、記念に教えておきますね。まず、まだ10にも満たない子供の言い訳を鵜呑みにするのは止めた方がいいのでは？ おせっかいかもしれませんけれど、自分の生徒に舐められた挙句、その内容を同じく10に満たない子供へ晒すアナタを、教師として尊敬なんて、できないようハズがありませんので」

叶湖の言葉を聞いて数秒。漸く咀嚼できたのか、間抜けに口を空け、顔を蒼白にする。

「ああ、まさかアナタの生徒じゃあるまいし、泣けば解決する、だなんて甘い考えは止めてくださいね？ これ以上アナタに対して気分を害すことなどない、という程の不快をすでに味わっているんで

すから、さらにその上を目指そうだなんて。アナタはいいかもしれませんが、私は迷惑なので」

あくまで笑顔で言いつのる叶湖に、宮野は零れ堕ちそうになっていた涙をぐっ、と堪える。しかし、それは失敗に終わり、涙が一筋、頬を伝ったのをきっかけに、宮野の涙線が崩壊する。

「……ああ、そう」

その様子を表情を変えずに、何事もないかのように眺めていた叶湖が、思い出したように口を開いた。

「例の宿泊体験学習ですか？ 忘れていたんですけれど」  
言いながら、席に座る際に机の横へ置いたままのランドセルから一枚の封筒を差し出す。

「主治医からドクターストップがかかっているんです。……と、いうことで欠席しますね。……よかったですね？ 何事も丸く収まっています」

叶湖は医者 of 診断書の入った茶封筒を教師の目の前へ差し出すと、それでは、と席を立つ。

ガラ、と、ちょうどその時、教室の扉が開けられ、一人の生

徒が入って来た。

ハッ、と気付いた宮野が涙をぬぐいつつ、そちらを振り返る。  
新たな人物に先に反応したのは叶湖であった。

「アナタも先生に用事ですか？ ……黒依？」

「ええ、まあ」

叶湖の言葉に、ではなく、宮野の様子に苦笑を浮かべた黒依は、  
しかし何も見なかったかのように教室を進み、叶湖の横を通り過ぎ、  
宮野へ近づく。

「僕も伝えるのを忘れていたんですよ。すみません、宮野先生？」

僕も、欠席します」

「あら、奇遇ですね」

口先だけの言葉を叶湖が紡ぐのに、今度こそ、彼女に対しての苦笑を浮かべた黒依が、もう用事は済んだとばかりに、宮野から視線を外す。

「杏里の次の入院がちょうどその日になってしまった。母が病院へ寝泊まりするんです。運悪く、父の出張が重なったので、どうしても茜1人じゃ家に置いておけなくて」

「そうですか」

この春から、入退院を繰り返す彼の妹を思い浮かべながら、叶湖は1つ頷く。

黒依はそう言うが、彼の母である香里が、9歳の息子に留守を預けるなどという無責任なことがするはずもない。おそらく、彼以外のお守の宛てはあるのだろう。叶湖は内心で見当をつけながら、叶湖の分までランドセルを抱えた黒依を一瞥し、教室を出る。

「それで？」

「それで、とは？」

「何を泣かせていらっしやっただんです？」

まるで叶湖が何かをしたのだと言わんばかりの言い回しに、さすがの叶湖も苦笑を浮かべて別に、と返す。

「私と同室になった生徒が、親を通して直談判したようですよ？私を別の部屋に移すように、と。おそらく、ですが」

いかに無能といえど、子供3人ばかりの文句を鵜呑みにはしないだろう。

「とはいえ、担任としては汚点だろうその部分を、ああも正直に私に告げるとは。……不快を通り越していつそ哀れだったもので。……教えて差し上げたんですよ。職業の向き、不向きというもの」「それは、随分とお優しいことで。……精神的な攻撃は、アナタもお好きじゃないでしょうに。余程、サービス精神が沸いたんですかね？」

言外に、そこまでしなくとも、と呆れの感情を告げる黒依に、叶

湖は笑ってさあ、と首をかしげた。

「それにしても……今まで落ち着いていたのに、どんな風のふきまわしなんでしょうね」

「何の話ですか？」

思いついたように話始めながら苦い顔をする黒依に叶湖が振り返り、尋ねる。

「生徒の話です。アナタを廃する動きなんて今まで見られなかった……」

黒依の言葉に叶湖はなるほど、と1つ頷いて口を開く。

「ただ、そういう時期なのでしょう？ 成長……ですよ。もつとも、私を前に、面倒事を押し付けようとする成長が、進化か劣化か、私は知りませんけれどね」

いっそ清々しいまでに直接的で。しかし、それを聞くべき者のいない場所で発された警告に、黒依は苦い顔を苦笑に変える。

「とはいえ、子供を相手にやり返したところで、こちらが大人げないだけ。と、いうよりむしろ、いらぬ面倒を増やすだけ、いいですか。せいぜい、私に直接的な害を及ぼさない程度であれば好きにすればいい。……でしょう？」



「ええ、まあ」

まるで他人事のように。しかし、叶湖を心配する黒依に対して、反撃許可のラインを示す叶湖。黒依は敵わない、と思いながら1つ頷くのだった。

「ところで、あの診断書。……まさか、本物ですか？」

「あら、本物かどうか疑うなんて、意外じゃないですか。……もちろん、偽物ですよ？ 直さんはまだ研修医どころか大学生ですし、賢司さんは外科医。まだ小児外科に担当されるべき私を診る医者ではありませんね。それ以前に、私が通院している科は心療内科以外にありえないのですけれど。それにしただって、しばらく行っていませんしね」

叶湖のハッキング技術があれば、たかが印刷物に押印した程度の書類であればものの数分でねつ造できてしまう。

痛覚に対する執着は、彼女の恐怖心である一方で、嗜好でもあった。故に、彼女は最初、それを病気であると判定されるのに気分を害していたハズであるというのに。

痛みに対する恐怖心から、常日頃から常人では考えの及ばないほど、病気や怪我に気をつかう叶湖のこと。痛覚を人一倍感ずることが表へ出てからは、予防接種ですら受けていないのが現状で、病院にはとことん縁がない。

とはいえ、すべてが今更の面倒事を回避するためには有効な手段であると学んだ叶湖はこれまでも何度か活用して来ていた。

「それにしても、アナタまで欠席するとは思いませんでした」

香里が黒依に留守番を任せるはずがない、ということは即ち、黒依はサボリである、ということだ。もつとも、その点は叶湖も同じであるが。

「アナタが行かれないのでしたら、僕が行く意味はないでしょう？」

まるで、1たす1の答えでも告げるかのように口に出された言葉に叶湖が苦笑を浮かべる。

「まあ、どちらでも構いませんけれど……。ですが、アナタの両親はあなたがサボったなんて聞いたら怒るんじゃない？」

「バレなければ問題ないでしょう？ 叶湖さんこそ。診断書をねつ造、だなんて直さんにバレたら面倒なことになるでしょう？」

黒依が面白そうに呟きながら叶湖に視線を合わせる。そんな様子に叶湖はふ、と軽く息を吐き出した。

「なら、2人でバレないように生活するしかないですね」

「よろしく願います」

そろって叶湖の隠れ家へ向かいながら、2人は来週の過ごし方に  
考えを巡らせていた。

小学生篇？ 先生（後書き）

読了ありがとうございました。

小学生篇？ 事件（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学5年（11歳）

桐原黒依：上に同じ

彩藤 直：叶湖の兄

彩藤和樹：叶湖の兄

桐原香里：黒依の母

桐原 茜：黒依の妹

## 小学生篇？ 事件

『見つかった遺体から切断されていた四肢は司法解剖の結果、生前の犯行の可能性が高く、極めて無差別・猟奇的な殺人事件として、周囲の住民に注意を呼び掛けています。また、警察では今回の犯人と同一犯によるものと思われる殺人が、今月、すでに2件行われたことを公表し、連続猟奇殺人事件として捜査本部を立ち上げ……』

リビングに入ると、直が難しい顔で見ていたテレビに視線、目が向いた。耳に飛び込んできた言葉が叶湖の興味を誘ったのもある。が、さすがに小学5年が注目すべきニュースではなかったのか、それに気付いた直がテレビを消してしまった。

「叶湖、見ていたかもしれないけど、すぐ近くで殺人事件が起こった。犯人が捕まるまでのしばらくは、寄り道せずにまっすぐ帰って来なさい。多分、集団下校等の処置がとられるだろうから、それを外れて帰って来たりしないように」

直から告げられた言葉に叶湖は1つ頷く。彼が難しい顔をしていたのはそれが原因か、と思いつつ。どうやら、事件が起こったのはすぐ近くのことらしい。

「とりあえず、登校は黒依と茜も一緒に俺が送っていく」

心配症で、過保護なところが一向に直らない兄の決定を覆す労力を払う気になれずに、叶湖はその言葉にも酷く従順に頷くのだった。

「御苦労なことですね。いつ死ぬかなんて誰にも分からない。そんな危険がこれほど溢れかえっている世の中なのに、その危険が身の回りに具現化すると、人は一気に焦り出す」

案の定、叶湖と黒依が通学している小学校では、1・2時間目がキャンセルされ、児童集会が行われることになった。おそらく、集団下校のことや、しばらくすぐに帰宅するように……直の言ったままのことがもう1度話されているに違いない。……もつとも、その場にはない叶湖と黒依が具体的な内容を知るはずはなかったが。

叶湖は誰もいない図書室で可動式の椅子にゆったりと腰掛けながら、先ほどまで見つめていたパソコンの画面から視線を外した。

「随分と猟奇的な犯行だったようですね」

「まあ、生きたままに分解されていますしね？」

黒依の言葉に、特に興味なさそうに相槌をうつ。そんな叶湖の様子に、黒依はそうですか、と1つ頷いて顔を俯かせた。

「それにしても、このままでは私の家に行けなさそうですね。困りました」

叶湖は軽くため息をつく。彼女が言う自分の家、というのは存在すら彼女と黒依以外に知る者のない、彼女の別邸のことである。叶湖にしてみれば、生まれた家は他人の家。自分だけの家こそ、彼女自身の家、という認識なのだろう。

「さて、そろそろ集会が終わりそうですね。おそらく、抜け出したのはバレているでしょうけれど、一応教室へ戻る列へ紛れ込みましたよ」

パソコンから使用した痕跡を消し去り、叶湖は立ち上がる。彼女が使った情報通信機器にその足跡を残さないのは、彼女の情報屋としてのクセのようなもので、あくまで合法的である株取引に使用しただけのパソコンからも、その痕跡は嘘のように消し去られているのだろう。

「……黒依？」

歩き始めた自分に対し、立ち止まったままの黒依に叶湖が振り返る。

「……いえ、何も」

歯切れの悪い様子に、一瞬だけ笑みを深くした叶湖は、そのまま



歩みを進めるのだった。

黒依の様子がおかしい。そんなことは、叶湖でなくとも、今日の彼の様子を見ていたものなら気付くだろう。しかし、そのおかしさが形となって現れたのは、その夜のことだった。

「黒依が……いなくなった？」

桐原家の2人、香里と茜がやってきたのは、今日も帰宅が遅くなるという直以外、和樹と叶湖で夕食の席についていた時だった。

その対応に出た和樹の声が聞こえ、叶湖は誰もいない部屋の中で、と目を細める。

「ええ、夕方……私はちょうど仕事の時間で家にいなくて、香里に後で聞いたんだけれど、1人で家を出たらしくて……。それきりまだ戻らないの。珍しいわけでもないし、普段はそれほど心配もしないけれど、今はあんな事件があったから、やっぱり気になって……」  
「ったく、あいつは、香里さんにまた心配かけて……。近くの心当たりの場所とかは捜した？」

和樹が呆れた声で呟きながら、整った顔を隠す長めの髪を掻きあげる。

「いいえ、これから行くつもりだけれど、その前に、叶湖ちゃんに心当たりがないか聞こうと思って……」

「ああ……叶湖」

和樹に呼ばれ、叶湖は廊下へ姿を現した。

「残念ながら、知りませんよ」

「……だ、そうだけど……。とりあえず、周りを探そう。茜、お前は叶湖と一緒に家にいる。いいな？」

「……分かった」

ついていきたそうにしていた茜に念を押すと、和樹と香里はそのまま連れだつて家を出て行った。それを見送つて叶湖は夕食の席へ戻ろうとする。

「ちょっと……」

「何か？ ……ああ、どうぞ、上がってください。何度か来たことがあるから不便はないでしょう？ 私は夕食をとりますけど、お茶くらい出しましょうか？」

と、茜の自分を呼びとめる声に足を止め、彼女を振り返ると、叶湖はそれだけ告げる。そして茜自身に興味はないとばかりに、さつさと扉の向こうへ消えてしまった。

「ちょっと、ちょっと待ってよ！ アンタ、お兄ちゃんのが心配じゃないの？」

「……別に？」

声を荒げ、追いつがる茜に叶湖は扉から顔だけで振り返り、酷く冷静に返事を返す。

叶湖からすればその返事は当然も当然で、10歳と言えども元は天才暗殺者。10歳のころにはすでにそれなりの戦力を持っていただろう黒依だ。いかにそれが前世での話であろうと、彼が叶湖に捨てられることに酷く脅え、この世でも殺人の技術を磨いているのを知っている叶湖としては、10歳児といえど、黒依がただの一般を少し踏み外した程度の殺人犯にどうにかされる、とは到底考えられないことだったのだ。

「なんで……なんで、お兄ちゃんはアンタなんか……」

両手を強く握りしめ、俯き呟く茜に、叶湖はちらりと振り返り、面白そうにした様子を見せるが、あえて聞かなかったことにして、冷め始めた夕食を食べ始める。

叶湖はその年齢上、過保護な兄2人に家事をさせてもらったことはなく、表向き料理ができないことになっているので、夕食は買ったものか、兄2人のどちらかが作ったものを食べる決まりであった。几帳面な直ならともかく、いい加減な和樹が料理をするのは想像し難いものがあったが、そこは過保護な兄2人のうち1人。叶湖のために料理の腕をメキメキと成長させていた。

「お兄ちゃん……最近、怪我して帰ってくるの」

ダイニングの入り口に立ったまま、茜が呟いた。

「見えにくいところだし、隠してるつもりだけど、私見ちゃった。夜中にお兄ちゃんが1人で自分に包帯巻いてるの。お兄ちゃんは何でもないよ、って言うの。でも、お母さんも心配してる。イジメられてるのかな、て。それとも、何か危ないことしてるんじゃないかって。……そうだとしたら、全部アンタの所為よ！」

泣きそうに顔を歪めて叶湖に噛みつく茜。

「理由だけ聞いておきましょうか、一応」

叶湖はそんな茜にそっけなく振舞いながらゆっくりと夕飯を咀嚼していく。ザアアと、外で激しい雨の降る音が聞こえた。

「私、知ってるの！ アンタ、クラスで孤立してる。お兄ちゃんはアンタがかわいそうだから、幼馴染のよしみで付き合ってるだけよ！ アンタの所為までお兄ちゃん、苛められてるんだ……」  
くすくすと、それはそれは可笑しそうに。抑えきれないとばかりに、叶湖が笑い声を洩らした。

「何が可笑しいの……？」

「いいえ。けれど、随分と憶測で物を言うのだと思って。口は災いのもと。私に喧嘩を売らないように、と妹想いの彼ならば、きつと念を押していると思っていましたけれど？」

茜が叶湖のことをよく思っていないのは見るからに明らかであった。にも拘らず、今まで正面切って2人が衝突したことがないのは、一重に茜が『よく思っていないかった』だけに過ぎなかったからだ。

文句を言うこともなければ、喧嘩をふっかけたこともない。

その理由の一端としては、茜が危険回避能力に優れていたからでもあるうし、それ以前に、おそらく黒依が念を押しているのだと、叶湖はどこかで確信していた。

「お兄ちゃんはアンタを勘違いしてる。アンタなんか、お兄ちゃんのこと何も分かって無いくせに！ アンタ、アンタの所為でお兄ちゃんが怪我までしてるのに、どうして何の心配もしないの！？ 今だって……どうしてそんな自然に……」

「私の所為で……ね」

叶湖はお茶をすすりつつ、頷く。と、ちら、と腕時計に視線を落としていた叶湖が立ちあがった。

「……ちよっと、どこに……」

まっすぐ廊下、そして玄関へと向かう叶湖を茜が追いかける。

「まったく」

叶湖が軽くぼやきながら玄関をあける。

「アナタの所為で、私までいい迷惑ですよ、黒依」

「叶湖さん……」

扉を開いた先に、ずぶぬれの黒依が座り込んでいた。

「お兄ちゃん!？」

黒依の姿を見つげ、そしてその様子に驚いた茜が声をあげる。

「叶湖さ……」

しかし、当の黒依はそんな茜には視線すら向けず、呆然と叶湖へ手を伸ばし、僅かの後にずぶぬれの自分の姿を考えてためらった。その躊躇いが気に食わなかったのか、叶湖は笑顔を深くすると、黒依の顔を覗き込むよう、自分もしゃがんだ。

「濡れますよ……」

「ええ、けれど、今はそれ以上に気に入らないことがあるので、構いません」

叶湖はそれだけ告げると、黒依の頬へ手を添え、半ば強引に自分の方を向かせた。

「何か、私に言うことは？」

「特に……」

「そんなわけ、ないでしょう？」

叶湖が茜に見えないように、僅かに黒依の頬へ爪を立てた。

「っ……。言いたく、ないです」

「へえ？ それは何故？」

暗くてよく見えないが、頬に添えた手で、黒依が顔をゆがめたのが分かった。

「アナタに、嫌われたくない……」

「すでに面倒をかけられた上、隠し事までされて、アナタを放逐するのに十分過ぎるほどの不快感は味わいましたよ」

まるで可笑しいことを言われたかのように、叶湖が喉を震わせる。

「だから、ですか？ だから、僕のことなんて、もう必要なくなり  
ました……？」

「何を言っているんです？」

黒依の言葉に叶湖は眉を寄せた。どうせ、茜からは見えないう。  
う。

「他の人間を傷つけるくらいなら、僕を傷つけてください。アナタの感情や興味が他へ向くの到我慢なんかできません。アナタが恨むのも、憎むのも、殺すのも……どうして僕だけにしてくれないんですか……？」

叶湖はその時に、黒依の瞳に映り込んでいるだろう、闇色が、夜の闇に塗りつぶされて見えないのをとても残念に思った。そこには、叶湖が好んだ1番の狂気が確実に揺らめいているはずであるのに。それと同時に、叶湖が激しく不快感を覚えたのも事実だった。叶湖は気付いたのだ。黒依の変調の理由に。

「そう……それで、ですか」

酷く不快感を滲ませた声に、黒依がハッ、と顔をあげた。

「叶湖さん……？」

「アナタは私を疑っていたんですね」

「違つ……叶湖さん、待つて下さ」

「結構」

叶湖はパツ、と黒依から手を離すと、そのまま立ちあがって一定の距離を置いてしまった。それでも、黒依を置いて家の中へ入らないのは、せめて言い訳くらい聞いてやるうという心遣いなのか。

「茜さん、家の中へはいつていてくれます？」

「……っ」

満面の笑顔で告げられた依頼に、茜はビクリと身体を震わせると、何かに操られるかのように家の中へ入って行く。

「アナタ、私が例の連続猟奇殺人の犯人だと、そう思っていたんですね」

もはや、質問ではなく確認だった。黒依は言い訳すら許されないのを悟つて静かに黙する。

「アナタの狂気は好きでしたけど、まともな思考回路まで狂わされては困りますね、黒依」

「すみません……」

「それで？ 怪我をするほど無茶な訓練をしていたと？」

黒依の身体に怪我があったのは知っていた。他人の弱点を見抜くのが特段に上手い叶湖のこと。服の下の怪我だろうが、一瞬の動きの不自然さでそれを見抜ける。

自分のために、自分の所為で、黒依が傷を負っている。それは、



叶湖にとって甘美でもあり……その傷をつくるのが自分ではないことに苛立ちも感じていた。叶湖が傷つけたいと思う反面、それをためらわせた、以前とは違い傷1つなかった黒依の身体。

怪我の様子を伺ったことはないが、以前のような銃痕が付いていることはないだろうが、刀傷くらいなら負っているかもしれない。

黒依の身体に一生ものの傷を負わせるその誘惑を抑え込んでいた叶湖にしてみれば、その身体を自分自身で故意ではないとはいえ傷つけ、また、叶湖が必死で我慢していた衝動の矛先を、まさか他へ向けていたと疑われていたのだ。

……叶湖にしてみれば、黒依の大きな裏切り行為であった。

「ええ、ええ。……もう結構」

「叶湖さん……?」

「もういらない、と言ったんです。私はせいぜい、アナタはアナタ自身を守れ、と言いました。その言いつけを破って、アナタは私のモノを傷つけた。これは背信行為でしょう?」

叶湖の言葉に黒依がはっ、と目を見開く。

「そんなつもりは……!」

「アナタがどんなつもりでも関係ありませんよ。私は気分が悪い。もういいです。アナタを自由にします。いいじゃないですか。最初からそうするべきでした。前世でどう繋がっていたように、別の家に生まれ変わった、赤の他人同士。わざわざまた関係を続ける必要もないでしょう？ 私は私で、他にもいろいろ面倒があるのにアナタだけの面倒でかかりつきりになっているのも嫌なんです」

「待って下さいっ！ そんな、僕は嫌です……」

「アナタの意見なんて聞いてません」

叶湖は追いつがろうと立ちあがった黒依に一方的に告げると、身を翻した。

「叶湖さっ……」

黒依が叶湖の腕を掴む。

「痛いですっ」

一瞬だった。その力強さに痛みを感じ、叶湖が僅かに涙を浮かべる。それを見た黒依が慌てて叶湖を解放するより前に、叶湖の武器が黒依に襲いかかる。

ピツ、と針で引っかかれた部分が、黒依の手に赤い筋を作った。

瞬間。がくりと、強烈な脱力感に襲われて黒依が再び地に膝をつく。

「今後一切、私に他人以上の関わりを持つことを禁じます、黒依」

「まって……。待って下さい……。それならいっそ、このまま僕を殺してください……」

「知りませんよ。勝手に死んではいかがです？ もっとも、アナタ

が自殺したところで私は後を追ったりしません。……それとも、私を殺してから死にますか？ アナタに、私が殺せます？」

叶湖が地面に蹲る黒依を見下ろす。

「ただ、生きろっていうんですか？ アナタの側にいられないのに……？ 一体、何のために……」

「知りませんよ。どうでもいいです。……ああ、私はしばらくその辺りをうろついてきますから、その間に茜さんを連れて消えてくださいね。……アナタの所為で妹を殺されたくはないでしょう？ ……2度も」

最大のタブーだった。前世での、黒依の実の妹。黒依が決して忘れはしないだろう、彼の背負った罪であり、傷。そこを、容赦なくえぐった。

呆然とする黒依に背をむけ、叶湖は家を離れる。

その姿を黒依がどんな目で見送っているかなど、もはや興味も感心もわかなかつた。

「傘くらい、持って出るべきでしたか……」

激しい雨が叶湖の身体を濡らしていく。屋内に引きこもりがちの自分が雨にうつたれることなど珍しく、何年ぶりだろうか、水気を

吸ってすっかり重くなった髪を後ろへ流す。

「いっそ、切ってしまいましょか」

切り刻んで、燃やしてしまえば、この気持ちに整理がつくだろうか。叶湖はそんなとりとめのないことを考えながら、夜道を宛てなく歩く。

トンッ

と、路地の角を曲がったところで、肩が誰かにぶつかった。

「いってーなっ！！……んだよ、ガキかよ」

威勢のいい声で怒鳴りつけられ、叶湖が笑顔でその主を見上げた。

「ガキが、こんな時間にうるついでんじゃねーぞ」

「……ちようどよかった」

叶湖が辺りをちら、と見まわし、唇の端をつりあげる。

「今ね、とつてもとつても痛むんです」

「ああ？」

「私、痛い嫌いなんですよ」

「んだよ、怪我でもしてるってのか？」

男の言葉に叶湖はす、と手の平を自分の左胸にあてる。

「そうかもしれないね。とても痛い……ここが、これほど痛むものだと、知りませんでした。でもね、私を傷つけたアレは、アレが望んだ普通を手にしななければいけない。そう、思いませんか？ 家族がいて、友人がいて。その平凡を誰にも害されることはない。そんな普通を手に入れるのに、どうして大きな障害を乗り越える必要がありますか？ だからね、私にアレがいらんじやない。アレに、私が邪魔なんでしょう……。ね。ああ……本当に痛い。だからね……私、今、とっても機嫌が悪いんですよ」

「ごめんなさいね？ その眩きは暗闇に解けて、そして消えた。」

「聞いたぞ、叶湖。昨日、和樹を探しに、夜に家を飛び出したんだって？」

朝。自室から姿を現した叶湖に、明け方帰ってきたばかりの直が待ち構えていたように小言をいう。

「あー、そこまで怒るなって。確かに危ないけど、雨も降りだし、黒依も無事戻って来たしで、叶湖も俺を心配してくれたわけだしよー」

「はあ……。暗くなつてから外へ出るな」

叶湖は直の言葉に静かに頷きつつ、その背後のテレビに視線をやった。

『……これで、連続猟奇殺人の被害者は5名になりました。特に、今日の明け方に発見された2名の遺体は昨夜殺害された可能性が高く、同日中に2人以上の被害者が出るのはこれが初めてということ、エスカレートする犯行に警察は更なる注意を呼び掛けています。また、この2名のうち1名については模倣犯による犯行ではないかとの見方もありますが、その犯行の手口から同一犯によるものという見通しで捜査が進められる模様です。引き続き、新しい情報が入り次第、お伝えいたします』

小学生篇？ 事件（後書き）

読了ありがとうございました

小学生篇？ 憂鬱（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学5年（11歳）

大里ゆとり：叶湖のクラスメイト

注意）若干暴力表現入ります



## 小学生篇？ 憂鬱

一時、叶湖の住む町で連続猟奇殺人事件の恐怖に怯えた人々は、『犯人の自殺』という警察の発表を受け、1人、また1人と緊張感から解き放たれ、日々の変わらない生活の中へと埋没していく。

『犯人の自殺』。その情報にある種の疑いを持つものなど、警察内部の数人を除けば、ほとんどいないに違いない。あれやこれやと騒ぎ立てるマスコミの人間だって、自分たちが書きたてるスクープの看板をつけた嘘八百に、一縷の事実が紛れ込んでいるなんて、一体どれほどの人間が信じていることだろう。

叶湖は日に日に輝きを増す日光に、不快気に目を細めつつ手元の書物の頁をめくった。叶湖がよく読む学術書の類ではなく、異国の歴史書である。過去の出来事など、フィクションと変わりない評価を与えている叶湖は、娯楽のつもりでページを手にとった、のではあるが、生憎その内容は頭を通り過ぎていくだけだった。

その原因が、夏に向けて上がり続ける気温の所為だけではないことをよく知っている叶湖は、苛立たしげに髪を掻きあげて、ため息を飲み込んだ。

……。衝動のままに、再び手を赤に染めたことは後悔していなかった。そもそも、倫理観や道徳観念など欠けているところか、存在すらしているか怪しい自分のこと、後悔に至る根拠がない。

それでも、うまい具合に自分の隠れ蓑になっていた真犯人を自殺に見せかけ処分したのは、自分がそれ以上衝動に流されるのを抑えるためでもあった。

真犯人が模倣犯の存在に恐れ、自首する可能性を考えなかったわけではないが、そもそもが単独で連続猟奇殺人を犯していた叶湖のこと、模倣犯の存在が警察にバレたところで特に自分に危険が迫るとの考えはない。

あえて言うのなら、やはり自分が今しばらくは情報世界から距離を置かなければならない立場にいるから、であろう。

あの兄2人が今の年齢の叶湖に一定以上の勝手を許すことはないだろう。と、すれば、あまりに深い闇に足を突っ込むのは、いらぬ面倒を増やすだけである。

前世で実の両親が殺害された時ですら、面倒を回避するために犯人の情報を隠蔽した叶湖である。兄2人の身が心配、というよりは、自分に掛かる面倒を回避するための手段であった。

だからこそ、叶湖は自らの隠れ蓑だった真犯人を処分した。生きのままに自らを分解させ、流れた血で遺書を書かせた。……自殺というにはあまりにも狂った、真犯人の末路をそれでも自殺と警察に判断させたのは、それまで彼が犯した犯行の猟奇性と、叶湖が自らの情報をことごとく隠すことに成功したからであった。

叶湖は静かに自分の手の平を見つめる。

そもそも自分は快樂殺人者ではなかったたので、殺人に快樂を求めたことはなかった。あくまで、叶湖の動機の根底は、彼女自身の精神の病。

痛覚への恐怖心であり、他人の痛覚を刺激することで、叶湖が味わう可能性のある痛覚に対しての警戒心を養うことであつたのだ。それでも、その手段と目的、方法と結果にいつしか意味など無くなり、結局残つたのはただの衝動であつた。

だからこそ。叶湖は思う。

あの夜、叶湖が極度の苛立ちを発散するがごとく男を解体した時も、すべての可能性を消すために真犯人を処分した時にも。叶湖の衝動が解消されることはなかった。

叶湖の本能が望んでいるもの。その衝動の矛先など、考えるまでもない。……それにたどり着いた時、叶湖はいまさらどうしようもない感覚を抱いて、とてつもない憂鬱を感じているのだった。

「……あの」

高く、透き通った声が聞こえ、叶湖は顔をあげた。正直、例の呼びかけだけでは、それが一体誰におくられたものか、分かったものではないのだろうが、遊びたいさかりの小学生が放課後に図書室に籠もりきる例など叶湖以外になかったし、そもそも叶湖は入口から最も遠く、本棚の影で死角になる奥まった場所を陣取っている。この辺りで声をかけられる人間など自分しかいないことを理解してしまつての行動だつた。

「何か？」

視線の先には、案の定叶湖の陣取る机の横に立ち、一心に叶湖に視線を送る少年がいた。

長めの黒髪に隠された整った顔は少女のようで、成長しきっていない体格や、声変わり前のハスキーな声も相まって、性別を分からなくさせている。

それでも叶湖がそれが少年だと分かるのは、背負われたランドセルの色以外に、彼が叶湖のクラスメートであつたから、であつた。

「大里、ゆとり君……でした？」

一般的に、誰にでも優しい仮面をかぶっている叶湖に微笑まれ、ゆとりは小さく頷いた。

「うん……実は、お願いがあつて……」

困ったように両の眉尻を下げ、情けない表情を浮かべる少年に、叶湖は首を僅かにかしげる動作で続きを促す。

「僕に、勉強を教えて欲しいんだ……」

きゅ、とズボンのすそを握りしめて頼み込む少年の姿にくつり、とバレないように喉を鳴らした叶湖は視線で向かいの席を指した。

「とりあえず、座ってはいかがです？ それから……私の記憶が正しければ、アナタの学校の成績は随分と優秀では？」

叶湖は手元に開いたままだった本を閉じ脇へ避けると、促されるままに向かい側に座ったゆとりへ視線を向けた。大里ゆとりとは、2年と4年、そして今、5年のクラスが一緒であったハズだ。2年の頃は特に際立った印象も、優等生のイメージもなかったが、4年とそして5年で同じクラスになってからは、彼も教室に数人いる、テストで100点以外を採らない人種の1人であった。

都心に近いという小学校の立地条件も相まって、子供の教育に熱心な親や、金銭的な余裕のある家庭を持つ子供は、小学4年の頃から中学受験を視野に入れ、学校とは別の教育機関で学習を進めるようになる。ちなみに、中学受験では学校で扱われる数段ハイレベルなことを扱っていかねばならない、という性質柄、そういう生徒は学校のテストなど満点が当たり前、となっていくのであった。

いわゆるお受験組。大里ゆとりもその内の1人である。

「学校では……ね」

ゆとりの表情が曇る。叶湖は大体の根柢を察した。学校とは段違

いの難易度の問題を扱う、ということとは、学校で満点しかとらなくとも、塾でいい成績がとれることとはイコールで繋がらない。むしろ、そうでない場合の方が多い。

「今年に入って、また成績が下がって……。お母さんには言えてないけど、夏の終わりのテストで今と同じ点しか取れなかったら、塾のクラスを落とされちゃう……。そうになったら、僕……」

顔をくしゃくしゃにして、今にも泣きだしそうな情けない顔をするゆとりには、叶湖は内心の高揚を一切表に出さずに首をかしげた。

「それを、どうして私に？ アナタは知っているようですけど、私は放課後はずっと図書室で過ごしています。要するに、アナタと違って受験用の勉強はしていません。そんな私では勉強を教えるのに不十分では？ 本当に志望校に行きたいなら、お母さんに相談して、家庭教師をつけてもらった方が確実でしょう？」

「……でも、きょーちゃんはずっと、頭が良かったでしょう？ 今も……。だから……」

叶湖はゆとりが紡ぐ理由以前に、第一声で固まった。

「……失礼。今、私のこと、何て呼びました？」

「きょーちゃん、て……。駄目、だった……？」

聞き咎められて不安そうにするゆとりには、叶湖はわずかに逡巡する。

「私、名字とちゃん付け、嫌いなんですよね」

自分のものではない名字で呼ばれるのは違和感以外の何物でもな

いし、精神年齢三十路過ぎが、10を超えたばかりの子供にちゃんづけされる、というのも受け入れがたい。

「……ごめんなさい。……ねえ、聞いてもいい？」

「どうぞ？」

ふと、気になったように顔をあげ、まっすぐに叶湖の瞳を見つめてくるゆとりに、叶湖は笑顔で頷いた。

「あのね、無理して笑うの、何で？」

「無理して……？」

「だって、今、僕が変な呼び方して嫌だったんでしょ？なのに、笑ってた。……無理しなくていいよ。怒った顔して……いいよ？」

ゆとりの言葉がす、と頭を巡る。

「ふっ、くすっ。ふふっ……」

それがやっとな自分の心にストン、と落ち着いたとき、叶湖は笑わずには居られなかった。

「これだから子供は怖い……ふふっ」

叶湖が常に笑顔でいることに無理をしていた、という認識は一切なかった。ただ、それが叶湖にとって当たり前前で、叶湖と近い場所にいる人間にとっても当たり前前のことだった。

それでも、確かに叶湖は1人で居る時、黒依と2人で居る時、その仮面をはがしていた。

と、いうことは、やはり息苦しかったのだろうか？ その仮面が、通常の大人であれば、叶湖の笑顔が仮面であるということに気付

くだらう。口先はストレートな叶湖であるので、表情と言葉が矛盾することなど多々あるからだ。しかし、それに気付いた大人は素直に叶湖にその事実を告げるなんてことはしない。

ただ、叶湖の底知れなさに恐れを抱くか、叶湖の捻くれた性格に興味を持つかの2通りである。

それゆえに、これほど素直に表情を偽るなど言われたのは、叶湖にとって初めての経験であった。

「……なんで笑うの？ また怒った……？」

また、何かしたのか、とゆとりが叶湖の機嫌を伺うように、心配顔で叶湖を見つめる。

「いいえ。今のはうれしかったので笑っただけですよ。……そうですね……構いませんよ？」

「え？」

叶湖からの許可の言葉に、それが何を指すのか理解しきれなかったゆとりがきよとん、と首をかしげる。

「アナタの好きな呼び方で呼んでください。アナタになら、どう呼



ばれても構いませんよ。それから、私でよければ、暇なときに勉強を見ても構いません。どうせ、最近読みたい本も尽きてきたことですし、ここにただ座っているのも暇ですから。それから……そうです、アナタの前ではできるだけ、そのままの表情をしているようにしましうか」

につこりと、叶湖の機嫌がいいときの笑顔で微笑まれ、ゆとりはしばし驚きの表情で停止した後、ぶんぶんと首を縦に振った。

「ありがとう、きょーちゃん！」

笑顔で礼をいうゆとりに、叶湖は内心で苦笑する。

別に、叶湖がめずらしく仏心で面倒を引きうけたわけではなかった。大里ゆとりのよくも悪くも純粋な子供らしさが叶湖にとってプラスに働きかけたのは事実であったが、子供らしい純粋さは時として自分の癪に障ることもあるのだということを知り、叶湖はしっかりと心得ている。

にも拘らず、今まで黒依以外の誰とも別段に親しい関係を築き上げたことのない叶湖が今になってその一線を踏み越えたのか。

それはやはり、自らの利益……もとい、面倒回避のためであることに違いはなかった。

黒依と絶縁してからというもの、叶湖はとにかく1人になるのを避けた。大人しく集団登校の列に並んだし、授業を抜け出すことも

しなくなった。叶湖と黒依の仲が良かったことを知る兄たちは叶湖と黒依の間に何かがあったことを勘付いてはいるが、元々大人びた2人のこと、少し早い思春期でも来たのだろう、と口を挟むことはしなかった。

思春期といえ、反抗期が付随する。もしかしたら、あまりに口うるさくしすぎること、叶湖が今まで以上に扱い辛くなる可能性を考慮したのかもしれないが。

とはいえ、放課後は叶湖は1人になる。彩藤の家に長い時間いるのはあまり好きではなかったが、あまりに自分の別宅に行きすぎても兄2人に問い詰められる可能性があるし、何より黒依しか場所の知らない別宅はしばらくの間鬼門になろう。

尤も、放課後は例の夜以後、今まで以上にブラコンになった茜が黒依を引っ張って帰っているらしいので、あまり性急に解決すべき問題ではなかったが、丁度良く、放課後を過ごす相手を見つけたのだ。ここは、上手く乗るのがいい、そう判断したまでだった。

素の表情を見せると言った舌の根乾かぬうちに、内心で表とは別の表情を浮かべながら、叶湖はうれしそうに机にテキストを広げ始めたゆとりを見つめた。

小学生篇？ 憂鬱（後書き）

読了ありがとうございました。

小学生篇？ 思惑（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学5年（11歳）

桐原黒依：上に同じ

桐原 茜：黒依の妹

大里ゆとり：叶湖の友人

## 小学生篇？ 思惑

「何処に行くの、お兄ちゃん？」

夕方、茜と一緒に自宅へ戻った黒依がカバンを置いてすぐに玄関へ向かうのを、茜が呼びとめた。

「夕食までには戻ります」

「そういうことを聞いてるんじゃないの！」

当たり障りのない返事でお茶を濁しつつ、玄関のドアに手をかけた黒依に、思いの他強く飛んできた怒声。それを聞いて黒依は静かに振り返った。

「茜？」

「お兄ちゃん、最近変だよ。……あの人と急に話さなくなったし……でも、それから変。私と一緒に帰る道も、みんなでご飯食べてる時も、杏里のお見舞い行く時も、ずっと私たちのことなんか考えてない！」

「……いつてきます」

茜の言葉に僅かに目を伏せた黒依はその言葉に対する返事を返すことなく、茜に背を向けた。

「待つてよー！」

なおも兄を呼びとめようと、その腕を掴もうとする茜を、黒依は至極自然に避けた。

それは、黒依だからできる芸当で。しかし、服の裾すら掠りもせず宙をきつた手の平を見つめ、茜はぐ、と唇をかんだ。

「お兄ちゃんのバカ!!」

常人より圧倒的に聞こえる耳に、閉じた扉の向うからの罵声を聞いて、黒依はしかし何も言わずにそのまま家を立ち去った。

黒依は迷っていた。

家からほど近い森林公園の林の中。まっすぐに延びる広葉樹の幹に背を預けるが、結局そのままズルズルと座り込んでしまう。

叶湖に絶縁宣言されてからというもの、茜の言う通り、黒依の心は宙に浮いたままだった。

叶湖がどうして自分を自由にしたのか、まったくもって、黒依には理解できていなかった。

彼女が裏切り行為だと、不快感をあらわにしたことについては、黒依は深く悔いている。結果的に、最初の連続猟奇殺人の犯人は彼女ではなかったようであるし、勝手な勘違いをした拳句、1人で焦って彼女のモノに傷をつけてしまったのも事実だ。

叶湖に見放されてもおかしくないほどのミスを重ねてしまったと、黒依自身も自覚があった。

しかし。

どうして叶湖が黒依を自由にしたのかその1点については黒依はまったく叶湖を理解することができていなかった。

本来の『嘘々叶湖』であれば、叶湖は迷わず黒依を殺したに違いない。にも拘らず、『彩藤叶湖』はそうしなかった。

自らの未来が続いていることに、自分が彼女の元へ戻れる可能性を見出そうとし、しかし黒依は自分から叶湖に歩み寄ることは決して自分に許そうとは思わなかった。

何度も何度も悔いたこと。自らの有用性が、彼女に近づくものとして、到底十分でないことがその大きな理由の1つで。

そんな二の足を踏みつつ、そもそも未来の自分は彼女の側にいられるのだろうか、不確定な希望に自らを見失いそうにもなる。

叶湖が黒依と行動を共にしなくなつてから、彼女は確実にクラスへ溶け込みつつあった。授業には出るようになり、登下校も集団登校の列に混ざる。そして何より、放課後を共に過ごす友人ができていた。

彼女が持つ本来の異質さを表に出さず、対他人用である笑顔と優しさで、その『友人』に接している現在の状況に、心のどこかで安堵を抱きつつ、しかし彼女から一切の興味関心さえ向けられていない自分の現状と比較してしまえば、たちどころに溢れだしてしまう

醜い嫉妬心に、殺意まで沸いてくる。

そんな気持ちを抱えながら、黒依は思うのだ。彼女の、『彩藤叶湖』としての人生に、自分は邪魔なのではないか、と。

彼女は黒依とは違った。

物ごころついた時にはすでに妹以外の家族を亡くし、間もなく妹を奪われ、そして自由も奪われた自分。その証拠に、叶湖と距離を置いた今、以前よりも家族と過ごすことが多くなった黒依は、しかしどう家族の中に入ればいいのか分からず、空回ってばかりいる。

「……ホントに、バカ……ですよねえ……」

家を出る寸前に茜に言われた言葉が胸に残り、後味の悪さを味わっていた。

そんな、家族との接し方すら分からぬ自分と、叶湖はやはり違うのだろう。

彼女がいつから常人の道を踏み外れたのかは知らないが、彼女が大学に進学するのに都市部へ下宿するまでは、何ひとつ普通と変わらぬ一般家庭で過ごしていた。

もちろん、高校卒業までの学生生活も問題なく一通り経験している。

大学在学中に実家が放火によって全焼、両親を亡くした際、戸籍を始め、彼女が生きている情報をすべて隠匿し、叶湖はアンダーグラウンドへもぐった。

いかに大人数が在籍する大学のこととはいえ、学籍を抹消しても



人の記憶から情報を消すことはできない。しかし、叶湖が自らの行方をくらませることに成功しているところをみると、もしかすれば大学生活は人とかかわりの極端に薄い、ものだったのかもしれないが、それでも黒依とは比べ物になるはずもなく、『まとも』な生活であつたろう。

そんな彼女であるのだから、2度目の人生とて、要領を掴んでいくはずだ。

叶湖の両親の夫婦関係は冷え切っているようだが、兄2人は純粋な親愛で叶湖の成長を見守つて来た。

そんな中で、まったく『普通』になじめない、叶湖の側において、彼女に示されることでしか生きる術すら分からない黒依は彼女が『普通』に生きるための邪魔でしかなかったのではないか。

黒依はそう思う。

自分という所為で、彼女は両親を殺した従妹以外に血縁者のいない天涯孤独以上の孤独になることもなく、彼女を気にかける兄2人と至極普通な2度目の人生を、今まで受け入れることができなかつたのではないか。

黒依という、闇の世界でしか生きられないファクターが、『普通』の中でも生きていける彼女を、しかしそちらの世界へ戻そうとしなかつたのではないか。

黒依は自分が彼女にとって役に立たない存在で、不必要である、という事実よりも、もしかすると、それ以上。彼女にとって邪魔な負担でしかなかったのではないかという、その可能性に酷く苛立つ自分を見つけた。

そして、そうであるならば……と思うのだ。自分は、彼女の絶縁宣言を受け入れるしかないのだ、と。

「きよーちゃん、おはよ!!」

「おはようございます、ゆとり」

叶湖は校門付近で自分を見つけ駆け寄って来たゆとりに微笑んであいさつを返した。

「聞いて！ 僕ね、この間のテストで満点とれたの。お母さんも喜んでくれた。……きよーちゃんのおかげだね！」

叶湖がゆとりに勉強を教え出して、しばらく経つ。当初はゆとりの成績が下がった理由が分からなかったが、結局、それはゆとりの理解スピードに原因があることが分かった。

つまり、授業のスピードにゆとりの理解が追いつかず、主に算数

などの教科書を読むだけではどうしようもない教科が少しずつ遅れて行ったようだった。叶湖が持ち前の分析力で、理解の及んでいないところを的確に判断し、そこを補足的に説明してやれば、ゆとりの実力は面白いように伸びた。

スピードが遅いだけで、1度理解すれば応用にまで対応できる柔軟性を持ち、また暗記力に優れているゆとりは、正直、想像していたよりもずっと、楽な生徒であった。

「そんなことはありませんよ。アナタ自身の実力でしょう?」

叶湖は珍しく本心でものを言い、ゆったりと微笑むと、教室へ足を進めようと振り返る。

その拍子に、ふと視界に入った、毎朝の登校風景に内心でため息をついた。

いつまでたっても慣れない……。生徒たちが蟻のようにうじゃうじゃと、学び舎の中へと吸い込まれていく。その様が、酷く滑稽で……。しかし、自分もその中の1人であるという事実には不快感しか感じない。

いつそ、海外にでも渡って、手っ取り早く博士号でもとってしまおうか。叶湖が不登校になりでもすれば、体裁がどうのとヒステリ―を起して家に飛んできそうな親を思い浮かべ、それならば問題ないだろう、と思う。

そもそも、今さら取り繕うべき体裁が、2歳の子供を小学6年生に預けて家に戻らなくなった両親のいるような家庭にあるとも思わ

ないのだが。

とりあえず。

「なんて退屈なんでしょうね……」

「？ きよーちゃん、なんか言った？」

「いいえ、何も？」

予定調和の普通色の世界に、間違いなく、叶湖は辟易していた。

小学生篇？ 思惑（後書き）

読了ありがとうございました。

小学生篇？ 卒業（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：小学6年（12歳）

桐原黒依：上に同じ

大里ゆとり：叶湖の友人

## 小学生篇？ 卒業

「……え？」

「うそっ!？」

2人の驚愕の声が重なった。

卒業式。全くと言っていいほど思い入れのない学び舎から卒業する、というイベント事に半ば無理矢理、兄たちによって押しやられた叶湖は教室へ入った、のではあるが。

そこにいたゆとりの姿に目を丸くした。そして、それはゆとりも同じことで。

「……驚きました。アナタも由ノ宮学園へ入学するんですか？ 志望校は別だと聞いていたんですけれど」

伝統か何か知らないが、中学の制服で出席するという小学校の卒業式。教室には学区の公立中学の制服に交じり、私立中学の制服を身にまとう生徒が何人かいる。

叶湖もその1人で、偏差値も上位3校ほどに入り、何が特徴かといえ、学費が高いことで有名な私立、由ノ宮学園の制服を身にまとっていた。

そして、同じ制服を着る生徒は教室内にあと2人。それが、大里ゆとりと桐原黒依であった。

「うん、最初は本当に別の学校にいくつもりだったんだけど、きよーちゃんに教えてもらうようになってから、成績があがって。塾の先生やお母さんがそれに喜んで、由ノ宮に入れるんじゃないかって。由ノ宮は他大学への進学率でも優秀だから。……失敗したら恥ずかしくて、きよーちゃんには言えてなかったの。ごめんね」

「そういえば、医学部志望でしたっけ」

当初、ゆとりが志望していたのは、大学までエスカレーターであがれる由ノ宮と違い、中高一貫校の進学校だった。由ノ宮受験も同じで、ようするに大学で医学部へ入るだけの学がつくような中学を目指していたらしい。

「それにしても、きよーちゃんが受験をするとは思ってなかった。

塾も行ってなかったんでしょ？ 凄いよ！」

「ええ、まあ」

正直、叶湖が中学受験をしようと思いだしたのは、ゆとりと出会ってからであった。そもそも、前世を一般の中流階級の家で生きた叶湖にしてみれば、中学を受験する、というイメージがわかかなかつたのだ。

また、成績優秀な兄たち、特に医学部の権威へ通う直ですら、中学は普通の公立校。高校でようやく難関の進学校へ入学したのだから、叶湖に中学受験のアイデアがわくはずもない。

その意味では、ゆとりと出会ったのが大きかったといえよう。彼



と出会い、中学受験のアイデアに気付き、そして辟易しはじめた生ぬるさから脱却するためにも、叶湖は近場でも特に難関とされている由ノ宮を選んだ。ちなみにダントツでナンバーワンの中学校を選ばなかったのは、生憎、その学校がある宗教を信仰していたからである。徹底した無神論者で宗教が嫌いな叶湖はその学園を避けて当然であった。

実際は、もつと大きな理由があったのではあるが。叶湖は自分の目の前のゆとりの肩をすかし、その向う。黒依を見つめる。

彼も彼とて中々普通には埋没しきれないことを知っていた叶湖は、万が一にでも、黒依が中学受験をした場合に同じ学校へ行くことを避けたかった。……のではあるが。

「どついう手を使ったんでしょね……？」

「ん？ 何が？」

「いえ」

叶湖が由ノ宮学園を選んだ理由、それは学費の高さであった。父親が大学病院理事長。母親が大企業役員、という彩藤家から比べれば特に困る額ではなく、実際、叶湖が由ノ宮学園を受験する意思を父親に伝えたところ、特に問題なく、いつも通りの無関心でそれに応じられた。

が、しかし。桐原の家にそれだけの財力は無いはずであった。特に、末の妹が相変わらず入退院をしており、支出が絶えない。家族を大事にしたいはずの黒依がまさか、叶湖の企みに気付いたにせよ、追ってくるなど不可能と考えてこそその、由ノ宮学園受験であったはずなのだ。

「それにしても、受験会場でも、合格発表でも、入学前説明会でも合わなかったね？」

「そうですね、上手くすれ違ってしまったようです」

正直言えば、受験するために学園へ行ったのが最後、叶湖の実年齢を考えれば、落ちることなど考えられなかったので、あえて合格発表にも行かなければ、説明会も結局面倒で行っていない。

結果、黒依が追ってきていたことにも、今に至らなければ気付かなかったのではあるが。

叶湖は受験にあたり、彼女の武器を一切使わなかった。

もつとも、受験問題に関してはカンニングなどしなくとも絶対的に大丈夫だという確信を持っていたのだが。

……受験者をチェックすることもしていなかった。それゆえに、今朝、叶湖は驚いたのだ。

親と兄以外は、内申書の関係があった小学校の教師以外の誰にも

受験するということすら告げなかったし、受験することがどこから漏れたにしろ、受験校まで分かるはずがない。ということとは、読まれた、のだろう。

黒依は叶湖が彼を避けるために、中学を彼と別れることを望むと正しくそう、推測した。

そして、叶湖が受験する学校までも。

正直、黒依ほど長い付き合いであれば、叶湖が宗教嫌いなのも知っているし、黒依を寄せ付けないために叶湖が選ぶだろう学校も予想できるに違いない。

あとは何校か目処をつけ受験し、試験当日、会場で叶湖の気配を探せば、ついてくることなど簡単なはずである。

面倒くさがりで、且つ、自分の学力に自身を持っているハズの叶湖が、第一志望校以外を受験する可能性など皆無であるのだから。

「……はあ」

叶湖が僅かにため息をつき、顔を覆ったのを見て、ゆとりが慌てた。

「大丈夫？ 体調でも悪いの？」

「いえ、大丈夫ですよ。ご心配なく」

叶湖は身体から力が抜けるのがわかった。

自分であれば、黒依が追ってきているのを気づけるはずだった。受験者名簿に侵入することなど容易い筈であった。そもそもが、黒依が追ってくる危険性も考えなかったわけではないのに。

それなのに。それをしなかった。絶対の意思を持って、彼を避けることができなかった、なんて。

まるで、自分が今に至って、未だに彼を望んでいるようではないかと。

叶湖は呆れのような、苦笑のような、そんな説明のつかない感情に気付いて、心の中、複雑な気持ちを抑えきれずにいた。

あと2週間。

新しい学びの舞台で、新しい物語が始まるようにしていた。

小学生篇？ 卒業（後書き）

読了ありがとうございました

中学生篇？ 入部（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学1年（12歳）

桐原黒依：上に同じ

大里ゆとり：叶湖の友人

宮木 篤：化学同好会会長

## 中学生篇？ 入部

「待って、きよーちゃん！」

HRが終わるや否や、すでに帰宅の準備を済ませていた叶湖は力パンを手にとり教室を出た。……ところで、ゆとりに呼ばれて振り返る。

「どうしました？」

叶湖が入学した由ノ宮学園の特徴。それは、成績順にクラス編成がされるといところで、叶湖も、ゆとりも、黒依も。Aクラス、要するに最優秀クラスに属していた。

その中でも際立っているのが黒依で、新入生代表を務めたその心は、主席入学者。叶湖が不思議に思った学費の問題は、彼が学費全額免除の特待生の権利を得ることで解決していたようだった。

受験が終わり、特に2人で勉強する機会も減ったゆとりと叶湖ではあるが、それでも同じクラスでいる以上、ある程度の友人関係は築いている。その一方で、中学入学からこちら、まともな会話すらない叶湖と黒依がまさか幼馴染で、小学校のある時期までは片時も離れないほどの関係だったことなど、もはやゆとり以外に知るものはいないに違いない。

「あ、うん。きよーちゃん、部活とか、入るのかな……て」

基本、文武両道を目指しているらしい由ノ宮では部活動は必修と



なっているのだが、入学すぐの段階で最優秀クラスであるAクラスに属する者だけは、勉学を優先することを許可されている。……ようするに、部活動が必須ではないのだ。

とはいえ、受験戦争を終えたばかりの生徒が今から勉強に精を出す、などということはなく、Aクラスの中でも8割の生徒が部活動に所属することになる。

もっとも、叶湖がその8割の普通に埋没するなどは、ゆとり自身思わなかったようで、だからこそその質問であるのだろう。そもそも、文武両道、と言っているだけあって、学校で認められた部活動の数は体育会系のもが圧倒的多数を占めている。

すでに研修医として帝都医大府立病院に勤務している直を通して、今回は正式な診断書をとり、全体育の授業を見学している叶湖が運動系の部活に属すとは思えないのだから、その推測にも、叶湖が叶湖である以外に、確かな根拠はあるのかもしれないが。

「今日の昼休みに入部届けを出しました。……ので、今から顔を出すところですよ」

「えー!? 入るの? ……何部?」

叶湖から返った返答が予想を裏切っていたようで、派手に驚いたゆとりが食い下がる。

「……部、ではありませんね。厳密には。……化学同好会です。が、基本、新入生の入部は認めず、その後の素行で部員自らが入部者を招くようですよ」

叶湖の言葉に、ゆとりはなにか味のしないものを飲み込んだかのような……なんとも言えない表情を浮かべた。

「……変な部活」

「ええ、変な部活なんです。……それでは」

叶湖はゆとりの言葉に、まるでゆとりが難しい問題に正解を返した時のような、機嫌のいい笑みを浮かべると、短く分かれの言葉を告げ、化学部の部室へと向かった。

「失礼します」

言って、返事を待つこともなく、開け放たれる扉。その奥から刺さる、視線という視線に叶湖はニツコリと笑顔を浮かべる。

好奇と様子を伺うように訝しげな視線は向けられるが、声をかけてくるものはもちろん、雰囲気のみでも歓迎の様子はうかがえない。そんな様子にさらに笑顔を深くしながら、叶湖はきよるきよると室内を見渡す。

「ちょっと!?!?」

と、並べられた薬品やホルマリン漬けの棚の脇、電子キーでロックされ、準備室と銘打たれた扉を見つけると、悠々とそれに歩み寄る叶湖。

思わず、我関せずだった部員の何名かがそれを阻もうと手を伸ばすが。

ピピピピ……ピ―

滑るような叶湖の指使いはよどみなく、間もなく、電子音と共に解錠の音が聞こえた。

「……なんだあ？」

開かれた扉の向こう。準備室とは名ばかりで、学校に不釣り合いなソファと机が並ぶ様は、まるであつらえられた居心地のいいリビングのようで。さすがに内部まで調査の及んでいなかった叶湖の目が僅かに見開かれる。そしてそんな部屋に不似合いな、部屋の奥に置かれた電子機器。

叶湖はそれらのおおよそに視線をひと巡りさせた後、不機嫌そうな声をあげた室内の人間……ソファにだらしなく寝そべっていた男へ視線を向け、微笑みかけた。

ブリーチのかけすぎで痛み切った金髪。耳にはピアスが並び、制服はだらしなく着崩されている。不良を絵に描いたような姿に、やはりというべきか、おびえる様子は一切ない。

「こんにちは。今日のお昼休みにこちらへ入部届けを提出したハズなのですけれど、顧問の先生からは渡されました？」

叶湖の言葉を聞きながら起き上った男は、ガシガシと頭をかきながら、寝むそうな瞳で叶湖を見る。まるで、選別するように、ゆっくりと。

「来てたぜ。……1年Aクラス、彩藤叶湖。……はぁーん。なーんで、入学したての1年が、化学部に興味もっただけでなく、この部屋まで知ってるうえに、解除キーまで知ってるのかね？」

「そういうアナタは、中等部化学同好会会長、宮木篤さん……2年Cクラス……。で、間違いありません？」

叶湖の言葉に、俺のことまで知ってるのか、と呟いた篤は叶湖を自分へ対面する形になるソファを勧め、自分は一旦立ち上がると視線だけで扉の向こうから様子をうかがっていた生徒を追い払い、扉を閉めた。ガチャリ、とオートロックで鍵がおちる。

「ま、俺の入会后初めて……と、いつか会が作られて初めてじゃないか？ ここまで入った部外者に経緯を表して紹介しとくか。……ようこそ、化学同好会こと、裏生徒会へ。俺が、会長の宮木だ」

由ノ宮学園には3つの学生自治組織が存在する。1つ目が生徒会。主にAクラスの生徒からなるそれは、学園側の多大なバックアップ

を受け、表向きに学園の一挙を担う。

2つ目に風紀委員。こちらは委員会、というわけではなく、部活といった体裁だ。学園側からの補助は少ないが、クラスに関係なく正義感の強いものが集う。役目は簡単。学内の小さな問題の解決や、生徒会と協力し、生徒会主催の行事等でスムーズな運営を手伝う。

そして3つ目。それが、裏生徒会。それが所謂、お金持ち学校として名を馳せ、問題を容易くおおごにできない学園が秘密裏に置いた組織である。

学園に存在することは皆知っているが、暗黙の了解のようにそれが噂になることは少なく、確固たる存在として詳細に認識している生徒は少ないに違いない。唯一例外は、学園側のエゴで明暗を共に担うことになる、生徒会の上役だけ。

主な任務は、学園内で公になることがまずいと判断された問題を消失させること。……必要とされているのは解決でないことに注目だ。

問題としておおいパターンが、裏口で入学した生徒が引き起こすものだろう。後先考えずに引き起こされる問題が、自分の親……ひいては自分まで戻ってくるなど考えも及ばないのかもしれない。親子で首を絞める分には構わないが、学園側はそれとばかりを受けたくない。そういう展開を避けるために、裏生徒会が化学同好会、という気味悪いと評判の部活の影にかくれ、独自に調査を行い、問題を消失させる。

ある時は、その問題が明るみに出る前に情報を握り、親を脅して自主退学させたり、ある時は、実力行使で問題を起こせなくなるまで生徒の自尊心をボロボロにうち砕いたり。

明るみに出ればそちらの方が問題になるだろうことをやってのけ

るのが、その裏生徒会であった。もちろん、そういうターゲットとなる生徒は再三にわたり、学園の良心である生徒会や風紀から注意を受けているはずであるし、学園も最終手段として裏生徒会を使っているのだ、裏生徒会の人間が学園から処分をつけることは、まずない。

叶湖が由ノ宮を受験校に選んだ理由の1つでもあった。

曰く、黒依が居なくとも、退屈しなさそうであるから、だ。

事実を知った時は呆れたものだ。そりゃあ、表向き情報を信じて高い偏差値を提供する受験組を早々に成績別のクラス編成で問題児クラス、Eクラスから隔離する必要もあるわけだ、と。

「と、いうわけだが、残念ながら入部を許すわけにはいかない。満足したら出てってくれ」

叶湖は告げられた言葉に一瞬きよとん、と笑顔を忘れ、次の瞬間  
壮絶に微笑んだ。

「……まさか、理解できていない、と？」

「何が、だ？」

「部外者がこの会について確固たる情報を握っている、その段階でこちら側に拒否権はありませんよ?」

「脅しているつもりか? ここがどこか、俺たちが何しているのか、知った上で?」

篤の言葉に叶湖は自らの狂気を隠すことなく、クツクツと笑う。

「自らが悪役だ、などとは思わない方がいいですよ? 世の中は、この学園に隠れた闇よりも薄暗く、本物の悪役はさらに汚いものです。……なぜ、通常入部を認めない化学同好会への入学届けを、教師……学園側の人間が握り、それがアナタのところまで下りたのか、考えてくださいね?」

篤は叶湖の隠しもしない脅迫を受けながら、その笑顔に引きずられつつある自分に舌打ちをした。こんなことは初めてだった。なぜ、すべてを入学間もない新入生に知られ、その生徒がすでに学園側と交渉を終わらせているのか……。

「残念ながら、私は退学にはできないでしょう。これといってアナタ方が掴めるだろう範囲で私が起した問題は、この部屋の電子ロックの解除キーをどこからか入手してきた程度。それを明かせば逆に化学同好会の秘密も一緒に明るみにでる。……武力行使はもっと辞めた方がいい。残念ながら身内に外科医が居るもので、すぐに傷の原因はバレるでしょうから。もっとも……私を相手にそれ程のことができるのであれば、一度やって見せて欲しいくらいですけれどね。情報戦では、私がこのことを調べつくした今に至って、私のこと

を知らないアナタ方はすでに負けたようなものですし、残ったもので私を粉々に打ち砕けるとしたら精神的に追い詰めること、くらいですけれど……できそうですか？」

にこり、と叶湖が優しくげに微笑む。しかし、もはや篤にはそれが見たままの綺麗な笑顔だとは到底思えなかった。その奥で、叶湖の心に救う、自らでは到底並び得ない化物を、この数分でしっかり認識してしまったからである。

それよりも、なにより。そんな化物を飼いながらの笑顔を、しかし綺麗だなどと思ってしまう自分自身に深いため息をつきながら、叶湖ではなく、自分自身に。篤は頭を抱えたのだった。

結局。前代未聞の化学同好会に自ら入学を果たした叶湖が、精神的にすでに叶湖に白旗をあげた篤を追いやり、裏生徒会での権力を握り始めるのはもはや時間の問題であった。



中学生篇？ 入部（後書き）

読了ありがとうございました。

中学生編？ 王子（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学1年（13歳）

宮木 篤：化学同好会会長

## 中学生編？ 王子

私立由ノ宮学園、中等部・高等部が共に過ごすことになる校舎。2階以上に職員室とホーミルールの教室があつまり、1階には特別教室が集まっている。

その1階を奥まで進み、突き当りの左側。ホルマリン漬けの瓶や劇薬のおかれた棚を抜け、部屋の隅のドアを電子キーで解除すると、その部屋はあった。

春とは違い、部屋の奥にまるで社長机のような立派な机が備え付けられており、その机の上にはマザーボードを挟み、2台のパソコン。そして当初より若干狭くなった、入口よりのスペースには、変わりなく応接セットのようなローテーブルと3人掛けのソファが置いてあった。

そのソファに春と変わらずだらしなく寝そべり、片手に持った1枚の紙切れに視線を向けている男……。

「すっげーな……8割だと」

篤は言いながら、部屋奥の机に向かい、特に何をすることもなくディスプレイを眺めていた叶湖に視線を移した。

「そうですね……」

「はん。相変わらずクールだねえ。……どういう関係な訳よ？新しい生徒会長さまと」

篤が手に持っていたのは今日行われた、来年度の生徒会選挙の結果であった。実際、選挙結果の発表は明日のインターバル 2 限目と3 限目の間に入る中途半端な休み時間 に行われるのであるが、生徒会とは関係の深い、裏生徒会の人間にはいち早く、その結果が伝えられてきた、というわけだ。

立候補に学年による規定はなく、来年度中等部に在学する見込みの生徒であれば誰でも立候補ができる。その証拠に、同時期に行われる高等部の生徒会選挙には中等部3年の者が立候補することも可能である。

そして今回、来年度の中等部生徒会長に当選したのは、現在1年でありながら圧倒的な人気を誇り、学園の王子様と謳われる1年Aクラス主席、桐原黒依であった。

「どういう関係、とは……？」

カラリ、と回転いすを引いて叶湖は立ちあがり、篤の前に向かい合うように座った。現在、叶湖は裏生徒会の会長補佐の立場にある。今まで会長1人の他はヒラの部員以外、役持ちがいなかった裏生徒会であるので、異例のことである。

現在、見た目からして実働派である現会長、篤に変わり、本来の会長の役目である学園への報告書の作成や、その他の組織との情報交換などの事務作業については叶湖がそのすべてを任されている状態ではあるが、一応表向きには篤の下につく位であるので彼に言うことには素直に聞くようにはしている。

……もつとも、叶湖にしてみれば、ではあるので、客観的にみて素直、かどつかはわからないが。

「……小学校一緒だろ？ 6年間もあつてクラスが1度も同じでないことなんてほぼあり得ない。にも拘わらず、まるで初対面のような振る舞い。どころか、同じクラスなのに目立った会話もない。……まあ、もともと人と関わりたがらない叶湖だからなんとも言えないけど……ちょっと不自然すぎるだろ。叶湖、誰にでも優しいしな！。その叶湖がシカトする相手……。何があつたか、気になるのが普通だろ？」

酷く攻撃的が笑みを浮かべて叶湖を追求する篤に、叶湖はおっとりとしたいつも通りの笑顔で微笑み返し、口を開く。

「元恋人です。……ケンカ別れが酷かったの。……と言ったら、納得してくださいます？」

叶湖は真実に近からず遠からずの返事をし、最後にごまかすように付け加える。その言葉に一瞬ポカン、と口を開けて驚きの表情を表した篤は、その後呆れたように乾いた笑いを浮かべて、手に持った紙を丸めて捨てた。

「笑顔で威嚇すんなよな！。……ま、お前が触れてくれんな、つー

なら怖いし触れねーけど」

「怖いって何ですか」

叶湖は篤の言いようにクスクスと声を漏らして微笑む。

黒依は中学に入学してからというものの、ちやくちやくと優等生としての地位を気づきあげてきた。成績は常に主席。授業も無遅刻無欠席。運動神経は抜群で、部活には属していないが、様々な大会で助っ人として出場を果たしている。顔もよく、性格も穏やか。……その表面上はその通り、王子さまに他ならず。

結果、今回の選挙結果でも圧倒的な支持を得た。もつとも、D・Eクラスの生徒には彼をやっかむ者もいて、支持率は8割であったのだが。

「にしても、あんなに完璧で、裏がない人間がいるなんて、どーしてこんなに信じる人間がいるのかね？」

まるで愚か者を笑うように、篤がのどを鳴らす。

「まあ、確かに」

叶湖は頷きながら、しかし、真実は篤が考えているものとは少し違っただろうと予想した。

確かに黒依には裏の顔がある。しかも、前世で暗殺者をしており、その心中には彼岸の妹以外には叶湖の他に執着するものがなく、真実、叶湖に狂っている狂人だ。

しかし、彼が優等生を演じるのは、彼の裏の顔故、ではなく、彼が学生というものをしたことがないからである、と叶湖は正しく認識していた。

黒依は学生を知らない。しかし、叶湖に放逐され、現在黒依の生きる理由は新しい家族であろう。そして、その家族になじむため、普通になるために、黒依はできる最善をつくそうとしているに過ぎないのだろう、と。

御苦労なことだ、と叶湖は思う。それと同時に、やはり普通を演じきれぬ黒依は、叶湖と違い、最初からそうするべき人間だったのではないか、と。

普通など、優等生など、絶対にごめんだ、と。

「とはいえ、裏生徒会は生徒会との共同作業、多いんだぜ？ 仲良くできるかよ、次期会長さん？」

「さあ、どうでしょうねえ……？」

叶湖は本心を隠したままで、いつもの笑顔を浮かべたのだった。





中学生編？ 王子（後書き）

読了ありがとうございました。

中学生篇？ 来訪（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学1年（13歳）

宮木 篤：化学同好会会長

須賀健治：不良の王

\*若干流血表現あり

## 中学生篇？ 来訪

カンッ、カン

「……ってー、おいおい。なーんで、そんな不機嫌なわけ？」

安っぽい金属の階段を下る。その音すら不愉快に聞こえるのに苛立たしげに髪を掻きあげる叶湖。

相変わらずその表情は笑顔ではあるが、いい加減、彼女の機嫌の降下を察知できるようになった篤が振り返り、呆れたように苦笑した。

つい先日、中学の最初の1年を終えた叶湖は今日、篤に連れ出され、都心部のある場所を訪れていた。

薄汚れたコンクリートの壁が並んだ道。電飾の消えた看板を潜り抜け、錆びた階段を下る。

横文字の並んだ看板はその店の名前で。それが掲げられた扉を抜けると、タバコの臭いが鼻をついた。

「帰ります」

「ちよ、ちよーつと待てつて叶湖！」

瞬間、身を翻した叶湖の腕を掴み、それでも壊れものを扱うかのように丁寧な部屋の奥へいざなう篤。とはいえ、叶湖がそれに逆ら

えはすぐに、掴まれた腕が痛みを訴えるような絶妙な力加減で。叶湖は逆らうこともできずに、半ば引きずられるように部屋の奥へ進んで行く。

「？」

と、部屋の奥の一角へ近づくと従って、叶湖と篤はそのおいに付き、眉を寄せた。

「……血臭？ ……ち、トラブルかよ」

叶湖の耳のすぐ上で篤が呟く。

その店は、叶湖の学区を含む、都心部すべてをカバーする地域、その不良たちを一手に束ねる男のテリトリーであった。

そんな場所をなぜ叶湖が尋ねたかと言えば、答えは簡単。各校のいわゆる不良だとか、裏番だとか、そういうものはすべて、その男の管轄下に置かれているとかで、叶湖がもうすぐ仕切ることになるだろう、化学同好会こと裏生徒会も、その例に違わなかったからであった。

とはいえ、叶湖がそんな決まりに従うことはもちろん、誰かに呼び出されるようにその場所を訪ねることも、喜んで引き受けるわけがない。

そんな理由で、今日は篤と待ち合わせ場所で折り合う以前から機

嫌が良くなかった。

「あ。どーすっかな」

血臭の出所でもある、隣室へ繋がる扉を前にして、開くか否かをためらう篤の横、叶湖は迷わずそのドアノブに手を伸ばし、扉を開いた。

「ちよ!?!」

ガンツ、と、瞬間殴り飛ばされたように、扉の横の壁に男がその身体を打ち付けた。すでに流血していた部分から血が飛び散り、叶湖の足元に咲く。

「ああ?」

ふと、その声に顔を挙げれば、こぶしを赤に染めた男がこちらを見ていた。髪は黒。近くの高校の制服を着崩してはいるが、正直、見た目だけでは篤の方が不良っぽいかもしれない。

とはいえ、その目だけは、ずっと鋭く、叶湖とその横の篤を貫いていた。

「……篤じゃねーか。あー、そーいえば、今日だったか。次期会長

殿を連れてくるっつーのは……時間忘れてた」

拍子抜けしたような間抜けな顔で、そう呟く。ガシガシと頭でもかくつもりだったのか、髪に伸ばされた手は、しかしそれが血を纏っていたことで再び下におろされた。瞬間、眉間にしわが浮かび、不機嫌が戻ったのだと容易に読み取れた。

そんな表情の移り変わりを見ながら、なんと、コロコロ変わるものだな、などと叶湖は考える。第一印象は、篤と似ている……そう思った。

乱闘現場に乱入した2人を咄嗟に睨んだその瞬間、目の前の男の瞳は自分たちを射殺さんばかりに細められていたというのに、次の瞬間、相手が顔見知りだと分かっただけで、その表情は気の抜けたものに代わる。

その2面性は篤も持っているものだった。普段は軽薄そのもので、見た目通り、頭の軽い男を装っているが、叶湖はその実、彼が相当頭もキレることを知っていた。

そして、彼の裏の顔がただの不良で納まりきらないほどのものがあることも。だからこそ、叶湖は彼の下に就くものとして、一時とはいえ彼につき従うことができただけだから。

しかし、目の前の不良の王を見ているうち、彼が篤とはまた違った底を持つのだと気付いた。コロコロ変わる表情は、彼が篤のよう

に意図した2面性でその心中を隠しているわけではないことを教えていた。彼はその心のままに従い、行動しているのだと、それを知って。叶湖は面倒くさいと思う。

考えてから行動する人間の方が、その『考え』に横槍を入れてしまえば、操るのは簡単だからである。

「……とはいえ……、次期会長殿、を連れてくるんじゃないのか？ お前の女連れてきてどーするんだ？」

再び、不機嫌なのを忘れたように、きよとんとした顔で篤に尋ねる男。

と、しかし篤がそれに応える前に、身じろいだ第三者がいた。それは、叶湖の隣、壁にうちつけられていたまま蹲っていた男で。

「テメーは動くなつてんだよ!!」

瞬間、特に反撃の動作を起こしたわけでもなく、身じろいだ男は、瞬く間に自分に迫った不良の王に踏みつぶされた。

ぐ、とぐぐもった声を漏らし、身体を折り曲げてうめく。

また、血が飛ぶが、叶湖はさ、と身を引いてそれを避けていた。

「あー……その前に、何かあったんスか？」

「んー？ ああ、いや、コイツ、ヤクに手、出しゃがったから」

遠慮がちに尋ねる篤に、王はあっさりと返事を返す。

「へえ……そうなんスか。やっぱ、出回ってるんですかね、相当…

…」

「ウチの学園では見ていませんけれどね」

「ふうん」

首をかしげる篤に、叶湖がつぶやきを返せば、納得したように頷く。

「ところでその方……どうしたいんです？ 痛くしたい？ それとも黙らせたい？」

その様子を面白そうに見守っていた王に、叶湖は突然に質問を投げかけた。

「んー？ んー、制裁だったから、痛くしたかったんだけど、今はお前らとの約束の時間だから、うるさいのは困るなー」

「そうですか」

至極冷静に返事を返した叶湖は目にもとまらぬ速さでくるり、と長い針のようなものを何処からともなく取り出すと、それをまっすぐ、目のまえに倒れこんでいる男につき刺した。



「つ、ぐ、ぎゃあああつ」

遠慮も何もなく深々とつき刺された針に、咆哮するように悲鳴が上がったかと思えば、すぐにくてり、と倒れ込むように男は気を失った。

それをつまらなさそうに見届けた叶湖は、つき刺した針をそのままに、まっすぐ王へと微笑んだ。

「始めまして。由ノ宮学園中等部、裏生徒会会長補佐、叶湖です」

「……ああ、ご丁寧にどうも。俺、須賀健治スガケンジな」

気を失った男のことなど忘れたかのように、名乗り返す健治。

「ええ、知っています。ところで、私、特に篤さんから何も聞かされていらないのですけれど、ここで何をすれば？」

「いやー？ 別に、ただの顔合わせだし、特に何か必要ってわけでは」

叶湖の質問に健治はあっさりと首をかしげる。

「あ、それよりも、さっき何やったんだ？」

視線で倒れ込んだ男を指して尋ねる健治に、今度は叶湖がきよとん、と首をかしげる。

「痛みを与えつつ、意識を奪ってみただけ、ですね」

「まあ、だよな。で、方法は？」

「針は痛みを刺激するツボに。ちなみに、針は即効性の睡眠薬が塗ってあります」

叶湖の説明に、はー、と本気で感心したように頷く健治に叶湖はわずかに機嫌を向上させて微笑む。

「私は力もありませんし、健治さんや篤さんのように拳を使う、と言うわけにはいきませんから。効率よく、痛覚を刺激するにはツボが一番楽ですよ」

「へー、かしこいな、お前！」

「来年、俺が引退したら、叶湖に中等部の裏生徒会は任せますんで満足そうに笑う健治に篤が呆れた表情を隠しつつ告げる。……叶湖ははつきり気付いている当たり、あまり隠し切れてはいないのだから。」

「うん、いんじゃないかね？ ……あ、なあ、叶湖！ お前、篤の女じゃないんだろ？ だったら、俺の女にならないか？」

あまりに軽く了承された2人の来訪の目的に、しかし安堵感が訪れる前に、続いた2言目にぶち壊された。

叶湖がいつもと変わらぬ風を装う隣で、あからさまに篤がビクリと反応し、おそろおそろ叶湖の表情を伺い見れば、バツとその視線を真正面に戻した。

……今この場に居るものの中で、唯一叶湖の表情を正しく読み取

ることのできるだろう彼だからこそ、気付けたのだろう。叶湖の機嫌が、待ち合わせの時より格段に下降していることに。

「……残念ですけどね、お断りしておきます。……勿体ないですか」

何が勿体ないのか。……というか、誰が、誰に勿体ないのか。あえて明言せずに微笑む叶湖の返事に、残念だなー、などと悠長に呟く健治に、篤は内心でほ、と胸をなでおろす。

「ま、気が変わったら言ってくれよー」

「……ええ、まあ、変われば」

遠まわしに完全な拒絶を受けつつも、それに気付かない健治に叶湖は満面の笑みを、篤はひきつった笑いを送る。

健治にとって、叶湖の印象が悪くないことはしつかりと確認でき、今回の目的は大が付くほど満足に達成できたハズである篤は、しかし、叶湖からみた篤の印象を決して聞きたくないと思っていたのであった。

この後、健治がどんどんと叶湖の魅力に捕らわれ、そんな健治を笑顔で一線引きながらも、叶湖が徐々に第一印象以上の印象を抱いていくのはまた、別の話。

中学生篇？ 来訪（後書き）

読了ありがとうございました

中学生篇？ 裏？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学2年（14歳）

大里ゆとり：叶湖の友人。学年次席

大里凜子：ゆとりの母

## 中学生篇？ 裏？

「きょーちゃん、待って！」

今日も今日とて、普段と変わりなく、ホーミングの終了と共にカバンを持って席をたった叶湖に背後から声がかかった。

「……どうしました、ゆとり？」

その声に特に感情なく、いつもの笑顔で叶湖が振り返るのに、ゆとりはどこか安堵したような様子で、自分の荷物を抱え直した。

「放課後、暇？ よかったら、ちょっとだけ話があるんだけど……」

「まあ、特に同好会の方でも問題はありませんし、私用もありませんけれど。……図書室でよかったですか？」

言いながら叶湖は身を翻し、図書室へ向かおうとする。

小学校時代、図書室で勉強していた習慣は今も変わらず、回数も格段に減ったものの、2人が図書室で勉強することはあった。

「待って……その……、僕の家に来ない？」

「私、おうちにはお邪魔しません、て最初の頃に言いませんでした？」

しかし、食い下がって呼び止めたゆとりに、叶湖は間をおいて振り返る。

実際、小学生のころも、ゆとりの勉強が軌道に乗りだしてから、家で勉強をしないか、と誘われたことがあった。しかし、その時に叶湖はきっぱりと断ったのだ。

理由は簡単。当時は黒依避けのつもりでしかなかった友人関係で、その親にまで気を使うなどゴメンであったから。

「言ってた……。けど、今日はどうしてもそうしたいんだ……。学校に、居たくない」

眉をきゅ、と寄せて、ともすれば泣きだしそうなほど歪んだ表情を浮かべるゆとりに、叶湖はわずかに驚いたように。しかし次の瞬間には機嫌のいい笑顔を浮かべていた。

「構いませんよ」

「いらっしやい、あなたが叶湖ちゃんね？　いつもゆとりにお勉強教えてくれてありがとう」

「いえ、私も勉強になっていきますから」

ゆとりの家は、中学からは少し離れた場所にある一軒家だった。ゆとりに続いて家へあがりこみ、凜子リンコと名乗った母親に軽く紹介される。リビングでお菓子でも焼いていたのか、甘い香りを纏って、叶湖に微笑みかける凜子は、上品そうな姿でどこかのお嬢様を思わせるようにほんわかとした雰囲気纏っていた。

ゆとりの親の職業までは知らなかったが、なるほど、ゆとりを由ノ宮へ入学させてなお、余りある私財はあるらしい。凜子に働きつかれた様子は全く見られなかった。



「ゆーちゃん、二階へあがる前にお弁当箱だけ出しちゃってくれる？ 今のうちに洗っちゃおうから」

ふと、凜子がゆとりに視線をやり手を差し出す。

「……ごめんなさい、お母さん……お弁当、どこかに置き忘れちゃったみたいなんだ。……帰りのバスか電車だと思っただけ……明日聞いてくるね」

叶湖はゆとりの科白を何の感慨もなく聞き流しながら、家を見まわす。ロココ調の家具で、しかし華美になりすぎないように飾られた家は、柔らかい雰囲気、凜子や、未だ性別の判別し辛いゆとりの雰囲気によく合っていた。

中学からは電車にさらにバスを乗り継がなければならない距離にあるが、さすが、富裕層の住宅地に一軒家を持つだけある。キレイに統一された家具は、前世で喫茶店を営んだり、インテリアには気を使う機会の多かった叶湖にも良い印象を与えた。

「ゆーちゃん、最近なくしものが多いわね……。ノートももう3冊くらいなくしちゃったのよね？ 新学期が始まってもうしばらく経ったけれど、今になって疲れがでてきちゃったのかしら……？ 今日もお勉強するんでしょうけど、あんまり無理しちゃだめよ」

綺麗に整った眉をきゅ、と下げて心配そうにゆとりの顔を覗き見る凜子に、ゆとりはありがとう、と一言返す。

「大丈夫だよ。じゃ、もう行くね」

「後でおやつと飲み物、持っていくわね。今日はパイをやいたのきつとおいしいわ、と胸を張って機嫌よく微笑む凜子に、ころころと表情の変わる人だ……と感想をうけつつ、1つ頷いて階段へと

向かうゆとりの後を追う叶湖。

「あ、そうだ。きょーちゃんの分はコーヒーにしてあげて。何も入れなくていいから」

「あらあら。叶湖ちゃんはコーヒーが好きなの？ お姉さんねえ！」  
学校でさえ、自分が水筒で持ちこんだコーヒーを呑んでいる叶湖のことを知っているゆとりが、階段の手前で凜子を振り返る。凜子は顔をキラキラと輝かせたかと思うと、まかせて！と頷いた。階段をのぼりながら、背後で凜子の鼻歌を聞きながら、叶湖はクスリと笑う。

「変わったお母さんでしょ？」

「やさしそうな方じゃないですか」

笑顔に優しい口調だが、叶湖が凜子に対し特段、何ら興味関心を抱いていないことを正しく読み取って、その会話は打ち切った。

「それで……今日は勉強をしに？」

1 人部屋というには十分すぎる大きさの部屋に案内され、ラグの敷かれた床におかれる座イスへ、導かれるままに座った叶湖はさっさと本題を切り出した。

カバンすらおろしていない段階で本題にうつった事実、ゆとりは一瞬驚きの表情を浮かべ、ついで苦笑して自分も叶湖に向かい合うように座る。

「やっぱり嫌だった？ むりやり家に連れてきちゃって、ごめんね」

「いえ、それは特に気分を害することではありませんよ」

叶湖の言葉に安堵の表情を浮かべたゆとりは、しかしそのすぐ後、ズボンのすそをきゅ、と両の手で握りしめて苦い顔をした。

「きょーちゃんは……きょーちゃんは、僕のこと、どう思ってる？」「どう？ とは？」

何か一大決心をして告げられた質問に、叶湖は質問で返した。自身で意地が悪いことは分かっているが、ゆとり相手に気を使うつもりは毛頭感じなかったからである。

「きょーちゃんなら知ってるでしょ……？ みんなが、僕のことを女みたいだって……気持ち悪いって言う……。机をゴミ箱にされてノートに落書きされて。お弁当をゴミ箱に投げ捨てられて」

次第に潤みだす瞳を、何の感慨もなく見つめて。叶湖はそれewithと首をかしげた。

「きよーちゃんも、僕のこと、嫌い？ 気持ち悪いって思う……？  
分らないんだ。僕はきよーちゃんと仲良しでいたい。でも、きよーちゃんは僕に悪口をいうことも、自分から話しかけてくれることもなくて……。なんて。女の子の前で泣いちゃうなんて。だから僕、女みたいって言われるんだよね……」  
ついに決壊した涙線をおしとどめるように腕で拭って、ゆとりは無理をするように微笑んだ。

2学年に進級してから、ゆとりはイジメを受け始めた。

最初はもしかしたら、黒依に続く学年2位に居座り続けた、その学力への嫉妬が発端かもしれない。とはいえ、万年1位をとりつづける黒依は『王子様』イジメの標的にするにはリスクが高すぎる上、相手は生徒会長。なにより、あそこまでスペックが違えば、もはや嫉妬心などわかないのかもしれないが。

そこで、標的になったのはゆとりであった。とはいえ、規模は学年全体に及ぶ、などということはなく、Aクラス、せいぜいその下のBクラスくらいまでで納まっている。と、いうのも下のクラスになればなるほど、Aクラスへの反発が大きく、自分たちだって日夜喧嘩を繰り返しているくせに、頭で負けるからと、イジメるなんてカッコ悪い……といった主張が広まり、結果として悪い意味でも由ノ宮学園が統一感をみせることはなかった。

とはいえ、さすがAクラス。なるべく教師にバレないように。万が一バレても、教師が面倒を避けて黙秘を保てるくらいの低レベルで、かつ、陰湿なイジメが、もはやこれでもかというほどに毎日繰り返されていた。

とはいえ、叶湖は自分に被害がなければ、現段階であれば例え黒依が苛められていようとどうでもいいと思う人間である。万が一、裏生徒会としてゆとりを救うチャンスがないわけではなかったが、裏生徒会は学校の番犬として普段の無茶を許されている組織であり、直接的に依頼がなければ、基本は動き出さない。もちろん、スタンスが身勝手ではあるので、命令違反など日常茶飯事であったが、それこそ、叶湖は組織を動かすことも面倒であった。結果、叶湖は綺麗に我関せずを貫いていたのであった。

「まず1点。アナタは私『も』アナタのことが嫌いか、と聞きましたが、アナタを苛めている人間の中にアナタを本気で嫌いな人間はいないと思いますよ。みな、アナタのことなんてどうでもいいんですよ。傷つこうが、泣こうが……死のうがね。だから、好き勝手、自分の楽しみに巻き込める。嫌いな人間だったら、最小限の関わりさえ持ちたくない」

「どうでもいい。その、言葉の残酷さに、ゆとりは傷ついたように  
瞼をぎゅ、と閉じた。」

「きょーちゃんは……？ きょーちゃんは、僕のこと、どうでもいい

いつて思う？ ある日突然居なくなつて、それでも別に構わない……のかなあ？」

ゆとりの告白に表情すらかえず、いつもの笑顔を保つたままでいる叶湖に、もはや諦めたように。それでも最後の祈りを持って尋ね返す。

「大変申し訳ないんですけど。私には人の心、というものは生まれてから備わつたことがないんですよ。利益目的で人を思いやる振り、はできませんが。万が一、アナタが明日冷たくなつていても、すぐにアナタがしょせんそこまでだった、と興醒めする程度には、どうでもいい、といえはどうでもいいのかもしれない……けれど、私は100%、何の興味関心もない相手に、呼び止められて足を止めることや、わざわざ話をしに、家を訪ねる面倒をする気にはなりませんよ？ 死ねばそれまでですが、それよりは生きている方が面白い……と、思える程度には、どうでもよくはありませんね」

叶湖が興味がないと言え、例え、隣の席に座るクラスメイトであつても名前さえ覚えていないことをしているゆとりは、らしいと言えばらしい、叶湖の言葉に僅かに苦笑を浮かべる。

「すごいね、きよーちゃんは。僕、きよーちゃんくらい、強くなれるかな？」

ゆとりの言葉に叶湖は、何をいまさら、とでも言うように喉を鳴

らした。

「よく言います。アナタをイジめるクラスメートはもちろん、この私ですら、今に至ってまだ、だまし続けようとしているくせに」

中学生篇？ 裏？（後書き）

続く



中学生篇？ 裏？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学2年（14歳）

大里ゆとり：叶湖の友人。学年次席

中学生篇？ 裏？

「よく言います。アナタをイジめるクラスメートはもちろん、この私ですら、今に至ってまだ、だまし続けようとしているくせに」

叶湖の言葉に今までの表情が嘘のようにポカン、と間抜けに驚いた顔を浮かべるゆとり。

「アナタの性格がそのままではないことくらい、もう分かっていますよ。イジメた相手の弱みをこれでもか、と集めて将来までつぶしてやろうと画策しているアナタに、これ以上の強かさなんて不必要でしょう？」

くすくすと、以前機嫌よさそうに笑い続ける叶湖にゆとりはわずかの間の後、は、と短く息をついた。

「あーあ。なーんだ。……ま、叶湖だもんなー。むしろ、今までだませてると思ってた僕自身が甘かった、か」

参った、とでもいうように両手を挙げてヒラヒラと振るゆとりに、叶湖は面白いものでも見たように、一層、機嫌良さそうに笑みを輝かせる。

「いつから気付いてたの？」

「最初です。アナタが小学校の図書室で私に声をかけて来た時から」

叶湖の言葉にえー、とゆとりが不服の声を漏らす。

「とはいえ、あの時は漠然とした予感、でしたけれど」  
「何で？」

「……私と自ら関係を持つとするなんて、まともな神経の持ち主では絶対に思いもよらないこと、なんですよ。まあ、当時、勉強がうまくいってないのは本当のことだったようですけど。あの頭の回転で裏が無い、と言われる方が胡散臭い、でしょう？」

確信を持ったのはその辺りですね、という叶湖の言葉に、もはやゆとりは言葉もない。

正直、ゆとりについては最初はお互い利用しあうつもりだけであつたので、裏があることは分かっていたても、その人格について深いところまで、叶湖持ち前の情報力で調べる、などということとはしなかった。

ので、叶湖にしては、泳がせた方だと思っている。

「それにしても、どうして今回、私を巻き込もうとしたんです？」  
「あれ？ 気付いてない？」

首をかしげるゆとりに、叶湖はわずかに視線を彷徨わせる。  
「そうですね、候補としては……そろそろ自分の欲しかったネタは集められたので、矛先を私に移して、私に直接的な被害を与えることで、絶対的な力で相手をつぶそうとした、とか？」

「自分がきっかけさえあれば、苛められるだろうことは分かっている

んだ」

「当たり前障りのない関係を気付いていますし。地味で目立ちませんし。クラス内では万年ドベですから」

叶湖が何のためらいもなく告げるのに、ゆとりは首をかしげる。

「もしかして、わざと?」

当たり前障りのない性格を装い、できる限り目立たずいるのは、小学生の頃の叶湖も同じであったので、今更ゆとりが疑問を抱くはずはない。わざとなのは分かり切ったことだ。

叶湖は残る1つの可能性。その答えを濁すように綺麗に微笑んだ。その微笑みに、叶湖の答えを見出したゆとりは、はあ、とため息をつきつつ頭をかかえる。

「そりゃ、叶うハズがないでしょ……」

テストで100点をとるよりも、狙った点数ぴったりをとる方が難しいのは考えるまでもなく明らかだ。しかも、ドベを狙うと言うことは、Aクラスの下から2番目と、Bクラス主席のその間を狙って、ということであるから、さらに難易度があがる。

それをすでに1年とすこし、1度もミスすることなく成功させている叶湖に、ゆとりは完敗を認めた。

「それで、私の予想は正解ですか？」

「そうだね。それもある。……けど、1番じゃない。……叶湖、黒依と喧嘩したんでしょ？」

喧嘩というには壮絶で、しかし、間違っではない表現に、叶湖は小さく喉を鳴らして頷く。

「ええ、まあ」

小学校のべつたり一緒にいた時代を知っている相手であるのだから、隠す必要もない。

「叶湖に話しかけるずっと前から、いつの間にか、叶湖ばかり目が追いかけてて。でもそのたびに一緒に視界に入る黒依を、いつも邪魔だなんて、思ってた。だから、叶湖と黒依と一緒に居なくなった時、チャンスだって思ったんだ」

そういえば、ゆとりが話しかけてきたのは、黒依を放逐していくからも間を置かない時だったと思います。

「中学校まで黒依が着いてきたのは予想外だったけど、運よく叶湖とも同じ学校で、同じクラスだったし。黒依とは仲直りする気がないみたいだし。だからね。そろそろアタックしてもいい頃じゃないかな、て思ってた。バレたのは予想外だったけど、僕がまともじゃないから叶湖が話をしてくれたんだとしたら、どっちがいいのか分からないね」

「そうですね」

叶湖は遠回りの告白をしっかりと理解していながら、しかし興味は

ないとばかりにどうでもいい相槌をうつ。

「分かってるよ。叶湖が僕のことどうでもいいことくらい。だから、叶湖をイジメさせるのはやめた。僕の手でなんとかするから、裏生徒会はもうしばらく手を出さないでね」

「……言われずとも」

自己完結をし、さっさと次に話を向けるゆとりに、面白いものを見る目を向けながら、叶湖は1つ頷く。裏生徒会など、学園の7不思議的なものであるのだが、ゆとりが知っていることに特に驚きはない。

「僕、迷ってたけど、やっぱり風紀に入るよ。……そしたら、裏生徒会とももう少し繋がるしね。……結局、叶湖は今、どうでもよくない奴なんかないんでしょ？ だったら、僕も別にいいよ。叶湖の前では猫かぶらなくて良くなったわけだし。……覚悟しておいてね、きよーちゃん」

普段の無垢な猫かぶりの笑顔で、ゆとり以外には呼ばないあだ名で叶湖を呼ぶ。叶湖はそれに苦笑をしながら、特に文句は言わなかった。

どうでもよくない奴。そう、言われた時。1人だけ、そうは言い切れない陰が頭に浮かびあがって、叶湖を僅かに不機嫌にさせたことは、結局ゆとりでも気付けなかった。

ゆとりが風紀委員に入り、表立っては何に争いも、学校からの懲罰もなく、しかし、確実に消え去ったゆとりへの苛めに、叶湖が少しだけゆとりへの興味をふくらましたのは、それから1か月もしないうちのことだった。

中学生篇？ 裏？（後書き）

読了ありがとうございます！

お久しぶりです。10日？ほど、期間があいてしまい、申し訳ありませんでした。

来週一杯、テストが続きますので、更新状態はボロボロになります。が、それが終わっての夏休み、人生の夏休み真っ只中の作者がガツガツ更新していきますので、生ぬるく見守って下されば幸いです。

これで、中途半端ではありませんが、当初予定をしていたフラグ3本立て終わりましたので、黒依ルートに戻っていければなあ、と思います。

次話は、待ちに待ったカッコいい叶湖さんと、黒依の活躍回（に、なればいいなあ……）です、できる限り、1週間以内の更新目指していきますっ！

感想、ご意見、随時受付中です  
それでは。



中学生篇？ 闇？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学2年（14歳）

宮木 篤：叶湖の先輩。化学同好会会長

須賀健治：不良の王

## 中学生篇？ 闇？

「厄介な依頼……ねえ？」

叶湖はつぶやいてパタン、とケータイを折りたたむ。

本来なら今日は化学同好会で扱うような事件は入っておらず、放課後は速やかに帰宅して、久々にプログラミングにでも打ちこもうと思っていたのだが。

昼休みも終わる頃、未だ、形の上では裏生徒会会長を務める篤から、放課後の呼び出しがかかった。なんでも、厄介な依頼が来てしまったらしい。

そんなこんなで、叶湖はホームルームが終わると、いつも通りさつさと教室を出ると、そのまま真っすぐに化学同好会部室へやってきた。

「よお、叶湖」

部室の奥、裏生徒会執務室へ入ると、こちらもいつも通り、ソファに寝そべった篤がひらひらと手を振っている。叶湖は無言で対面のソファに腰をかけると、視線で話を促した。

その様子に、軽いため息をついた篤は、しかしソファから身を起さずと叶湖と向かい合うように座りなおして口を開いた。

「学園から依頼がおりた。……今回のターゲットは……教師だ」  
「教師……ああ、あの数学の、何と言いましたっけ、あの男ですか？」

叶湖の答えに、今まで真面目な顔を演出していた篤も、疲れたように息を吐き出し笑う。

「おっかしいよな、ウチのターゲットになるような教師について、すぐに思い当たるほどの情報収集はしてくせに、名前は出てこないのかよ」

篤の呟きに、何も答えないまでも、何か問題でも？ といっそ清々しいくらいに開きなせる様子を見せる叶湖に、篤はおさえられず、くつくつと喉をならす。

「と、いつわけで、お前に任せるわ」  
「はい？」

ひらり、と依頼書を叶湖の前の机に投げ出し、自分の役目は終わったとばかりに、ソファに横になり直す篤を、叶湖は若干凄みを増した笑顔で見つめる。そんな叶湖の様子に、気のせいか、一瞬身体を震わせた篤は、咳払いをして話を続けた。

「丸投げしようってんじゃないかって……。それ読みや分かるけど、学園側はどうあっても俺たちに秘密裏で動いて欲しいんだと。ってことで、もちろん暴力沙汰も無理。奴が自分から学校を去るよう仕向けるのが今回の依頼らしい。……要するに、ターゲットの社会的地位の抹殺。俺の得意分野じゃないだろ、明らかに」

若干拗ねたようにいう篤に、叶湖は苦笑して、初めて依頼書を手にとった。

「それによ、俺もそろそろ卒業するし、基本、高等部と中等部で裏生徒会は独立して活動してるしな。来年はお前が会長なんだから、ま、適正試験とでも思ってくれよ」

「試験を受けてまで、誰かの上に立つ、なんて立場にはなりたくないんですけれどね」

依頼書に視線を落としながら、口先だけで叶湖が呟くその言葉に、篤は呆れた笑いを漏らす。

「よく言うぜ。裏生徒会に入っただけじゃなく、ずっと俺のことを見定めてやがった癖に。お前、上に立つのも好きじゃないだろうが、それ以上に無能の下に就くの方が嫌いだろ？」

俺は知ってるぜ、というように言う篤に合わせて、叶湖もニッコリと笑う。

「当然でしょう？」

「ごほんつ。……ああ、なんだ。それで、だ。学校からの依頼はそれだけなんだが、せっかくのお前の試験だし、俺からも上乘せの依頼ってことで……」

叶湖のあまりに綺麗な笑顔に、篤は咄嗟に顔をそむけてしまい、しかし相手にしっかりとそれを見とがめられたことに対して、ごまかすような咳払いを放つと、にやり、といたずらを思いついた子供のように、笑顔で叶湖を見上げた。もつとも、その笑顔は無邪気とは言い難く、むしろ、邪気がこもっていそうであったが。

「標的のやつ、結婚してんだけどよ……その相手が、すっげえ美人なわけ！ で、生徒に手え出して、学園から追い出されるような亭主のツケを、そんな美人に払わせるのはかわいそうだろ！？ ってわけで、ターゲットを学園から追い出す前に、その奥さんにはぜひ保障のある形で旦那と別れてもらいたいだよな」

なんですか、と笑顔で尋ね返す叶湖に、わくわくと自分の胸の内を告げる篤の話の聞くうち、叶湖はだんだんと呆れた笑顔を浮かべる。

「……拒否権はないんですね？ ……私は情報を集めるのが得意なだけで、それを利用して人を動かすのは、あまり専門ではないんですけれどね……」

とはいえ、情報屋のついでに、情報をつかって依頼者に利がある

よう、陽動やら操作も行ってた叶湖だ。必ずしも、不可能とはい切れない依頼に苦笑しつつ、頷く。

「いいですよ。これだけの労力を無料で請け負うのは、あまり私の主義には沿わないんですけれど……久々に、人の不幸が見たくなりましたから」

くすつ、と妖艶とも言うべき笑顔を浮かべる叶湖に、中2の表情かよ、と呆れながら、しかし見惚れてしまう自分に、篤は内心でため息をついた。

「なーんか、面白そうな依頼やってんだってな」

依頼を請け負って1カ月。今回は特に生徒絡みの案件ではなかったため、不良の王への報告は後回しにしていたのだが、どうやらどこかで聞きつけたらしい健治に呼び出され、叶湖と篤は彼の城

へやってきていた。

相変わらぬのタバコ臭さに、僅かに機嫌を降下させた叶湖が篤を連れて今は機能していない店を奥へと進む。そこには健治が2人を出むかえるように、机に腰をかけて待っていた。

「耳が早いっすね、健治さん」

「なんでも、叶湖の試験をやってるっていうじゃねえか。……まあ、叶湖の行動は力でねじ伏せる俺らとは反対だからな、見ていておもしろい」

言って健治が笑い、篤もその後ろで、苦笑しつつも同意した。

「見てれば、つくづく敵にはまわしたくない、と思いますけどね。」

依頼からまだ1カ月つすけど、ターゲットは先日離婚しましたし「篤の褒めてるのだから、怖がっているのだから、分からないような科白に、叶湖はわずかに喉を鳴らして首をかしげた。

「それがそんなに可笑しいですか？　そもそも生徒にセクハラしているような男の家庭なんですから、離婚するに至っていないまでも、冷え切っているのは容易に想像できますよ。同じく、よほど大層な性的趣味でもお持ちでなければ、他に女が居る可能性も十分にありました。……から、そこを調べて、相手の女を刺激するような噂を流してやれば、あとは勝手に話が進みます。……むしろ相手の女性の性格によつては、痴情のもつれからターゲットを殺人事件の被害者か容疑者になろうと思っていたくらいでしたので、今回はあまりうまくいかなかったくらいですかね」

「殺人事件の関係者にしまつたら、依頼が失敗するだろーが。……まあ、それはいいが。お前はそれを、自分がやったとはバレないようにしてるんだろ？」

「……冗談ですよ。……こほん。……ま、噂なんて尾ひれがついていろんなどころを出回るものですしね。情報は曖昧なですよ」

叶湖のあっさりした解答に、篤は今度は大々的なため息をついて、呆れた様子を表していた。一方、その隣で健治は感心したように頷いている。

「すつげーな、叶湖。俺も噂は不良どもから入ってくるのもあって、いろいろ情報は多いが、比べものにならないだろーな……」

「とはいえ、私のテリトリーは情報世界ですからね。アナログだったり、ローカルな情報であれば、機械だけでは追えなくなりますよ。ですから、健治さんのこと、頼りにしてますよ？」

叶湖がそういつて綺麗に微笑めば、それだけで、薄暗い店内の中でも手にとって分かるように、健治の顔色が変わる。隣で篤が、俺は俺はーとせがむのを可憐に無視して、叶湖は内心で晒った。

情報世界だけではカバーしきれない情報の収集。それが、情報世界の女王である叶湖が、しかし前世で喫茶店を擬製した、情報屋と



しての店を構えていた理由にある。その点では、不良の王である健治は、地域全般の重要な情報パイプであった。全世界の情報さえ集められる叶湖であるが、情報屋としてはほぼ、活動していない叶湖が今現在、情報を集める理由は、自己防衛のために他ならなかった。そういう意味では、由ノ宮の不良たちから圧倒的支持を得る篤も、叶湖の生活圏内の重要な情報ソースである。

「にしても、いくら浮気してたって、家庭は離婚するほど冷え切ってたわけじゃなかったんだろ？ よく破壊できたよな、お前も……っていうか、その浮気相手が、か……？」

「浮気するような関係性なんですから、突き崩すのなんて簡単ですよ。浮気を許す、される、というのが、関係性が脆弱な良い証拠でしょう？」

「と、いうことは、叶湖は浮気は許さないわけだ。……似合わない正論だな」

「正論が似合わない……ですか。まあ、間違っではないですけどね」

叶湖は、篤に言われた言葉が気に入ったのか、可笑しそうに嗤う。

「んじゃ、前の彼氏とは浮気が原因じゃねーのかな？」

次いで、問いかけられた科白に、僅かに目を見開いた。

中学生篇？ 闇？（後書き）

続く

中学生篇？ 闇？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学2年（14歳）

宮木 篤：化学同好会会長

須賀健治：不良の王

数学教師：裏生徒会のターゲット

## 中学生篇？ 闇？

「んじゃ、前の彼氏とは浮気が原因じゃねーのかな？」

「前の彼氏？ 叶湖、男がいたのか！？」

ニヤリ、と笑った篤の横で、勢いよく食いつく健治にため息をつきつつ、いらぬ話題を掘り返した篤に笑顔で凄む。

「ちょ、それ怖いって……」

「私とあれが元恋人同士なんていうのは、私の戯言……でしょう？」

叶湖は以前、黒依が生徒会長に就任した際に、篤に追及された場面を思い出す。

「お前が話を濁しただけだろ？ 俺はただ単に戯言だとは思ってないが？」

「どうなんだ、叶湖！？」

「……なんでそこまで健治さんが食いつくんですか……」

篤だけでなく、健治にまで追及され、逃げられないと判断して、

叶湖は苦笑をしながら両手をあげる。

「別に、恋人、と表現したとしても、どちらかが告白したわけでもなく、恋人同士だと自分たちで確認したわけでもない。だいたい、小学生の頃の話ですよ。子供の戯言です」

言ったことに嘘はない。確かに告白など、していないしされてない。……否、相手は何度も伝えて来ていたような気がするが、付き合う付き合い合わない話を出したことはないので、恋人同士に“成った”瞬間というのは不明だ。

もつとも、前世であつても、拾得物の感覚で家に置き、八夕から見れば同棲のような生活を始め、いつのまにか身体の関係まで至つてはいたが、よく考えれば、告白をしていただろうか？ 叶湖はそんなことを考えて首をかしげる。告白された記憶はあるが、した記憶はどれも、薄い。

「なんだ……小学生の話かよ。脅かすじゃねえよ、篤！」

「いや、脅かすなって……、小学生の頃、とはいえ叶湖ですよ！？」

普通の小学生じゃないでしょう、どう考えても

「ともかく、もう昔の話なんですから、いいでしょう？ 終わったことです」

叶湖にしてみれば、よりを戻すつもりなどないのだ。いくら、黒依が形だけは家族と共にあるにも関わらず、心までは未だ、闇に染まったままなのだとしても。

叶湖の気持ちがあるにしたって、矜持の高い自分が、今更彼に手を伸ばすことはできないし、そうしようとも思わない。黒依は黒依で、私に捨てられたのは自分が原因だ、などと追い詰められているに違いないので、自分から私の元に戻ってくるなど、しないに違いない。

「まあ、それでもいいんだけどな。……本当に終わったことなんなら」

「どついつ意味です？」

「いや、……別に」

叶湖に追及され、篤はふい、と顔をそむけると、わざとらしく咳払いをして話を変えた。

「まあ、それで、離婚の理由は夫の浮気だから、美人な奥さんも目一杯保障があるし……。これで、ターゲットを追い詰めても心配はないわけだけど……。どうするんだ？」

「とはいえ、奥さんが保証を受け取れることはもう無いと思いますけどね……。すでに、ターゲットの方は詐欺にハマてますから、それが自分で認識でき次第、夜逃げするしかなくなるんじゃないですか……。？」

「はー……。なるほどね、ま、借金の夜逃げが原因なら、学校の責任までは問われないか。しかも、一応詐欺の被害者な形であるわけだしね。……にしても、仕事早。それ、詐欺師、知り合いなわけ？」

済ました顔で告げる叶湖に、篤は唸りながら、疲れたように頭を抱える。

「まさか。……詐欺師の方は、前に、裏から買った個人情報のリストを元にカモを決めていたのを見つけたので、マークしてたんです。リストへのハッキングは簡単ですし、後はハメて欲しい名前を増やせばいい」

「……？　それ、ターゲットがカモにされる可能性、低いんじゃないの？」

「残りの名前は、多重債務者か、すでに自己破産した人間に書き換えておくんです。一応、多重債務者は最初にハジくようですし、自然、ターゲットの名前しか残らなくなります」

「……情報つてこええ。俺、一回お前のパソコンの中身みてえわ」「企業秘密です。……まあ、自分の腕に余程自信があるのなら、ハッキングを仕掛けてみるといいですよ。おそらく、自分のパソコンがクラッシュするだけになると思いますけれど」

言って、楽しそうに笑う叶湖に、篤も苦笑するしかないのだった。

「はあー………すげえな、叶湖……。カッコいいぜ………」

「健治さんの依頼も受けますよ？　普通よりは割安にしておきます」  
感心、というよりは呆れの色が強い篤の隣で、こちらは完全に感心しきっている健治に、叶湖は喉を鳴らすと微笑んで見せる。

「あ？　ああ………それは有難いが。でも、俺はぜってー、叶湖には



依頼しねえぜ？」

その言葉に、どうして？ ともう一度首をかしげてみせる叶湖に、健治はさ、と視線を外すと、何か言いにくそうに、ごによごによと言葉を濁す。

「阿呆。お前、男がその……女に……っていうか、俺が、お前に……」

「なんです？」

「あああー！ー！ だから、だな！ 男が、ちよつといいな、とか思ってる女の世話になるのなんてカツコ悪いだろーが！」

背後で、あ、抜け駆け！ なんて喚きが聞こえるのを叶湖は無視し、バツが悪そうに叶湖から顔をそらしてしまった健治に喉を鳴らして笑う。

「っ、笑うなよー！！」

「すみません。私の周りには、どうも……健治さんほど素直な方は珍しくて、つい」

類は友を呼ぶというのか、叶湖の周りには捻くれた人間が多い。ゆとりも、篤もいい例である。それを考えれば、その時々で態度も言葉も表情も、心の内がコロコロかわる健治は見ていて清々しかった。

これで本当に本能のままに生きている、純粹な人間だからこそ、叶湖も好感を持っていられるのだろう。もしも、変にひねくれていたりしたら、一気に関わり合いになりたくない人種になるのは請け合いだ。

「健治さん、何抜け駆けしてるんすか……」

「ああ！？ 抜け駆けってなんだよ、こら。叶湖はお前の女じゃねーだろ！」

「いや、そーですけど……」

言い合いを始めた篤と健治に、叶湖は苦笑して身を翻した。

「すみません、タバコの煙で喉を痛めたようなので、少し外の空気を吸ってきます」

2人に告げると、店の出口へと歩みを進める。

と、叶湖がドアノブに手をかけた瞬間、ドアが外側から叶湖の方へと開かれ、叶湖はその場でたたらを踏んだ。  
「っ？！」

外の光が一気に入りこみ、叶湖は一瞬、眩しさに視界を奪われる。後から思えば、その一瞬が命取りであった。

「きゃっ!」

「叶湖!?!?」

叶湖はたった今、入って来た男に腕を掴まれ、一気に引き寄せられると、次の瞬間には、首筋に冷たさを感じていた。

「てめえっ!?!?!」

叶湖は特に身体の痛みを感じているわけではなかったのに、冷静に状況を分析している。

今、叶湖を拘束し、その首筋に包丁を当てているのは、彼女のターゲットである、由ノ宮学園の数学教師であった。

「あー、なるほど。そういうえば、裏生徒会の存在は教師陣の間では有名でしたっけ」

叶湖が1人冷静に呟くのを聞きとって、篤が唸る。

「それで、俺らにアタリをつけて、襲いに来やがったってか。……よくここが分かったもんだ」

「おい、宮木。こいつを殺されたくなければ、学園にいうんだ。依頼は失敗した、とな」

「俺たちが失敗したからって、お前がこのまま学園に残れるとでも?」

篤が鋭い視線を教師へと向ける。

「残れるさ。生徒の問題をいくつももみ消して来たような学園だ。その学園にしちゃ、お前たち、裏生徒会が最後の頼みの綱のようなもので、お前たちが無理なら、学園は面倒をもみ消すしか方法が無くなる」

教師の言葉に、確かにその通りだろう、と叶湖も頷くのに、篤はため息をつきたくなるのを我慢して教師を睨みつける。

「おっと、動くなよ。動いたら、彩藤を殺すからな」

「んなことをして、どうするんだ。殺せば確実にお前は学園を追放されるぞ」

「このままなら、どうせ俺は首を吊ることになるさ。それなら、裏生徒会長さまのお気に入りの女を連れて行ってやるのも面白いだろう？」

叶湖は会話の流れに嘆息する。どうやら、自分を拘束している男は、プツンいつてしまっているらしい。まともな会話で、心理的に攻撃するのは無理そうだ。

「テメエ、俺の城で、好き勝手しようなんざ、いい度胸じゃねえか……」

健治も篤の隣で静かに怒りを増幅させているが、さすがに2人と

の間に距離があるし、いくら素早い右ストレートを持っていても、それが届くまでには、十分に叶湖を殺す時間があるだろう。

とはいえ、叶湖も、ちょうど手を封じられている所為で、袖口に隠した毒針が取り出せず、為す術なしという状況である。

「篤さん、ここは潔く相手の要求を呑んではいかがです？ アナタの追放が失敗した、と学園へ告げる。それで、ここは引いていただけるんですよ？」

叶湖がおっとりとした笑顔でしかし、振りかえることはできないので、声だけで教師に尋ねる。

「……なぜ余裕でいられる？ 冗談だとも思ってたやがるのか？」

今、俺が手に力を込めれば、お前は死ぬんだぞ！？」

「……私は死にませんよ。それよりも、今いったことで、アナタは引くんですよ？ と、確認したのですけれど、お答えは？」

「っ！！ 死なないだと、俺をバカにしゃがって！！ そうだよな……お前らが、今ここで学園側に報告しようが、いくらでもそんなもの、後から撤回すればいい……俺はもう、だまされないぞ……」

男の言葉に叶湖は口の端だけで晒う。

「今まで散々だまされて置いて何を」

「てめえ!!!!」

「叶湖、挑発してんじゃねえ!!!!」

怒りをあらわにした教師に、健治が叶湖を止める。

「ハハツ！ いいだろう。どうせ、俺はもう終わりだ。お前たちの所為でな……。なら、お前らを道連れにしてやる。彩藤も、宮木も、道連れにしてやるよ!!!!」

「叶湖!!!!」

教師は声を張り上げたかと思うと、包丁を握る右手に力を込める。篤がすぐに反応し、駆け寄るが、あと数歩届かない。健治には、叶湖の首筋に赤い筋が入るのが、まるで現実のように想像できた。

中学生篇？ 闇？（後書き）

続く

中学生篇？ 闇？（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学2年（14歳）

桐原黒依：叶湖の幼馴染

宮木 篤：化学同好会会長

須賀健治：不良の王

数学教師：裏生徒会のターゲット

\*暴力的な表現が入ります。ご注意ください。



中学生篇？ 闇？

「彩藤も、宮木も、道連れにしてやるよ!!!」

教師は声を張り上げたかと思うと、包丁を握る右手に力を込める。篤がすぐに反応し駆け寄るが、あと数歩届かない。健治には、叶湖の首筋に赤い筋が入るのが、まるで現実のように想像できた。

「殺さないように……と、もう遅いですね」  
その、静かな声が響くまで。

ゴキリ、と頭に響くように、骨の折れる音がした。  
ずずつ、と自分が入って来たばかりの扉を背中で擦って、男の身体が崩れ落ちる。

人体の構造的に有り得ない方向へ捻じ曲げられたその首が、男が

絶命しているのを誰の目にもはつきりと表していた。

「桐原黒依……」

篤が呆然と、叶湖を腕に抱き、男の死体から数歩分離れたところに降り立った男を見つめる。

由ノ宮学園で不良をまとめる篤にも、その数倍、喧嘩慣れしている健治でも、黒依が叶湖を救いだした瞬間も、男を殺した瞬間も……により、いつ、店内に入ってきていたのかさえ、気付けなかったのだ。扉が開けば、一筋の明かりがさしこむハズであるのも関わらず、2人の目にそんなものは映った覚えがなかった。

225

「おろしなさい、黒依」

叶湖が助けられたことに対する礼も、労いもなく、静かに命じる。

「叶湖さんっ……」

黒依が呆然と叶湖の名を呼び、僅かに腕に力を込める。……が。

パンッ

黒依の頬を打つ乾いた音が響き渡る。叶湖は完全に、黒依を拒絶

していた。

「こちらも助けられた分があるので、許可なく触れたことについては忘れます。が、さっさと私から手を離しなさい、黒依」

「っ……」

冷めきつた声色と視線に、黒依が瞳に深い闇を過らせて、しかし、静かに叶湖のいう通りにする。

叶湖は不快感を隠しもせず、珍しく不機嫌そのままの表情で、男の死体にちかより、念のために息を確認する。

「面倒くさいことをしでかしましたね。この男もですが……アナタも。人間1人分の情報くらいは軽く隠せますけれど、死体を隠すのは面倒くさいというのに……」

以前、前世で猟奇殺人を行っていたときは、隠さずにおいた分もあれば、隠した死体もあった。しかし、叶湖が隠したのは情報だけで、実際に死体を処理したのは、叶湖の知り合いであり、客でもあった、異常性愛者の死体収集家である。叶湖ですら、知りたくないと思うよな……とはいえ、確実な方法で、死体の行方は闇へ消えていたのだが。

しかし、しばらく人を殺すつもりもなかった叶湖が、現世でそんなアテなど作っているハズもない。

「叶湖さん……こんな危険なことを、これからも続ける気なんですか……？」

黒依が、叶湖の背中へ問いかける。

「いつ、発言を許しました？ 黒依。第一、アナタには他人以上の接触を禁じているはずですが……。随分親しげに名を呼んでくれますね、桐原くん？」

叶湖に、何の興味関心のない瞳で見つめられ、黒依の顔が泣きそうに歪む。

「すみません……」

「後のことはこちらで処理をしますから、アナタはさっさと私の視界から消えてください。そうすれば、常日頃、私をストーキングしていたことは、今は忘れておきます」

「……叶湖さん、僕は……っ！」

黒依が尚も食い下がろうとするのを、叶湖は視線だけで止めた。僅かに顔を歪めて、首筋へと手を添える。

「結局、アナタの力は私の役には立つには中途半端……なんですよねえ」

首筋で皮一枚、包丁の犠牲になった傷から、僅かに流血していた。「聞こえませんか、黒依？ 知らない、と言っただけです。理解できたらなら、さっさと消えなさい」

叶湖はそれだけ言うと、黒依から視線をそらし、手元でケータイを操る。

黒依はそんな叶湖の背中を呆然と見つめると、さ、と姿を消した。

そんな様子を背後で悟り、叶湖が荒々しく髪の毛を掻きあげる。

「叶湖……？」

「すみません、今、私に近づかないでください」

黒依が消えたことで、マヒを解かれた形になった篤が、一步、叶湖に近づいたところで、叶湖はさ、と顔を片手で覆って篤からそらす。

「なんで……？」

「表情を……見せたくないんです」

笑顔は、叶湖の生身の叶湖の鎧であった。現実世界で、情報と言っただけを無しに向かい合う、篤や健治には、心のままの表情は見せた

くない。のに、笑顔が作れないほどの苛立ちに、さらに苛立ちが重なる。

「叶湖」

「近づかないでっつ……っ!？」

しかし、篤は叶湖が止めるのも聞かずに叶湖に歩みよると、強引にそろ身体を抱き寄せた。

「悪い……俺、何もできなくて……」

「何を……」

叶湖は抱き寄せられたまま、その体勢であれば表情が見えないのをいいことに、言葉を返す。

「叶湖が殺されそうになってんのに、俺は何もできなかった。ただ、見るだけしかできなくて……俺が、俺が守らなきゃいけないのに」

「何故？ あの男の接近の情報を掴めていなかったのは私の落ち度です。それから、あの距離。私が包丁を突き付けられた段階で、あの距離を詰めるのは無理ですよ」

叶湖の言葉に、篤の腕に籠もる力が強くなる。

「っ、痛いっ……」

「悪い。……でも、俺が何もできないのに、桐原は……」

「アレは少々身体の作りが特別なので。あれと、多少喧嘩慣れして

いるだけの一般人を比べる気なんてありませんから、安心を」

叶湖の言葉に、篤がきゅ、と顔をゆがめる。

「そうじゃねえ！ 叶湖は、包丁が突きつけられてんにも関わらず、ずっと余裕だった。それから、あの桐原への言葉。……お前は、桐原が居るのを知っていて、いざとなれば、アイツがお前を助けることも分かった。……だから、ずっと余裕でいられたんだろ？ だとしたら……俺は悔しい。俺じゃなくて、お前が、桐原に……前の男に助けを求めなきゃいけないくらい、力のない自分が不甲斐ないんだ……」

篤の言葉に叶湖ははっ、と息をつめた。

叶湖が黒依が自分を助けるだろうと予想をしていたのは、その通りであった。裏生徒会に所属してしばらく、以前より黒依の視線を感じていたが、彼がまさに、ストーキングと称して間違いないような尾行を始めたのはその辺りだった。とはいえ、黒依はもはや本気で、監視カメラを避けて歩く癖が備わっているし、なにより本気の黒依の所在など、いくら叶湖でも掴めないほどに、上手く身を隠すので、そう思うに至った理由は、もはや勘でしかなかったのだが。

それでも、叶湖は黒依に必要なと言いながら、その助けを期待している自分に、初めて気がついたのだ。そして、自分の行動が無意識だったことにも気がついた。

「お前は、全然桐原のことを昔の話だなんて思ってねえ。しかも、桐原だって、お前のことを昔の話にしようとしてねえことくらい、見てれば分かる。……お前は、なんなんだよ。お前が桐原を見ないようにしてえのに。……俺はどうすればいいんだよ……」

篤の言葉に叶湖はため息をつく。

「離してください、篤さん」

「叶湖!」

篤に一層、力強く抱きしめられ、叶湖は苦笑を洩らす。

「アナタの気持ちは有難く受け取っておきます、篤さん。でも、ごめんなさい。今はとりあえず、さっさと面倒を済ませて1人になりたい……。さつきから、イライラして……。自分が自分じゃなくなっ  
てしまいそうなんです」

嘘をつくのは嫌いだ。叶湖は自分に正直に生きて来た……。生きて  
いる、はずであったのに。

黒依が叶湖に捨てられてからも、1人で身体を鍛えていたのは知  
っていた。



しかしまさか、14才という自分と同じ年齢で、あそこまで動けるようになっていなんて、叶湖でも予想の範疇を越えていた。黒依が前世で妹を人質にとられ、血反吐を吐きながら身につけた強さを、しかし、妹を救えず、命すら賭けて手放すことを望んだその力を。たった1人、叶湖のためだけに再び選び、その手にとったのかと思えば、……今すぐに、彼を呼び戻し、自分しかうつそうとしないうその瞳に、もう1度映り込みたいと。不器用な彼の優しさを感じていたいと。……そんな淡い望みを自分が抱けたことすら驚くほど、素直にそう願ってしまった。

背中へと回される腕に応えられたら、どれほど良いだろうか、そう、思ってしまった。意地を張って、その手を払い、頬を張ってしまったけれど、そうしたことに対して、思い通りにいかない、できないことに対して。とても、苛立ってしまった。

今すぐに、何かを壊したいと、そう……1人になって、誰も見ていないところで、今は押し隠しているその感情を、何かにぶつけたいと。そう、願っていた。それほどまでに、叶湖は混乱していたのだ。

いつもの落ち着きをまるで感じさせないで、まるで小動物のように、必死で威嚇して、自分を寄せつけようとしないう湖に、篤は眉を寄せ、叶湖の拒絶を拒絶する。

「嫌だ。お前を1人にしない。お前が男を要らないってんなら、男としてじゃなくいいから。俺が、お前に近づくことを許してくれよ……。頼むよ、叶湖……。」

篤に懇願され、叶湖は軽く息を吐く。正直、もう人間を抱え込む

のなんて面倒だ、と思っていたのだけれど……。その時の本音を言えば、もう面倒くさいことを考えたくなかったのだ。

「……。恋人は要りませんからね。……。それでいいなら、私の物でも、犬でも、部下でも、舎弟でも、下僕にでも、好きにすればいい」「ありがとう……。叶湖！」

お礼を言われるべきことなのか、否か。叶湖は軽く、内心で首をかしげるが、そんなことは後回しにして、未だ叶湖を抱きしめたままの篤の身体を叩く。篤の強引さに流される内に、ほんのわずかではあるが、心は余裕を取り戻していた。

「……とりあえず、離しなさい、篤。私はさつさと例の死体を処理する必要があるんです。アナタは学園に連絡を。ターゲットは借金に追われ、失踪。行方はつかめない、と」「了解！」

呼び捨てされたことに、僅かに顔を染めながら、篤は元氣よく返事をする、電話をかけるため、店の外へと足早に出ていく。

「あれが、お前の昔の男……か？」

「昔飼ってた犬のようなものですよ」

今まで、静かに何かを考えていた様子だった健治が口を開き、叶湖はわずかに忘れかけていたその存在を思い出す。よくもまあ、篤のむちゃくちゃに口を挟まなかったなあ、と思ったが、数瞬後、未だ難しい顔のままの健治に首をかしげる。

「……アイツは、なんだ……？ 俺が、一瞬も目で追えなかった。篤はお前のことで頭がいっぱいだったんだろうが……あれは、どう考えてもおかしいだろう。……しかも、人が1人死んで、俺や篤はともかく、お前やあの男は当然のような顔で……。しかも、あの桐原とかいう男の目は、ヒトゴロシの目だった……」

健治の言葉に、叶湖はわずかに苦笑する。

「彼はね……暗殺者なんです。生まれつき、の。……生まれつきなんて、可笑しいですけどね。……でも、彼はね、産まれた時には一般人の両親がいて、産まれた後にも一般人の妹が増えた」

叶湖の呟きに健治は目を見開く。

「……お前は、優しい人間だな」

厭味でしか言われたことの無いような言葉を告げられ、叶湖はわずかに唇を歪めて嗤う。

「私が優しい……？」

「だから、一般人になる気など全くないお前は、桐原を……」

「健治さん」

まさか、黒依ですら未だ、たどり着けていない真実にたどり着いてしまった健治に、叶湖は静かにその視線を向ける。これだから、本能で生きる人間は怖いのだ、と思った。本能で生きる人間は、鼻がきく。

「篤には、秘密にしておいてくださいね」

「お前が、アイツじゃなく、俺の女になるのを考えるなら、な」

健治の言葉に叶湖はクスリ、と笑いを漏らして応える。

「ええ、考えるだけでよければ」

いつも通りの遠回りの、しかし完全な拒絶に、健治は苦笑したように笑っただけだった。

結局、すでに離婚が成立し、しかもそもそも借金まみれであった男の居場所などを、彼の関係者がわざわざ知りたいとは思わず、消えた人間を探す者など現れなかった。

そうして、黒依が生まれ変わって初めて犯した殺人は、当事者4

人を除けば、世の中に万と溢れる闇の1つとなって消えた。

それから間もなく、化学同好会は通常の活動である、学術的な研究の成果を認められた、という表向きで理由で部へと昇格した。

その際、部長の名前が、宮木篤から彩藤叶湖に変わったのは、篤の卒業が迫ったある日のことだった。

中学生篇？ 闇？（後書き）

読了ありがとうございます。

遅くなりました。

そして詰め込みすぎました……  
すみません。

できるだけ、だらだらしないようには気をつけたつもりなのですが、読みにくくないことを願っています。

詳しい解説は、活動報告ページに書きますが、とりあえず、中等部の一番のイベントを書き終え、ほっとしております。

次回は、久しぶりに、お兄さんの登場です。

テスト期間も無事終わり、今後はもう少し早めのペースで更新していければな、と思っております。

ご意見、ご感想は随時受付中です。よろしく願います。  
それでは。

中学生篇？ 風邪（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学3年（15歳）

桐原黒依：上に同じ

彩藤 直：叶湖の兄。外科医。

彩藤和樹：叶湖の兄。大学4年

白居末明：生徒会副会長

宮木 篤：高等部化学部部长

## 中学生篇？ 風邪

叶湖が中学3年へ進級し、しばらくが経った。と、いうことは、宮木篤は中学を卒業した、ということでもある。が、習熟度によって分けられたクラスの人間はもちろん、叶湖の狭い交友関係で何が変わるわけでもない。

篤は同じ構内の高校に通っているわけであるし、クラス内には主に桐原黒依、次席に大里ゆとりが着くのも変わらない。

ああ……変わったと言えば、1つあったか。叶湖はクラスの最前列へ視線を向ける。由ノ宮学園は、クラスが習熟度別であるだけでなく、席順でも成績順であった。したがって、末席の叶湖は一番後ろの窓側……要するに、一番快適な席であるし、最前列には黒依とゆとりがいる。

「ねえ、黒依くん。そういえば、次の生徒集会で教育実習の先生を紹介することになっていたけれど、高等部にいらしている教育実習の先生はどうすればいいかしら？」

席に座った途端、取り巻きに囲まれていた黒依に堂々と話しかける人間。彼女が近づけば、人波が自然と割れ、彼女は黒依の元へ自然と近づけることになる。



彼女の名前は白居シライ末明ホノカ。2年でAクラスへ上がり、そこから順調に優等生の道を歩み、現在はAクラス3位の学力と、生徒会副会長の肩書を持っている女であった。

そして、王子様、桐原黒依の横に並ぶことを周りから許されている、らしい、お姫様であった。

どうやら、実家はそこそこ名のある名家だとか、祖父は政治家だとか、そういう噂ではあるが、叶湖は特に興味もないので調べることもしていない。

否、意地で調べていないのであった。黒依に近づく女について根こそぎ調べるなど、嫉妬のようで、自分の矜持が許さなくて。

叶湖はしばらく無意識に教室の前の方に視線をやっていたが、不意に、視線でも感じたのか、黒依の隣に座ったゆとりが振り返った。……もつとも、黒依は叶湖が視線をやった時点で気付いただろうが、振りむいたりはしない。

叶湖は意味ありげに微笑んだゆとりの表情を視界に入れると、ため息をつきたくなるのを堪えて立ち上がった。

「あ、おい、彩藤！ どこへ行くんだ？ ホームルーム始まるぞ！」  
教室を出たところで、担任に出会ってしまった。

「気分が悪いので保健室へ行きます」

叶湖はそれだけいうと担任の返事も待たずにさっさと廊下を歩いていく。

「叶湖？」

「……和樹さん」

今日は厄日かと、叶湖は内心でため息をついた。階段を降りきったところで出会ったのは、次男の和樹であった。元々、父親への反抗心から医者になる気など皆無であった和樹は、しかしその血筋の為せる業か、根っからの理系人間で。とはいえ、奔放な和樹のこと、研究職などは向いていないだろうので普通に就職でもするのかと思っ  
ていれば、大学に入る前には教師を志し、その言葉通り、近場の  
とはいえ名のある国立大学の教育学部へ進学した。

そうして今、何の因果か、叶湖の通う由ノ宮学園へ教育実習に来ていた。とはいえ、高校数学の担当である和樹と出会う確率は、中等部と高等部とで建物こそ同じでも、棟が分かれているので、そう高くはなかったのだが。

「お前、もう授業は始まっているはずだぜー？」

「気分が悪かったので保健室へ行こうと思ひまして」

「気分……？ 機嫌の間違いじゃね？」

担任と同じ返事を返す叶湖に、和樹は隠しもせずのため息を漏らし、ぼやく。

「気分も機嫌の内でしょう？」

叶湖は和樹の発言を認めるように、笑っただけだった。

「しかも、この先は化学部の部室だしな！。……ま、お前はやることはやる奴だから良いけどよ……。あんま、目をつけられんなよ？  
面倒だぜ？」

「気をつけておきます」

これで、相手が長男の直であれば、一喝されて教室へ戻らされるのだろうが、そこは次男の和樹である。和樹は奔放な性格の通り、見た目も軽く、行動もまたその通り。とはいえ、実際のところ、真面目な兄と、妹への責任感、あとは無責任な親を反面教師として育ったおかげで、ものごとの最低ライン……。やらなければならぬことは、しっかりこなす人間であった。その点は、真面目な直と同じ血が流れているだけあると思える。

和樹にひらひらと手を振られ、叶湖は苦笑しつつ化学部部室……  
真の名を、裏生徒会執務室へと向かった。

「……ここは、中等部裏生徒会の執務室ですけど？」

扉を開いて一言。叶湖はソファで寝そべる男の姿のため息をつく。

「よ、叶湖！」

中等部と高等部で同じく活動している部活は多い。文化系の部活であればほとんどがそうである。……のだが、真の姿で裏生徒会という役割を担う化学部だけは、中等部と高等部でほぼ、独立して活動を行い、また、部室もそれぞれの棟に1つずつ設置されていた。ので、中等部を卒業した篤がその場所にいるのはおかしいハズ、ではあるのだが、彼が卒業して、ほぼ毎日の光景に、叶湖はもはや諦めにた感情を覚えていた。

と、いうのも。中学2年も終わりの事件で、叶湖の下につくことを決めた篤は、自分だけ上にいることはできない……というか、ただの感情論で嫌だ、と、高等部へ進学し、義務教育が終わった瞬間、さっそく、叶湖と同学年になるために全授業をポイコットし始めてしまったのだ。

そろそろ、出席日数が足りず、晴れて留年が決定するだろうと思われる。

ちなみに、Aクラスに在籍する叶湖と並ぶために、授業には出ていないくせに、必死で勉強し、テストだけはAクラスへ入れるような結果を残そうとしているのだから、その努力は涙ぐましいものも

ある……はずであるのだが、どうにも多すぎる下心が見え隠れする。  
一応、先日行われた定期テストでは十分、Aクラス圏内の結果であった。授業に出ずともその結果を残せるなら、最初から勉強しろ、と何人の教師が涙ぐんだか知れない。

「お前もサボりか？ 中等部だからよっぽど無制限り大丈夫だろうが、留年すんなよ？」

お前がいうな、と思いつながら叶湖はおざなりに頷いて見せる。

「……寝不足か？」

いつもの軽口なしに、執務机の座り心地の良い椅子に身を任せている叶湖に、篤ががばりと起き上がり、その顔を覗き込む。

「……まあ」

「なーんか、最近、叶湖いらいらしてるしなー。……あんまり無理すんなよ？」

叶湖はバレていることに対して自分自身の中で機嫌を悪化させながら、片手をあげて応えると、そのまま机に突っ伏してしまう。

「おいおい、眠いなら、ソファ使えよ……。それか、保健室いくか？ その体勢で寝るのは辛いだろーが」

「深く眠りたくないので結構です」  
篤が叶湖に歩み寄りながら尋ねるが、叶湖は体勢をそのままに、それだけ言々と寝入る準備に入ってしまう。その様子に、篤は軽いため息をついて自分もソファへと戻った。

叶湖の様子が変わったのは、そろそろ昼休みになるというころだった。

いつもは2時間ほど休むと、面倒くさそうにしながらも授業に戻っていく叶湖が、未だ起きないので、それほど疲れているのなら、いつそ帰ってはどうかと、篤が勧めようと、立ち上がって叶湖の様子を見に近づく。

と。

「っ……っ、……」

叶湖がかすかに唸っているのが聞こえたのだ。

「叶湖？」

夢見でも悪いのかと、ゆり起こすために肩に手をかける。

「っ!?!? ……叶湖？」

その、体温の高さに驚いて、手を離してしまった。

「大丈夫か？」

「んーんーんー」

意識はあったのか、唸ったままで首を横にふる。

痛みが原因で泣きわめいているときはいつもの数十倍素直なことを知らない篤は、それでも、素直な叶湖にそれだけ一大事なのは分かったようで、とりあえず、抱き上げてソファへと運ぶ。

「叶湖……お前……っ」

と、抱き上げた拍子に、ぼろぼろと叶湖の瞳から流れ落ちた滴を見て、篤の中で危機感が一気に押し寄せた。

普段、強かで涙などとは縁遠い、しかし想いを寄せた女が泣いている場面を見れば、篤でなくとも焦るといふもの。

「ちょっと待ってる、今、保健医……は信用できねえ、えっと、そうだ、実習生に兄貴がいたよな!? 呼んでくる!」  
篤はそれだけ告げると、ぐったりソファで横になったまま、ポロポロと泣いたままの叶湖を置いて、部屋を飛び出した。

「彩藤!」

奇しくも和樹が今まで授業を行っていたのは、篤のクラスであった。

「宮木、お前、終わった頃に来るとはいいい度胸だな……」  
和樹について教室にいた数学教師に睨まれるが、篤はそれに応えず、和樹に詰め寄る。

「彩藤、ちょっと来てくれ!」  
「あ? えーっと、宮木だったか? なんだ?」  
「お前、叶湖の兄貴だよな!? 叶湖がすっげー体調悪そう……」  
まさか叶湖に交友関係を聞いているわけのない和樹が、なぜ、自分が名指しで呼ばれているのか理解できずに首をかしげるが、まもなく、篤の言葉に顔色を変えた。



「分かった。……先生、悪いけど、午後の授業任せます！」  
「は?! おい、ちよ、彩藤先生!?!」  
和樹はそれだけ教師に告げ、自分は篤を促し、廊下を走り去る。  
教師の返事など、待つ気もなかった。

「叶湖!」

裏生徒会執務室で、熱に火照った顔で、涙を流している叶湖を見て、和樹は慌てて駆け寄る。

「熱……風邪、か? 叶湖、痛むのは喉か?」

「……うう」

痛みを感じると、言葉通り、恥も外聞もなく泣きわめくことになる叶湖の『病気』を知っている和樹にすれば、声を出さずに涙だけ流している叶湖の様子を一見するだけで、どこが痛むのかは分かる。

和樹の言葉に、叶湖は軽く首肯するが、その瞬間、顔を歪めて頭を押さえた。

「彩藤! 叶湖は!?!」

「ああ……多分、ただの風邪のハズだ」  
和樹はいいながら、携帯電話を操って、兄である直に連絡を取る。

「あ、兄貴？ 叶湖が風邪で倒れた。……ああ、よく確認できてないが、喉と頭が痛いらしい。とりあえず、早急に鎮痛剤を入れる必要があるそうだ。今から連れていく……分かってるよ……うん。じゃあ」

パタン、とケータイを折り曲げながら、和樹は篤を振り返る。

「今から職員室戻って、かばんとキー持ってくるわ。お前……宮木だっけ。こいつ抱き上げられるなら、校舎の入り口まで連れて行ってくれ。車を回す。……ああ、頭が痛いらしいから、あんま揺すらないようにな」

「わ、分かった」

和樹に言われたことに素直に頷いた篤を見て、和樹は部屋を飛び出す。が、そのまま職員室へは向かわず、階段を上った。

向かう場所は、中等部3年Aクラス。

「おい、黒依！」

教室のドアを開け放ち、開口1番自分を呼ぶ、しばらく聞いていなかった人物の声に、黒依はわずかに目を見開いて顔をあげた。

和樹はポケットから出したキーチェーンから、ガチャガチャと2本の鍵を取り外しながら、最後列、窓際の席へ向かい、かばんを手にとる。

「！ 叶湖さんが、何か……？」

その行動に、黒依が和樹に詰め寄った。

「風邪でぶっ倒れた。……今から病院送ってくるわ。ただの風邪だが、痛みがあるらしい。痛みどめを入れながら、治るまで様子見になる。……しばらくは入院だな、ありや……」

「叶湖さんが……風邪」

黒依が呆然と呟く。叶湖が自分の体調に人の数十倍、気を張っているのは知っていた。なにしろ、叶湖の身体では、予防接種すら相当の痛みをうったえるのだ。

黒依が知っている中で、前世を合わせても、今まで叶湖が体調を崩したことは皆無であった。それなのに。

叶湖が最近、精神的に追い詰められていることはしっていた。し

かし、まさか黒依は、最小限まで関わりを断っている自分が、その原因の一端であることなど知るよしもないし、何もできないと、不甲斐ない自分に勝手に憤っていたのであるが。

まさか、精神の不安定が叶湖の身体に病を呼び入れたのだろうか。だとしたら、なぜ、自分はこれほどまでに何の役にも立てないのかと、黒依は手を握りしめる。

「ああ、んな反省は後でやってくれるか」

と、黒依の心を見透かしたかのように和樹が告げた。ため息をつきながら、2本の鍵を黒依に差し出す。

「と、いうわけで、叶湖は入院だ。兄貴は自分の仕事があるし、自然、俺が付き添う形になる。俺もしばらく家に帰れない。……というわけで、お前、叶湖の着替えと生活用品、病院に届ける」

「な!？」

和樹の言葉に驚いたのは黒依だった。

「そんな、何で僕が……?」

「今言っただろうが、聞いてなかったのか」

「いえ、でも、僕は……きっと、僕が届けたのでは、叶湖さんが怒ってしまっ」

黒依の言葉に和樹が顔をゆがめる。

「消去法だ。仕方がねえだろーが。俺は今から病院だつてんだよ！早く受け取れ！」

和樹に怒鳴られ、無理矢理鍵を押し付けられて、黒依は咄嗟にそれを受け取ってしまう。

「いいか、お前が来るんだぞ。香里さんの手を煩わせんなよ」

黒依はその言葉に、僅かにため息をついて、2本の鍵をポケットへとしまい込む。

「すみません、白居さん、放課後の役員会、欠席します」

黒依はそれだけいうと、自分のカバンを手にとり、さっさと出て行った和樹の後を追って自分も教室を出る。

教室中の注目的であった2人の出て行った後の教室では、今の今まで、目立った会話すらしたことのなかった、クラス主席とクラス末席の関係性に、蜂の巣をつついたような喧騒が広がっていた。

「末明？ ……末明、どうしたの？」

「え？ あ、ううん。なんでもないの」

たった1人、黒依の消えた後を視線で追い、手をきつく握りしめていた生徒を除いて……。

「おお、黒依……ご苦労さん」

黒依が病院についたとき、和樹と直はナースステーション付近のラウンジで立ち話をしていた。

「これで、いいですか？」

黒依は言いつつ、抱えていた荷物を示す。叶湖の私室は、黒依が出入りしなくなった頃と、なんら遜色ないままであった。クローゼットの中の服のサイズが変わっていた以外は、本当にあの頃のままではないだろうか。

元々、インテリアには凝ってあったし、子供だからと、ぬいぐるみが飾られていたわけでもないし。小学校低学年の部屋とは思えないほど、あっさりと纏まっていた部屋であったと思う。

「ああ、今なら叶湖寝てるからよ、部屋に置いといてやってくれ」  
「……分かりました」

「和樹が無茶を言って悪かったな、黒依……。学校、早退したんだろ？ すまん」

和樹の言葉に、嘆息交じりに頷いて身を翻そうとした黒依に、直から声がかかる。

「ああ……いえ。大丈夫ですよ」

確かに、実習中とはいえ教師のすることではなかったが、叶湖の身支度の準備など、例え兄であっても他の男に任せたくはないと思うし……。なにより、叶湖の部屋には知らずに触ると危ないものもいくつかある。……とはいえ、隠れ家よりはマシであるが。

実際、黒依はその隠れ家からも、いくつか叶湖の私物を持ってきているので、やはり、黒依が一番の適役であったことに変わりはないのだろう。

叶湖の隠れ家の存在を知っているのはこの世で黒依1人であるし、だいたい、叶湖は嚴重なロック……とはいえ、彼女は自らの職業上、電子ロックにそれほど信頼を置いていないので、普通のキーロックではあるが、それを幾重にもして部屋を守っている。

そしてその鍵は叶湖以外持たないのだから、その時点で、叶湖の隠れ家に侵入できる人間など、黒依1人の可能性しか残らないだろう。

和樹は部屋番号などを教えていなかったが、この病院でとりあえず1番いい部屋だろうことは分かっていたので、黒依の足は迷いなく進む。

あらかじめ寝ている、と聞いていたのもあるし、部屋の外から感じられた気配が、寝ている時のソレであったので、黒依は特に何の遠慮も気負いもなく、部屋の扉を開けた。

「叶湖さん……」

果たして、和樹の言葉通り、叶湖は眠っていた。

倒れた、と聞いていたので心配していたが、眠っている叶湖にそれほどやつれた様子がないのを見てとって、少しばかり安心する。

が、まだ若干、痛みが残るのか、少し苦しそうに眠っている叶湖に、黒依は胸が締め付けられるようだった。

あまり日に当たらない所為で、白いままの腕には点滴が繋がっている。さ、と視線で確認すれば、痛みどめの名前が書いてあった。

とはいえ、たかが風邪にそこまで強い痛みどめは入れられなかったのか、その効果は弱いもので。

黒依は叶湖の額に浮かんだ汗の粒を、指の腹でぬぐった。

「ん……くる……え」

瞬間、黒依の身体は停止した。

黒依が叶湖の声を聞き間違えるはずはない。彼女が確かに、眠ったままで黒依の名前を呼んだのを聞いたのだ。



黒依の膝が崩れおちそうになる。

「叶湖さん……」

黒依の手が、叶湖の柔らかい髪を撫で、頬へ滑る。

叶湖が痛みを感じると泣き喚かずにはいられないことは、叶湖の病気を知るものであれば皆、知っていた。

黒依が前世で初めて叶湖と出会った時、黒依は警戒心から叶湖をきつく拘束し、泣かせてしまったのを思い出す。その頃はただ、泣き叫ぶだけであった叶湖の泣き方は、いつしか、黒依の名を呼んで泣くように変わっていった。

まだ、自分の名を呼んでくれるのだろうか、黒依はそんな期待を込めて叶湖を見つめる。

叶湖が黒依を名を呼んで泣く、その瞬間、黒依は彼女の一番弱い部分で自分が頼りにされていることの実感がわくのだ。彼女の側にいることを許されているような、そんな気持ちになるのである。

叶湖の本心は、あまりに覆い隠され過ぎていて、黒依にはもはや想像もつかない。

彼女は優しく、そして残酷であるが故に、自らに正直に生きてい

たはずであるのに、生まれ変わってからか、黒依は彼女の心が確実に、嘘に覆い隠されていくのが見えていた。

彼女が自分を要らないと言ったことが、嘘であるのだろうか。そうだとしたなら、どうして彼女はそんな嘘をついたのか……。

思考に沈みそうになって、黒依はゆるゆると首を振る。違う、そんなことはもう、どうでもいいのだ。

黒依の手がゆっくりと、叶湖の頬を撫でる。

理由なんてものは後回しでいい。今は……そう。痛みに浮かされた叶湖の一番弱い部分が未だ、黒依を呼ぶのであれば。黒依は、彼女の虚勢に騙されてはいけない。彼女から離れるわけにはいかない。

「……叶湖さん、……愛しています」  
黒依の告白は、誰も耳に入れることなく、広い部屋に浮かんで消える。

結局黒依は和樹が病室に戻ってくるまで、半ば呆然と、叶湖を見下ろしたままでいた。

中学生篇？ 風邪（後書き）

読了ありがとうございます！

ここから黒依が本格的に始動……するといいです、はい。  
と、いうわけで、中学生篇も残り1話。

早めに更新しちゃいますので、生温かく見守ってやってくださいませ。

それでは、ご意見ご感想は随時受付中です！

中学生篇？ 兄妹（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：中学3年（15歳）

彩藤直：叶湖の兄、脳外科医

彩藤和樹：叶湖の兄、数学教師

## 中学生篇？ 兄妹

「家を……出たい!？」

直が似合わず大声をあげた。その隣で、和樹が身を乗り出していい。

机を挟んで向かい側にすわる叶湖は、至極涼しい顔で頷くだけだった。

「ええ」

冬休みが終わり、そろそろ、叶湖の中学生生活も終わろうとした日。叶湖は珍しく直を捕まえ、そして切り出したのであった。

高校生から、1人暮らしをすること。

「お前はまだ高校生だぞ!？」

「そ、そうだ。まだ早いって!」

叶湖の目の前で兄2人がなんとか叶湖を思いとどませようとしている。そんな様子に、叶湖はクスツと微笑んで首をかしげた。

「そうかもしれません。が、私は直さんや和樹さんの許可を必要としているわけではありませんので。これは……ただの報告です。もう、住む部屋も借りましたし、引っ越しの準備も始めていますよ」

叶湖の告白に直は目を細める。

「……父さんを使ったのか……」

「ええ、先日。サインをもらって、契約も結びました」

「お前、何勝手なこと！」

「勝手……ですか？ 未成年である私の法定代理人は賢司さんでしょう？ むしろ、直さんや和樹さんの意見に左右される方がおかしいとは思いませんか？」

叶湖の言っていることは正論である。しかし、それは叶湖の親代わりを務めていた……努めている気であった兄2人、特に直には痛い言葉であろう。叶湖はそれを知っていて、しかし言葉を紡ぐ。

「それはっ！ でも、お前の面倒は……」

「待って、兄貴」

叶湖の言葉に言い募ろうとした直を和樹が止めた。和樹はふだん浮かべる軽薄そうな表情を消し、ただ真っすぐに叶湖を見つめる。

「別に俺たちはお前に感謝されたくて一緒に暮らしてるわけじゃない。俺たちがやりたくて、自己満足でお前と、こうしてきた。そのことを、お前に恩着せがましくするつもりはねえよ。俺らにとってお前は大事なたった1人の妹だ。……だけど、お前は？ 俺たちのことをどう思っている？」

和樹のまっすぐな問いに叶湖は内心で眉を寄せる。

面倒くさいことにはしたくないのに。

……元より、1人暮らしをすると決め、兄に内緒で父親と2人で話を進めてしまっているから、多少の面倒は覚悟していたが、なぜ

今ここで兄妹関係の話まで持ち出されているのか。

叶湖は内心で漏れそうになるため息を押し隠して、それでも微笑んでみせた。

「感謝はしていますよ。賢司さんと麻里亜さんのことですから、いかに私が要らず、また育てられないにしたりって、体裁を気にして施設にいれることはしなかったでしょうから、まず、ハウスキーパーの手で育てられることになったでしょうね。そちらの方が、身の自由がきいた可能性はありますけれど、直さんが私の養育を引き受けて下さったおかげで、精神的にはそれより遙かに自由だったでしょう」

「お手伝いに育てられるよりかはマシだったろうから、感謝はしている。……それだけか？俺たちは、お前を傷つけることしかしなかった、あのババアよりマシ……それだけなのか？」

さらに下手にでる和樹に叶湖は自らの髪に手を伸ばす。表情の笑顔は保ったままであるが、もう10年以上も付き合ってきた兄2人は確かに気がついた。叶湖が苛立ってきた、その事実には。

「私に良心を期待しないでくださいね。……私は麻里亜さんも、賢司さんも親であるとは認識していません。せいぜいが、二十歳にな



るまでの代理人。これは社会で決められていることですから、感情の問題ではありませんからね。でも、それは2人の育児放棄が原因ではありませんよ。私は彼ら2人の育児などそもそも望んではいなかった。育児など、私の生命が維持できる最小限があれば、後は自分でなんとかしました。彼らが私に対してした行動よりも、もつと別の段階で、彼らは私からして親ではなかった。ですから……同じ理由でアナタたち2人を兄や、家族としては認識してはいません。これは、血のつながりが半分であるか否かも、何ら関係はないです」

「ただの、赤の他人だっていうのか……?」

呆然と呟く直に、叶湖はゆるゆると首を横にふる。

「赤の他人だなどとは思っていませんよ。少なくとも、1人で買い物もできなかった頃については、本当に感謝しています。私1人ではどうしようもないことについて、たくさん助けられましたよ。アナタ方が妹として愛情を向けてくれているのも、ありがたいとは思っています。他人のように、居なくてもいいと思っただことは1度もない」

それでも、居ないよりはマシ、という認識から変わることはなかったのだが。

「だったら、どうして……? お前の考えていることは、俺たちには難しいよ。お前が2才のころから、もう俺たちはお前の考えてい

ることが分からなかった。俺も幼かったから、大きくなれば分かるのかと思つてたけれど、今だつて、俺にはお前の考へていることなんか、分からないままだ」

「……私が家族を必要としていないんです」

この世界では、直が泣きそうな顔で叶湖に問いかけるのを聞いて、しかし叶湖は正直に言つた。それで兄2人を傷つけることになつたとしても。

結局、叶湖は傷つかない。そのことに対して、叶湖は内心で自嘲する。

「私にとって、家族は分からない」

「分からない……？」

「なぜ、愛情を持てるのか、分からない。不思議な存在で、分からないから、欲しくない」

前世では、確かに家族がいた。

それでも、やはり無償の愛などと言うものはよく分からない存在であつたから、いつからか、家族は叶湖にとって重荷でしかなかった。

そして、叶湖の中で歪みが大きくなるにつれ、叶湖は自ら家族を離れた。

「俺たちはお前が元気である、それだけでうれしいんだ」

兄が紡ぐ真摯な言葉も、叶湖の胸に響くことはない。叶湖はわずかに首をかしげる。

「どうしてですか？ 私は、無償の愛が分からない。信頼できない。アナタたちが、私の成長を見ることで自己満足を得るために私を養育したいというなら、それでいいのに」

「違う、そんなんじゃない」

「なら、どうしてですか？ 妹だから無条件で私を慈しむなんて。」

それは、私が別の家に生まれていれば、アナタ達から愛される権利はなかったということ。それは要するに、アナタたちの愛は私個人には向けられていない。だから、私はアナタたちの妹を愛する気持ち分からないし、家族の必要性も分からない。分からないから信じられないし、信じられないなら重荷でしかない」

叶湖の言葉に直と和樹は揃って目を見開いていた。

そんな様子に、叶湖はらしくなく、小さくため息をつくとそのな兄2人を安心させるように笑顔を見せる。

「いい機会でしょう？ 和樹さんも社会人になるのですし、今より帰りが遅くなることが増えます。もちろん、直さんはお医者として忙しいでしょう？ 私もずっと目をかけられる必要もないでしょうけれど、どうせこの家に私以外の居ることが少なくなるというのな

ら、それは私が1人で暮らすのと変わりませんし。それなら、私はもう少し小さい家がいいと思っただけのこと」

「お前は……お前が、俺たちの負担になるんじゃないかと、そう思ったわけではないんだな。お前にとって、俺たちが負担なのか？」

叶湖が苛立ちを隠すようにかぶせた嘘を、直が引き剥がそうとする。どこまでも真つすぐな人だと感心する半面。やはり、面倒だとも思ってしまう。

「私は今まで、直さんにも和樹さんにも、悪い感情を持ったことはありませんよ」

決して好きであるとは言わず、叶湖はそれだけ言つと、さっさと席を立てて自室へ戻って行ってしまった。

悪い感情を持ったことがない、という点に関しては嘘がなかった。小さい体軀では、物理的にも、周りからの目、という点でも、不可能が多かった。その時に兄2人の存在は確かに有難かった。

しかし、叶湖がもう1度、一般人との関わりを断つて、日の当たらない世界で生きようとするのには、正しく、兄2人は重荷でしかなかったのである。

そうして、叶湖が中学を卒業する1月前には、叶湖の引っ越しは完了していた。

叶湖が一人暮らしをするにあたっての費用がすべて、叶湖の懐から出たものと知った兄2人は、彼女の新居に驚愕することになる。

叶湖の新居は1フロア2室の高級マンションの最上階。

向かいの部屋にはマンションのオーナーも住んでおるほどで、セキユリテイ面にも不安はない。

兄2人がいくら挨拶をしようと尋ねても、常に不在である向かいの部屋の所有者が、まさかその隣人と同一人物である、ということ、兄2人は結局知ることはいだらう。

知っているのは、マンションの前オーナーであり、現管理人である男と、あとは……そう、黒依のみ。

叶湖は自分だけの城でくすり、と笑みを漏らした。

中学生篇？ 兄妹（後書き）

読了ありがとうございます。

閑話のようなお話でしたが、これで中学生篇は終了です。  
次回から、高校生篇へ入っていきます。

もちろん舞台は高校。

黒依や他のキャラも出てきますので、生温かい目で見守っていただけたら幸いです。

それでは。

## 1年生篇？ 入学（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（15歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

宮木 篤：叶湖のクラスメイト。化学部副部长

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

## 1年生篇？ 入学

ガヤガヤとざわめきで溢れる教室には、見知った顔が半分と、知らない顔が半分あった。

今日は、由ノ宮学園高等部の入学式。

正直言つて、式典など堅苦しいものへの参加は拒否したい叶湖であったが、堅苦しい式典であるからこそ、形だけでもそれに混ざることのできないような生徒を、裏生徒会として後々のためにマークしておくのも立派な仕事。

中高一貫校でその連携が発揮される由ノ宮学園では、中等部からの内部生は部活や委員会をそのまま続けるものがほとんどである。中等部でその才能を発揮した生徒については高等部の1年で重要な役職につくことも少なくはない。

そして稀に、その組織をまとめる立場に1年が就くこともあった。生徒会長・桐原黒依も、化学部部长・彩藤叶湖も、その例といえるだろう。

そしてその立場を全うするため、黒依は先の入学式で総代兼生徒会長として、叶湖にすれば眠くなるような挨拶を朗々としていたし、叶湖も叶湖でサボることなく入学式に出席した。



もつとも裏生徒会の仕事の1つ、とはいえ今までの武闘派と違い、情報戦を得意とする頭脳派の叶湖である。わざわざ入学式に出向かずとも、新入生の素行調査などは合格者が判明した時点で確認済み。その点でも出席の必要性も意欲も感じなかったがしかし、悪目立ちするのも避けたかったので、嫌々参加した式も漸く終わり、割り当てられた教室で席に着こうとしていたのだが。

「黒依くん、さっきの挨拶、すつごくよかったね。私、聞いてて感動しちゃった」

「ありがとうございます、白居さん。僕はただ、先生方が一緒に考えてくださった挨拶を暗記したに過ぎないんですけどね……」

「でも、あれだけ堂々と大勢の前で発表できるのって、やっぱり凄いなと思うな。生徒会長が黒依くんで良かったって、私、黒依くんの方にしろって、そう思ったのよ？」

ふと、教室最前列の会話に気を取られ、足を止めてしまった。

由ノ宮学園は内部生と外部生でクラスがわかれることはない。

その原因としては、他大学への進学率でも有名ではあるが、基本は大学までのエスカレーター式であるため、後の受験勉強に備え、先行した授業が中等部では行われていないこと。

そもそもが優秀な生徒には他大学受験が可能なレベルまで学力を引き上げられるよう、習熟度別のクラス分けが取り入れられていること。

その中でも上位の成績を納め、且つ、理系の学部受験を希望する生徒については高等部入学の時点で、他のクラスに先行して授業を進める理系コースを選択できることの3つが主にあげられる。

叶湖はそもそも、自身には進学の意思すらなく、ただ親がうるさいので大学には行くかもしれない……程度の認識であるため、進学コースとなる理系のクラスへ入るわけがない。

そんな叶湖の心中などは裏から手を回さずとも読めるだろう黒依が理系コースを選ぶはずはないのだが、1人。

もともと、医学部受験を目指していた大里ゆとりだけは理系コースへ進み、叶湖とクラスを別にした。

その所為で。今まで学年3位であった白居末明が文系コースでは次席となり、現状、最前列で黒依と隣り合ったことをいいことに、叶湖からすれば至極くだらない会話を始終行っている、というわけであった。

相変わらず特対生としての授業料免除が懸っており、叶湖をストーキングするため高校をやめるわけにいかない黒依の、必死の勉強の成果を抜ける者が外部生にいないのはしょうがないとして……。

そもそも前世では10に満たない年齢で一般人として生きる道から脱落し、勉強などほぼしていないハズの黒依であるので、前世で一応は大学受験までを経験した叶湖と同じ理由で好成绩をキープしているわけではない。したがって、スタートラインを他の生徒とほぼ同じくしているにも関わらず、中等部での主席のキープには実際に、元よりの要領の良さの上に並々ならぬ努力もあるだろう、というのさすがに叶湖でなくとも、前世を知っていれば誰にでも予想のつくことである。

もともと、この世界で黒依が前世の記憶持ちであることを知っているのは叶湖1人ではあるのだが。

ともかく、黒依は天才ではなく、秀才であるのだが、テストなどの平均点は90点後半である。そもそものテスト問題が難しい由ノ宮では、平均80点ほどでAクラスに入れることになるので、黒依の成績は抜きんでていると言えるだろう。

とはいえ、白居末明の平均は90を超えたところ、という感じだ。正直、外部生にもう少し頑張っしてほしい……などというところまで考えて、首をふる。

会話に気をとられた一瞬に浮かんだ感情について、説明をつけたくなくて。そんなくだらしない意地を張っている自分にすら悪感情を持ってしまつて。叶湖は教室の一番隅の席であるのをいいことに、僅かに眉を寄せた。

と。

「叶湖　！」

後ろから掛かった呼び声に、反射的に振りかえる。

そして、振りかえったままの体勢で、すでに自分の真後ろにまで迫っていたその人物にぎゅ、と抱きしめられ、叶湖はわずかに目を見開いた。抱きつかれてはいるが、痛くはない。

「げふうっ」

まあ、痛くないとはいえ、そのままの状態に甘んじる叶湖ではないので、的確にみぞおちをついて抱きついてきた相手を沈める。

前かがみになって、お腹を押さえたままその場に座り込んでしまった彼に、ニツコリと微笑みかけた。

「おはようございます、篤。ところで、入学初日から、随分スキップ過多だとは思いませんか？」

呼びかけられた声で判断していたが、叶湖に抱きついてきたのは宮木篤。年齢的には1つ年上の、しかし、クラスメートである。自分は入学生ではないので、入学式には出ない！　といった宣言を前もってされていたため、ホームルームからの登校となる彼に、平然と少し遅めの朝の挨拶を投げかける。

「思いません！　おはよ、叶湖。だってよ、やっと1年待って、よ

うやく叶湖と同学年！ しかも見たかよ、クラス発表！ 同じクラス！ やったな、俺！」

大声でまくし立てる篤に叶湖は僅かに苦笑しつつ、しかし1年、彼が勉強を頑張っていたことを知っているのでその様子をバカにしたりはしない。

褒めて褒めて、とばかりに蹲ったまま叶湖を見上げる篤に、こちらにはまた違った意味で分かりやすい犬のようだと内心で苦笑して、先ほどまで心中でくすぶっていた黒いもやもやを打ち消すように、目の前の大型犬の頭をくしゃりと撫でてやる。

一瞬でその手は離れたものの、叶湖にしては天地がひっくり返るほどに珍しい御褒美であり、篤もそれを分かっているのか、一瞬目を丸くした後、とてもうれしそうに笑顔を零したその様子に、叶湖はまた、苦笑した。

叶湖が中学で初めて篤と出会った頃の、中等部1の荒くれ者で、裏生徒会長としての威圧感漂う、孤高の狼を気取っていた雰囲気、嘘のようだ。キラキラと純粋に瞳を輝かせ、彼にしては珍しい、満面の笑顔を浮かべる篤に、子供がえりしたようではないか、と思わないでもない。

とはいえ、彼の本質が荒くれ者でも純粋な子供でもなく、ずっと頭が切れ、敵に回すと厄介な策略家であるを知っている叶湖は、し

かし、彼女の下僕にでも舎弟にでもなると誓ってから、純粹に……か、どうかは下心の有無を疑わざるを得ないとはいえ、慕ってくる篤の姿もまた、彼の本質の1つだと思つうようになっていた。

それは、それだけの時間を篤と過ごしてきた、ということでもあるし、篤が叶湖には絶対その牙をむかないと、叶湖が理解しているからでもある。

理解とは信頼を越えた絶対の認識であり、叶湖がそれを間違えたことはない。

そうであるから、篤が立ちあがって一瞬、教室の最前列に向け、怒気とも冷気とも言えない、ともすれば殺気すらを含んだ鋭い視線を放ったことは見ないことにして、叶湖はようやく自分の席にいたのであった。

## 1年生篇？ 入学（後書き）

読了ありがとうございました。

高校生篇、始動します！

くわしくは活動報告でまた書きますが、こんかいは恋愛中心に、普通に学園物っぽく、進めていくつもりです。

……普通、になればいいんですけども。

そんなこんなで、今後とも、『わたせか』をよろしく願います！

感想、ご意見は随時受付中です！

次話は……今日中にあげる予定です。

1年生篇？ 衝突（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（15歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

宮木 篤：叶湖のクラスメイト。化学部副部长

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長



## 1年生篇？ 衝突

入学式の日の放課後。

ホームルームが終わり、叶湖と篤は一旦部室へ寄ったあと、廊下を生徒会室に向かって歩いていった。

やはり節目というものはどの組織も忙しいもので、特に学園自治組織の忙しさは計り知れない。もっとも、裏生徒会は特に問題がおこらない限りは、もしもの場合に備えた予防線を張る程度の作業なので、マシの部類かもしれないが。

とはいえ、ある程度の事務手続きは必要ではあるので、今回も数枚の書類を生徒会へ届けに行くわけではあるが、本来なら会長1人でいいはずであるのに、なぜ篤がついてくるのか。

叶湖は篤に聞こえるように、僅かにため息を漏らす。

「ん？ どうしたよ？」

「いいえ、別に」

「に、しても。噂の生徒会長様、今回は王子様を越えて神格化すらされそうな勢いだな」

篤が呆れたように呟く。

普段はそれが叶湖の逆鱗であると知っているため、彼女の前で彼の話は持ち出さない篤ではあるが、さすがに歩く廊下の端々で同じような会話が聞こえては、無視しきれなくなつたのかもしれない。「そのうち、生誕祭を盛大に祝われるようになるかもしれないね」「そのうち？」 去年もさながら生誕祭だったじゃねえかよ」「とはいえ、さすがの叶湖も無視するのに疲れた頃だったので、篤の会話に乗ることにする。

どうやら、様々な大会などに助っ人として出場していた黒依は他の中学の生徒からも随分その存在を知られていたようで、生徒会長として実際の彼を知る機会に恵まれていた内部生よりも、今まで噂だけを頼りに『桐原黒依』像を作り上げてきた外部性がその噂を盛大に行っているらしい。

「本人は王子様でありたいようですし、そもそも生徒会長なんですから、なにか問題が起こればあちらで処理できるでしょう。放っておきましょう」

本当は『王子様』ではなく、ただ『家族のためにあること』のみを目指した結果なのでなんとも言い難いが、叶湖がそれに関して同情などすることもない。

「お前との関係バラせば、アイツの株もおちるんじゃないの？」

「へえ、では、篤の株をこれ以上落とさないように、しばらく距離を置きましようか？」

「……悪かったって」

遠まわしに会話の終了を促したにも拘らず、彼女をからかう言葉に制裁を加え、叶湖は平謝りする篤に喉をならして笑った。

「ねえ、黒依くん……裏生徒会のことなんだけれど……」

黒依は末明の言葉にパソコンのディスプレイに向けていた視線を僅かにあげた。

「なにか？」

「裏生徒会は主に、問題を起こした生徒について対策を行うところでしょう？ だから今まで、下位クラスを知り、まとめられる人が会長をしてきた。……でも今期はその代表2人が問題を起こすことの少ないAクラスに固まってるわ。しかも会長は、Cクラス出身で下位クラスにカリスマ性を発揮する宮木先輩じゃなく、ずっとAクラスで、下位クラスの間人とはほとんど関わりのない彩藤さん。……これは、問題があると思うのだけれど」

黒依はディスプレイから顔をあげて、困ったような表情を浮かべる。

「き……現裏生徒会長は去年度からの続投ですから経験は宮木先輩に劣るとはいえ、ないわけではありませんし、経験とは単に年月の問題ではありませんしね。なにより、去年は特に大きな問題も起こっていませんし、起こった場合の措置も的確でした。……実際問題、トラブルが起こっていませんから、大丈夫ではないですか？」

叶湖を、しかし普段の呼び方以外で呼ぶことはしたくなくて。しかしそれでも、目の前の彼女に叶湖と仲のいいところを見せ付けるのはよくないと、人間の心の機微に敏感である黒依は分かっているし、なにより、扉の外に叶湖の気配を確かに感じ取っている黒依は、あえて名前を避けて叶湖を表現する。

実際、黒依は叶湖が裏生徒会に入ってからというものの、組織の指揮をほとんどとっていたことを知っているし、確かに下位クラスとの関わりは少ないが、ある種、学園内で問題を起こしそうな生徒を対象にした場合には、宮木篤とは比べものにならないレベルでカリスマ性を発揮する叶湖であるので、何の心配もない。

の、ではあるが、その事実を末明に伝えるわけにはいかない。それは叶湖の名前を彼女の前で呼ばない理由と同じでもあるし、なにより末明が裏生徒会について文句を言っているのは単純にその能力を心配しての、生徒会役員としての責任感からのものではないからでもある。

「でも……」

ほら、結局彼女は何を言っても満足などするはずがないのだ。黒依はわずかに気分を害して、しかしそのことを悟られないために、困った表情だけを浮かべる。

ガチャリ、

と、しかし黒依が自分で末明の言葉を止める前に、生徒会室のドアが開かれたことで、末明の言葉は止まった。

「失礼します。……一応、来訪の伺いはたてたのですけれど、返事がなかったのです」

ドアを開いた張本人が、生徒会室での話題の主だと知り、末明はわずかに気まずげに視線をそらした。

その焦りで見失ったのか、それともともと頭をよぎりもしなかったのか、叶湖は来訪の伺いをしたとはいえ、ノックなどをしたわけではない、その矛盾を気にもとめなかった。

黒依は内心で苦笑する。

来訪の伺いとは、要するに彼女が生徒会室に来たことを黒依が知ればいいのであり、そんなものは彼女の気配を無意識にでも辿ってしまう黒依にしてみれば当然に知っていたことである。要するに、ものは言いよう、か。

「すみません、話に夢中になってしまって」

「いいえ、別に。こちらも勝手に入ってしまいましたしね。これ、例の書類です。……ああ、そうそう……少し気になったのですけれど、白居さん」

「え、は……なに、かしら？」

叶湖はつかつかと黒依の座る席まで寄ると、数枚の紙を差し出し、そして思い出したように末明に声をかけた。急に声をかけられたことに驚いた末明も、しかし平静を装って叶湖に微笑みかける。

「裏生徒会の学園運営上の立場って、何でしたっけ？」

「え……？ 自治組織、ではないの？」

叶湖の質問に、何をいまさら、と怪訝そうに応えた末明に、叶湖はにっこりと、それはそれは綺麗な笑顔を浮かべる。

「ええ、そうでしたよね。ああ、安心しました。……私、今年度から裏生徒会は生徒会の下請け組織にでもなったのかと思って」

「……どうして……？」

叶湖の言葉の真意をとれない末明が不審気に僅かに首をかしげる。その質問をうけて、叶湖はさらに笑顔を深くした。その後ろで、叶湖の綺麗な笑顔の真意を知る黒依はわずかに困り果てたように米神を指で揉んでいるが、生徒会室の真ん中で向かいあう女生徒2人の内1人はその様子に気付かず、もう1人は気付いて無視をしていた。

「いえ、まさか生徒会からウチの人事について口出しされるとは思っていないんですけど、裏生徒会は生徒会の下位組織であったのか、と心配してしまっただけなんですけれど……。そうではなかったようですね、安心しました」

叶湖の遠まわしな言葉に溢れる皮肉を漸く読み取った末明が顔をさ、と青ざめさせた。

「そんなつもりは……」

「ああ、生徒会のみなさんは、生徒からの信任で役職を得てられるんですものね、組織の内輪で代表を選出する裏生徒会とは、役員個人の責任感が違うのかもしれない……。生徒会としての仕事の他に、本来ならば職務外であるウチの組織についても目をかけていただいているなんて。きつと一般の生徒もアナタを副会長に選んで

良かったと思うでしょうね」

叶湖の言葉に未明はさらに顔色を悪くして手で口を覆う。

要するに、叶湖は今、未明を脅迫したのである。

裏生徒会の人事は内輪で行うため、特に問題がなければ役の続投は容易である。特に、前裏生徒会長である宮木篤は、彼も高等部入学当初から会長を任せられている人間で、その高いカリスマ性については下位クラスから圧倒的な支持を得ていることから容易に想像できる。そしてその篤が叶湖に対し深い信頼を寄せていることから、叶湖が裏生徒会会長の立場を追われることは、裏生徒会が完全な自治組織である以上、ほぼ、有り得ない。

それに比べ、生徒会役員の選出方法は生徒の投票である。黒依のように圧倒的な信者がついている場合は別で、他の役員の場合はだいたい、他に候補者もなく、また不信任にする理由もないための当選であって、黒依とはわけが違う。

もっとも、黒依が生徒会長を務めるようになってから生徒会役員の競争率はわずかに上がったが、立候補者がほぼ上位クラスを占める生徒会役員は、そもそもが高い確率で黒依とクラスメートであり、学園の王子様に近づく目的で、面倒の多い生徒会に立候補する者はそう増えなかった。



もし、他に候補者がいた場合は主に、上位クラスでの信頼度が戦局を決する。下位クラスの間は生徒会にそれほど興味がないため、テキトーに投票するか、無投票であるからである。無投票を不信任に数えては全員が落選、ということになりかねない由ノ宮の投票事情であるため、生徒には無投票の権利も認められていた。

ここで問題なのは、基本的な生徒会役員の出過程で投票率が非常に悪く、またその生徒が下位クラスに集まっている点である。要するに、叶湖は自らの立場の安全性を伝えた後に、白居末明の生徒会副会長としての立場の危うさを指摘したのだ。

裏生徒会、という存在は本来、公にはなっておらず、学園の噂に出るような曖昧な組織である。が、しかし、宮木篤のカリスマ性と下位クラスからの人気は決して噂で終わらない、事実である。もっと言えば、白居末明は気付いていないようであるが、叶湖のカリスマ性もしっかりと発揮されている。

そんな状態で、白居末明が裏生徒会を敵に回せば、否、裏生徒会から敵と認識されれば。叶湖や篤、裏生徒会でも会長や副会長等、幹部に位置する立場の人間が少しでもその手の噂を流せば、話をすれば。直接指示をせずとも、下位クラスの大勢を動かし、白居末明

を落選へ追い込むのは容易であると、その点を叶湖は指摘した。  
そして付け加えたのだ。職務外のことには気をとられず、与えられた職務だけをこなすのが賢明であるのだと。

「それでは、お話し中に失礼しました」

叶湖は蒼白になった末明に僅かに視線を送ると、穏やかそうな微笑みを残して部屋を出た。

「黒依くん、私……。……あんなの、あんなのって無いわ……。……」

残された末明が僅かに震える指先をぎゅ、と握りしめ、続けるような視線を黒依へ送る。

「……」

しかし、黒依はそれに言葉さえ返さずに、僅かに困った表情だけを返し、自らも生徒会室を出た。

「叶湖さ……」

「おっと、何の用だ？ 生徒会長様よお」

果たして、叶湖は生徒会室を出てすぐの場所にいた。が、しかし、追いかけた黒依と叶湖の間に、今まで廊下で待ち呆けていた篤が割り込む。

「……いえ、白居さんがずいぶん言い方をしていましたから、申し訳ないと……」

「叶湖、行こうぜ」

黒依の言葉を遮るように、篤が叶湖の腕を掴んで促す。叶湖はそれに笑顔で応えようと、黒依のことなど居ないもののように、無視を通した。

「バカだバカだと思ってたけど、アイツって本物のバカなのな」

「……何を言っているんです？」

生徒会室から離れてしばらく、篤が立ち止まり、僅かに背後を振り返って唸る。

「副会長の不始末を謝罪するのは会長さまとしちゃ、大正解だろうよ。でも、お前を大事に扱いたい人間としては、不正解。……だろ？」

「さあ、どうでしょうね」

篤の言葉に叶湖は曖昧に答え、しかし内心でははっきりとため息をつく。

随分と、篤に自分の心中を読み取られるようになってしまったと、改めて感じる。

それはそれでしようがないことではあるが、叶湖の心中を気付くにつれ、篤の中で沸き起こっているらしい、黒依への反発心や敵愾心が、いかんせん、読み取り易いのもあって、篤がそんな態度を見せるたび、叶湖は自分自身で気づかないことにしようとしている不満に気付いてしまうのである。

アレの行動で不機嫌になるなんて、まっぴらごめんであるのに。自分の心は操れず、しかしその変調は、アレではなく、篤にしか読み取られることはない。否、アレも叶湖の不機嫌に気付いてはいるだろうが、その原因について気付いていないのだ。

「桐原はお前よりじゃねえといけねえのに、アレは白居側の人間としてお前に謝った。……叶湖、それが気にいらねえんだろ」

ああ、まさにその通りだとも！

もう黙ってくれ、自分自身で見ない振りをさせてくれと、叶湖は内心で、自分自身でもどうしようもない心中を持って余し、しかしそれを篤につげて、自らの本心と向き合っていない、今の叶湖の内心をこれ以上暴かれたくなくて。叶湖は一人、心の内のみで深いため

息をつくのであった。

1年生篇？ 衝突（後書き）

読了ありがとうございました。

……今回、すっごく楽しく書かせていただきました（特に舌戦部分）  
叶湖は白居副会長との衝突が、黒依は篤との衝突が、  
それぞれの間で起こっているようです。

この流れが変わるのは、何がきっかけとなるのか。  
次話から様々な変化が書ければ、と思います。

それでは、また次話でお会いしましょう！  
ご意見・ご感想は随時受付中です！

1年生篇？ 本音（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年生（16歳）

桐原黒依：叶湖の幼馴染。学園の王子様

宮木 篤：叶湖のクラスメイト。化学部副部長

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

彩藤和樹：叶湖の兄。数学教師

## 1年生篇？ 本音

キーンコーンカーンコーン、なんて王道一直線の予鈴のチャイムを聞きながら、叶湖は肩にかけていたカバンを机の上に置くと、静かに自分の席についた。

教室の大半が立ったままだから、顔を挙げれば不規則に並んだ頭と頭の間から教室の前方の席まで見渡せた。

ちらり、と視界の端にその姿が映って、叶湖は半ば意識的に視線をそらす。

こういうことには敏感な彼だから。叶湖が今日『も』その動作をしたことはバレてしまっているだろう。

「叶湖　　！！」

叶湖が内心でため息をついていると、大きな声で呼ばれると同時に、いきなり背後から抱きつかれた。

尤も、叶湖の裏拳が抱きついた男のみぞおちにキツチリ入っているハズで、男は顔を青く染めて、すぐに叶湖から離れることになるのだが。

荷物を乱暴に机の横に放って、篤は叶湖の隣の席に腰をかけた。未だ、額に冷や汗が浮き、瞳は恨めしそうに叶湖を見つめているが、



それを綺麗に無視する。

学園の裏ボス的な存在がこれでは、いつか反乱でも起きるんじゃないかと、有り得ない想像をして喉をならす。

「くす、おはようございます、篤。毎朝毎朝、飽きもせずにタックルしてきては、顔を青く染めることになるのは、アナタの頭に学習能力が備わってないから、とそろそろ判断しても構いませんよね？」

「はよ、叶湖。つても、毎朝毎朝、あの鋭いひと睨みに負けずに、お前への愛を表現してる、つてのに、叶湖こそそろそろ諦めて俺を受け入れて……」

「あら、愛されてたんですか、私？ 健治さんに教えて差し上げてくださいようか」

「それは勘弁」

篤が叶湖に抱きつく度、叶湖と篤以外の誰にも気取られず、しかし確実に射殺するような視線を送ってくる相手……黒依に関して叶湖はスルーを決め込む。

そんな叶湖の言葉に篤はさっさと白旗を振り、叶湖はその様子にクスクスと笑い声をあげた。

篤が叶湖の下についたあの日、健治も2人の側にいたのであるし、未だに街の不良の束ね役を担っている彼にしてみれば、叶湖が片腕としてある種、信頼を寄せるほどに2人の仲が親密だという事実もはや当然のこととして了解しているはずである。

しかし、相変わらず叶湖を自分の女に、との嘘か真かイマイチ判

別のできない主張をしている分、篤を諫めるための性質の悪い冗談としては、その言葉はまた有効であった。

「ねえ、黒依くん、今度の総会のことなんだけど……」

教室の前方の音が耳に入った。顔を見るまでもない。今、黒依に声をかけたのは白居末明であろう。

叶湖を相手にしているわけではないだろうが、見せつけるように、始終黒依へ話しかけている姿は入学から2カ月たった今でも健在である。

牽制しているのかもしれない相手方である、クラスの女子生徒たちは白居末明を押しつけてまで自らを主張する気はないようであるし、はつきり言って無駄な努力であると思えない。

万が一、牽制の対象が叶湖であるとしたら……それこそ笑えない冗談である。焼け石に水どころの無駄ではないとしか言いようがない。

最初の頃のようにイラつくこともなく、もはや呆れすら覚える感情で、とりとめのないことを考えながら、しかし叶湖は無意識に2人をしっかりと視界に納めてしまっていたらしい。

「……なあなあ、叶湖。今日サボらね？」

余計な気を回した篤が、叶湖の腕を掴んで促した。

「嫌ですよ。目立つの、嫌いなんです。目をつけられたらどうするんですか。ただでさえ、化学部部長の上、アナタが寄ってきている、というだけで悪目立ちしているのに」

縁と話しこむ黒依に一瞬、鋭い視線を向けた篤を見、しかし叶湖はその提案をすげなく却下する。

「えー、いーじゃん。な、1時間だけ」

篤の鋭い視線は一瞬。叶湖が見ていたことに気付いたのか、気付いてないのか。それきりナリをひそめたその鋭さを塗りつぶすように、瞳に無邪気な光が灯る。

まるで、子供が駄々をこねるように、叶湖の腕を掴んで揺らし始めた篤に、叶湖は小さく喉を鳴らして立ち上がった。

「……仕方ありませんね、1時間だけですよ？」

「よっしゃー！」

ずば、と両腕を天へつきあげてはしゃぐ篤の姿に、叶湖はわずかに笑みを深くした。機嫌が悪いときの笑顔ではなく、その逆の笑顔である。

本当に、自分を好いてくる人間は狂人ばかりだと、叶湖は満足気に笑ったのであった。

「あれ、叶湖？」

「和樹さん、おはようございます」

廊下を出たところで、隣の教室に入ろうとした若い教師に呼びとめられた。

大学を卒業し、今年から正式に由ノ宮学園の数学教師として採用された兄、和樹である。

隣、1年B組の担任は適度に気の抜けたベテラン教師で、要するに副担任の和樹が、決められた連絡事項を読むだけの、退屈な朝のHRをまかせつきりにされている、といったところだろう。

「宮木……と、いうことは2人でサボりか？ ほどほどにしとけよ、2人とも」

「さっすが、彩藤！ わかってるねー」

素行の悪さで有名な篤の姿を見て、早々にサボりだと分かったにも関わらず、見逃された事実<sup>1</sup>に篤が声をあげて茶化す。

叶湖自身は後から聞いた話であるが、去年、叶湖が風邪で倒れた際、和樹の兄バカが篤に知れてから、篤はなんだかんだ和樹に親近感を持ったようで、和樹も和樹で最低限に力を入れた後は、最大限に力を抜くという緩い性格もあって何かと気が合っらしい。

和樹は篤の様子に満足気に鼻をならし、ふと気付いたように叶湖を見た。

「そういえば、叶湖。今日は帰ってくるだろ？」

「……そう、なんですか？ いえ、別に帰らない理由もありませんけど」

いきなり話を振られ、叶湖はわずかに首をかしげる

「そうなんですか、ってな。お前、俺らが自立した妹の誕生日をいきなり祝わなくなるほど淡泊だと思ってるのかよ。……まあいい。

今日は兄貴もさっさと帰ってくるって言ってるんだから、主役も来いよ？」

和樹に若干鋭い視線で告げられ、叶湖は諦めたように苦笑した。

「では、そのように。……ウチの担任ももうすぐ来るでしょうから、今はこれで」

叶湖は小さく頷くと足早に廊下を歩きだす。それを急いで追いかける篤を見送って、和樹はわずかに息を吐き、しかし、数瞬後には晴れ晴れとした表情で自らの職務に戻っていった。

「まったく、叶湖も素直じゃないねー、あーんなに気にしあってんだから、普通に話せばいいのに」

「……和樹さんのこと？」

化学部部室と同様に、2人にとっては絶好のサボリスポットである、万年、監督不行届の保健室につき、案の定、無人であったそこで、1つのベッドを2人で占領する。

ベッドに深く腰かけ、まるで童女のように足を揺らしている叶湖を見やりながら、篤がふと呟いた。

「ソレはどこでも。ってか、叶湖、彩藤のことなんて気にしてないだろーが。……無関心。じゃなくて……桐原黒依のことだよ」

叶湖はわずかに眉をよせた。珍しい。篤は叶湖にとってその名前が逆鱗だということを知っているので、無闇矢鱈にその名を口にすることはしないのだ。

「気にし合ってる、とは？ ……ああ、いえ。止めましょう。ええ、確かに。アレが毎朝、アナタに殺気を向けていることは、私よりもアナタの方が詳しいでしょうし。……私も……ええ、黒依の事を気にしているんでしょうね。もはや、教室前方へ視線を向けるのは条件反射のようなものです。……そして白居末明は幾度となく私をイラつかせる。……満足ですか？」

一息で言い切ると、叶湖は篤を振り返った。篤はといえば、今まで頑なに沈黙を守っていた叶湖が心のうちを吐露したのに、呆気にとられている。

叶湖自身、なぜ自分が今になってそんな話をしているのか分からなかった。けれども、今日の朝、白居末明への苛立ちが納まりつつあるのを感じて、彼女の言動のすべてが無意味だと、そう漠然と理解してしまつて。

要するに、ふと、気付いてしまったのだ。黒依が白居末明に対してなら、揺れ動くことなどないだろうことを、理解しつくしてしまっている自分に。

だから、叶湖は苛立たなかった。白居末明を哀れだとも、見下した。

「……アレは私のだと、今でも思ってます。アレも、そう思っているでしょう。これほど猶予をやったのにも関わらず……ね。私が出た一言、アレに私の元へ戻ることを許せば、アレは尻尾を振つてこの手の中に戻ってくる。……そのことを、理解しています。絶対に、そうなるよ」

叶湖はこともなげに言い放つ。学園の、女ならば誰もがその隣を望む王子様を、自分のものだ。

「猶予……ってなんだよ。なら、どーしてそれをしねえわけ？ 放置プレイでジラしてんの？」

強固な2人の繋がりを見せつけられ、若干不機嫌になった篤の言葉に叶湖は苦笑した。

「まさか。ですが……ええ、こんなこと、私には似合わないし、そう思ってます。……私が自分の感情より、相手のことを考える、しかも、そちらを優先したただなんて」

くすり、と叶湖に似合わない自嘲の声を漏らしたのに、篤が怪訝そうな顔で叶湖を伺う。

「どーという意味さ？」

「アレにはね、守りたい家族があったんです。アレにとってはね、家族っていうものは庇護を与えられる存在ではなく、与えるべき存在で……。アレが家族といる、穏やかな時間を願っているのだとしたら、私は口を出してはいけないと、そう思ってしまったんです。……それが、すべてのきっかけ。……ねえ、オカシイでしょう？ この私が、ですよ」

「オカシイね」

自嘲と共に、初めて自分の心の外へ打ち明けた真相を、篤に一言で切り捨てられ、叶湖は苦笑する。

「そんでもって、むかつく」



一瞬。……景色が瞬く間に回転したかと思うと、とさりとて体がベッドへ沈んだ。俗に押し倒されていると表現するのだろう体勢で、叶湖は自分に馬乗りになる篤を見上げる。

「結局、叶湖は桐原のことしか見えてないんだ？ お前が迷ってるのはあの男をとるか、捨てるかであって、その先に別の男の選択肢はない。お前はそーやって自分の魅力振りまいて。俺や、健治さんみたいな奴らをどんどん虜にしていくくせに、そーいうお前の下僕たちに一切餌は与えてくれねえんな」

力的にも体勢的にも、絶対的不利の状況で。しかし叶湖は自分を見下ろす男を見つめ、余裕を漂わせたままでクスツと笑う。

「言ったでしょう？ ……恋人……男は要らないんです。アナタは元より、そういう考えからはハズれています。それが嫌だったり、定期的に餌を撒くご主人さまが良かったりするのなら、誰か別を探してはいかがです？ 私のモノになったのはアナタの勝手でしょう？ 私は頼んでなんていません。……私が自ら歩み寄ってもいいだなんて、そんな私らしくないことを考えるのは、後にも先にも黒依だけです」

叶湖にキツパリと拒絶され、篤は一瞬、傷ついた目をする。が、次の瞬間には、す、と細めた鋭い視線を叶湖へ落とした。

「そーいう……釣った獲物に餌は与えないところもスキだけだな。なんで叶湖はアイツがそんなにいいわけ？ 何が違うの、アレと、俺と」

「あえていうなら、私が出会った中で、一番狂っているところ、でしょうかね。篤はまだ知らないんですよ。あの……この学園で王子様扱いを受けているアレが。どれほど、一般の中ではとてもとても受け入れられない狂気を含んでいるか……」

その言葉に篤は無言のまま、しかし叶湖を拘束する腕に力がこもって、痛みにめっぼう弱い叶湖はわずかに顔をゆがめ、瞳を潤ませる。

「っ……そーやって、アンタは平気な顔で俺の前で俺よりアレがいっていうんだな」

篤の唇が、叶湖の目尻へ落ちて、そこに浮かぶ涙を浚う。

そうして一層悲壮感を漂わせたままで、篤は静かに懇願した。

「俺に、アンタをくれよ……叶湖」

「お断りします。……放してください、篤。……私の言うこと、聞けるでしょう？」

そんな篤に向けられるのは、彼を試すような挑戦的な瞳。潤んだままに見上げられる瞳に、しかし継りつくような色は全くなく、むしろ、まるで自分が見下ろされている体勢にあるのではないかと思

うほどに威圧的な強い、色。

篤は叶湖を解放した。その事実をすっかり理解してしまって、苦笑とも諦めともつかない笑いを漏らした。はは、と乾いた声が漏れる。

……結局自分は、彼女と対等になどなることの叶わない、叶湖の『モノ』でしかないのだ。

「仮眠をとります。昼になったら起きてください」

呆然とする篤を見上げて叶湖が柔らかく微笑む。その叶湖に似合わない暖かさが、自分を宥められているように感じて、篤は笑い声を洩らす。

改めて突き付けられた事実ではあるが、もとより分かり切っていた事実。それにいちいち傷ついてしまった自分を晒す。そして、傷つけた『ご主人さま』に宥められて、さっさと機嫌が回復する簡単な自分にも晒った。

「……あれ？ 1時間だけじゃねーの？」

「そんなこと、言いました？」

叶湖はごまかすように笑って、押し倒されて寝転がったままの姿勢で瞼を閉じる。篤は、完敗だと、敵わない気持ち、しかしやけに清々しい気分を受け入れ、自分もその横に寝転がる。そして、横で平気な顔をして寝入る体勢に入ってしまった叶湖に、僅かにため

息をついた。

実際のところ、黒依などより数倍、高嶺の花であろう彼女に、この距離まで許されるのはある種、特別なことなのだ。それも、分かってしまったから。

そうして結局、昼を大きく過ぎた時間まで寝入ってしまい、後で叶湖から清々しいほどの厭味を綺麗な笑顔で投げつけられるのは、もはやお約束であったのかもしれない。

「あー？ なんだ、桐原、1人か？」

「すみません、先生。2人とも、みつからなくて……。化学部部室も、屋上も、保健室も見て来たんですけれど……。」

学園1の優等生の言葉に、中年の教師はわずかにため息をついた。「まったく、俺の授業サボって、どこ行ったんだ？ 問題児2人は…」

⋮

1年生篇？ 本音（後書き）

読了ありがとうございました。

篤ファンの方、ごめんなさい

結局、こういう立ち位置にしかねないですね……

さて、今回はヤケに分かりやすい布石をうっておきました。  
仲直りももうすぐ……になるといいですね、はい。

次回はまた1週間以内の更新を目指します。

ご意見、ご感想は常に受付中です。お気軽にどうぞ。  
それでは。

1年生篇？ 真実（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高1（16歳）。化学部部长

桐原黒依：上に同じ。生徒会長

## 1年生篇？ 真実

「叶湖さん」

あまりに早く帰りすぎても、実家で何もすることがない叶湖は、裏生徒会の事務を片付け、頃合いを見計らって部屋を出た。人気のない特別教室の集まる廊下を歩いていたのだが、不意にかかった声にわずかに眉を寄せる。

廊下の先に黒依が1人佇んでいた。まっすぐに叶湖を見つめていて、喧嘩をしてからというもの、校内で私的に呼び止められたというようなことがなかったため、違和感を感じて立ち止まる。

「ちよっ！」

意識はまっすぐに黒依に向かっていたため、不意をつかれたわけではない。それでも、一瞬の後に、叶湖は黒依に拘束されていた。

両腕を掴まれ、まるで迫られているような体勢で壁に縫いつけられる。

何を突然……。結局、今日1日保健室で眠りこんでしまった叶湖は、黒依の変調のきっかけを掴めていなかった。



「放して下さい。誰がこんなことを許しました……？」  
黒依相手に勝てるわけのないことは承知の上であったが、それでも、場所を知っているとはいえ、袖口に仕込んだ毒針をこつも簡単に無力化されては、叶湖に為す術はない。それでも、意識的な上位は譲らずに、不機嫌を隠さない笑顔を黒依へ向ける。

「すみません、叶湖さん。でも……もう、限界です。僕はアナタに近づきたい……」

「知りませんよ。それはアナタの希望でしょう。私が叶える必要性が、どこに？」

叶湖は黒依の言葉に、これ見よがしにため息をつく。黒依の瞳の奥で闇が揺れていた。2人の関係が変わって5年になるだろうか。それでも、黒依の心は叶湖から離れることはなかった。

叶湖はそれを知っている。……とはいえ、彼女の方が黒依を前にして、彼が手の内へ戻ることを願うわけにはいかない。それは、叶湖の矜持であった。叶湖自身、頑なな自分に呆れすら抱くが、それでも変えられない。彼女が叶湖である限り。

叶湖の様子にわずかに、黒依の瞳に剣呑な光が過った。

「もう、僕のことはいりませんか？」

「……」  
危険な閃きを、しかし確かに見てとって。その様子に叶湖が黙す。その隙について黒依が畳みかけた。

「あの、宮木という男の方がいいんですか？ ……それとも、菅健

治という男の方ですか？　もしかして、大里ゆとり？」

2人の距離は口づけでも交わすのかというほどに近づいて、黒依が叶湖へささやきかける。ともすれば、食い干切られそうな勢いと、飲み込まれそうな威圧感に圧され、叶湖はわずかに視線をそらした。

「アナタは私のストーリーカーか何かですか」

まるで浮気を疑われているようだ。否、黒依にとっては事実その通りなのだろう。彼が叶湖のものであるうとしているのと同じように、叶湖に近づいていいのも、彼だけだと思っているのだから。結局、彼の中では仲違い以前から、全くと言っていいほど、2人の関係など変わってはいいいないのだ。それでも、叶湖と黒依に客観的な関係が何も無い以上、浮気ではないハズであるのに……叶湖は内心でため息をつく。

そもそも、浮気にあたるような事実を例の3人としたこともないのだが。

「ストーリーカー？　……構いませんよ。アナタが信実、僕を捨てると言うのなら、僕はどこまででもアナタを追いかけます。……言っ

るじゃないですか。叶湖さんが本当に僕をいらないと云つなら……  
お願いですから、僕を殺して下さい」

「黒依」

叶湖の腕を掴む手に力がこもる。泣いているようだ……否、心中  
ではすでに泣いているのだろう。涙線が決壊しないのは、せめても  
の意地か、ただ、学校内だという場所的なものか。

別に、黒依を要らないと思ったわけではない。真実はその逆である。

叶湖は前世で平穩を奪われた黒依に、当たり前の生活を返してや  
ろうとしただけであった。彼自身、現世の家族に対して、家族の1  
員であろうと接していたのだから、それがいいのだろうと、そう思  
ったのだ。

けれども、そう思ったこと、それ自体を叶湖は感情的に受け入れ  
ることはできなくて。また、自分は決して黒依を本気で手放したい  
と願ったわけでもなく。だからこそ、突き放すような言い方をした  
だけであるのに。

それが結局、黒依の心に深く爪を立て、彼に叶湖から離れること  
を許さなかったというのだろうか。だとしたら、自分たちの……自  
分の、何と滑稽なことだろう。

その、自分に対する不愉快な気分がつい、表に出たのだろう。そ  
して、それをどう受け取ったのか、黒依の表情がさらに悲壮に歪む。

「なにが……気に入らないんですか？ 僕の名を皆が呼ぶことですか？ どうでもいい人間が僕に寄ってくることですか？ 汚れきっているはずの僕が、おキレイに装っていること？ それとも、アナタだけのものだった僕に、家族ができたことですか？ ……アナタが望むなら、僕の名を軽々しく呼んで近づいてくる人間なんてすべて殺します。誰にでもいい顔をするのが気に入らないなら、アナタ以外との会話なんて要らない。僕の家族だって……アナタが気に入らないというのなら、僕にだって要りません。……すべて、殺しますよ。アナタがそうしろと言うのなら。それで、僕を受け入れてもらえるのなら……そして、アナタを僕に下さるなら。……僕と縁のある人間なんてすべて殺して……そして、もう1度。アナタだけの僕になります。だから……」

「知ってますよ」

そう。叶湖は知っている。叶湖が1言命じれば、今言ったことなど、何のためらいもなく黒依がしてしまうだろうことを。

確かに、以前は黒依は自分だけのもので、黒依という名を呼ぶのも自分だけだった。黒依に、叶湖との間にある以上の繋がりを求める人間もいなかった。

叶湖の周りには彼女の狂気を知っているものしかおらず、その狂気を一心に受け入れた黒依との仲を邪魔しようとするものなど現れ

る筈がなかった。

だからもちろん、黒依の名が大勢に呼ばれるのが気に障った。黒依の狂気も知らずに近づく人間に腹が立った。家族ができて、叶湖以外に一切の執着のないハズだった黒依が、家族のための行動をした……その苛立ちで気が狂いそうだった。

それでも、黒依の答えはハズレだった。

叶湖が拘束された腕を僅かに揺らす。その意味を正しく理解して、黒依は叶湖を解放した。

叶湖は一瞬、解放された両手で顔を覆って。数秒後、掌から現れた表情からは、笑顔が消えていた。

呆れとか、嘲りとか、憐れみだとか。そして……僅かに泣きそうな、そんな微妙な気持ちがまんべんなく混ざり合った、そんな表情。

僅かに彼女の弱さの混じるそれに、一瞬、黒依が困惑に顔を歪めた。

「……あなたは……彼岸の妹さんに会いたかったんでしょ？ ……今はいるんですよ？ ……あなたの妹が」

叶湖が躊躇いを込めつつ、ゆっくりと言葉を紡ぐ。それに、黒依は釈然としない気持を感じた。何を言われているのか、分からない。

そんな様子を見せる。

「ええ……。でも、茜も、杏里も、僕の妹ではありませんよ。アタタは彩藤叶湖ではない、嘘々叶湖ですし。僕も桐原黒依ではなく、無灯黒依です。結局、現世での偽物は偽物でしかない。……この世に本物なんて僕にとってにはアタタだけです」

叶湖は黒依の返答に僅かに息を吐いて、そして目を閉じた。

「……ええ、その通り。だから、アタタが私をとれば、アタタの今ある世界は崩壊する。いいんですか？ 普通の世界なんですよ？ アタタは人を殺す必要がない。温かい家庭に生まれ、その中で育ち、妹は誘拐されることなくアタタと暮らしています」

言ってしまった。目を瞑ったまま、表情が僅かに歪む。

黒依の瞳に映る、弱い自分から目をそらすように、目を閉じたままの叶湖には、黒依の顔が唾然とした瞬間は捉える事が出来なかった。

そして、次の瞬間。黒依に強く、しかし痛みを感じることがないよう、暖かく、柔らかく抱きしめられ、驚きに目を開く。当然のように、黒依の着ているシャツの白が飛び込んできただけであった。

「……アタタって人は、バカですね。そんな、……そんなことを、気にしていたんですか。僕の生活を壊すことを、恐れていた、なんて。まさか……アタタが」

叶湖の背中に回る腕が僅かに震えていた。黒依から伝わってくるのは混乱のみ。

他の感情はうまく受け取ることができなくて、叶湖はそのまま言葉が続ける。

「……私が狂っているのは今も昔も同じ。私は自分で望んで平凡を捨てた人間ですから。……でも、アナタは違うでしょう？　自分は望まずとも、平凡を奪われた人間です」

「どちらにしても、同じですよ。僕はもう平凡ではなく、一般でもない。そして、アナタに狂っている狂人で。なにより、僕を狂わせたアナタがここにいる。同じ、この世界に。……僕の中では、今も昔も、アナタ以外の存在に意味などないんです。アナタに出会ったその時から。……確かに桐原の家は温かいです。僕は初めて得たものだ。でも結局……偽物ですよ。僕にとっては。あそこには、僕の本物の母も、父も、妹もない。結局、偽物だけの世界で、僕にはアナタしか本物がいない。だから……僕をアナタのものにして。それから、アナタも僕に下さい。僕に、本当の世界をもう1度、与えてください、叶湖さん」

黒依が叶湖を抱く腕が緩んで、僅かに2人の間に空間ができる。

黒依は叶湖の瞳を覗き込むようにして、懇願した。その瞳にしっかりと灯る狂気と、そして熱情を見てとって、叶湖は僅かに瞑目し

た。

これだけ素直に気持ちを伝えられて、そして叶湖が魅入られた狂気の中に中てられて。それでも尚、黒依に平穏な生活を望めるほど、叶湖はできた人間ではなかった。そして同じように、叶湖自身も黒依を望んでいた。

「……絶対、アナタの方がバカですよ、黒依。偽物だろうがなんだろうが、初めての、家族で初めての、普通でしように……」

「アナタを1人にする普通なんて、僕には必要ありません」

真つすぐと見つめあって、告げられる。正しく、叶湖は黒依に飲み込まれていた。

は、と軽く息を吐いて。いつも通りの、綺麗で可憐な笑顔を浮かべた叶湖が黒依を見つめ返した。

「……なら、黒依。……戻ってきなさい、私の手の中へ。……アナタは、誰のものですか？」

「アナタ以外にありえませんが、叶湖さん」

黒依はそう告げ、やっと許されたと、宝物にでも触れるように、ゆっくりと叶湖へ口づけを落とす。



1年生篇？ 真実（後書き）

読了ありがとうございます！！

そして、遅くなってすみませんでした。

普通に計算ミスをして、1週間以内に更新するつもりだったのが、遅れてしまいました……。

ちょっと急いでかいたので、後ほど校正の関係で多少、修正かける  
かもしれませんが、内容自体は仲直り回でした！

……これから、いちゃラブかいていきたいです、はい。

今後とも、応援お願いします。

普通に、お話は続いていきますので。

次回こそ、一週間内の更新を目指します！ それでは

1年生篇？ 幕間（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（16歳）、化学部部长

桐原黒依：上に同じ。叶湖の幼馴染、生徒会長

彩藤 直：叶湖の兄。医者

彩藤和樹：叶湖の兄。数学教師

## 1年生篇？ 幕間

果たして、叶湖が久方ぶりに家に連れて来た彼女の幼馴染の姿に、兄2人は驚いて目を見開いた。

「黒依……」

「お前ら、いつの間に仲直りしたんだ？」

彼女の誕生日を祝うため、帰宅の音を聞いて出迎えるために玄関に姿を現した直と和樹は、そのまま動きを止める。

「別に喧嘩をしていたわけではないのですけれど……」

「ま、まあいい。とにかく、誕生日おめでとう、叶湖」

「おめでとう」

「ありがとうございます」

兄2人に祝われ、そつなく返事を返す叶湖。ちなみに黒依が祝いの言葉を投げかけることはない。

その理由を知っている叶湖は気にするそぶりも見せず、家の中へと踏み込んだ。

「それにしても……なにが理由で喧嘩してたんだよ。んでもって、よく仲直りできたよ……カナリ長かったぞ？」

黒依に呼びとめられ話しこんでしまったことが原因で、予定より帰宅の送れた叶湖に、すでに兄2人は食事の準備を整え終えていた。

そして主役が帰宅したことで、そのまま食事が始まる。

ふと、和樹が思いだしたように話題を振った。

和樹だけでなく、直も黒依の家族も、叶湖と黒依がそれまで喧嘩らしい喧嘩もすることなく、常に一緒に行動を共にしていたことから、最初で、そしてそれがきっかけで2人が口もきかなくなった最後の喧嘩の原因は気になっていたのだろう。

「喧嘩の理由……ですか。有り体に言えば、黒依が約束を破ったんですよ。私との」

叶湖の言葉に、その隣で黒依が苦笑ともつかない顔をする。

「約束？」

「あの当時、ちょうど治安が悪かったでしょう？ 黒依は『私を守る』なんて言っていたんですけど、私は私を守るより自分1人を守るよう伝えたんです。それなのに、黒依は約束を破って無茶に身体を鍛えようとした拳句、怪我をしました。それで、自分の身体1つ守れていないことを怒った、というわけです」

そういえば、2人が喧嘩をしたのは、夜遅くまで黒依が家に帰らなかった日である。

そんな理由があったのか、と兄2人は深く頷き、唸った。

なにはともあれ、ほほえましい話である。兄2人は考える。お互いがお互いを守るために喧嘩をしたなんて。叶湖の都合のいい話口に、都合のよいように話を受け取らざるを得なかった兄2人は、しっかりと育った妹とその幼馴染に安堵をおぼえるのだった。

「それじゃ、何で今更仲直りしたんだ？ いや、それが悪いって言うてるんじゃないんだが」

叶湖の可憐な情報操作に内心で呆れていた黒依は、和樹の言葉で何かを思い出したのか、ハツとしたように叶湖を振り返った。

「……なんです？」

その様子に怪訝な表情を浮かべて叶湖が首をかしげる。

「宮木篤とは、結局どういう関係なんですか？」

「はい？」

黒依の口から飛び出した名前に叶湖は首をかしげる。

言葉通り、叶湖をストーキングしていた黒依には、2人の関係など今更説明する必要もないように思うのだが。

「……誰だ、それは」

「あー、叶湖のクラスメイトで、叶湖が部長をしてる化学部の副部長だよ。結構面白い奴だぜ？」

話の舞台が学校へうつり、ついて行けなくなった直の呟きを聞いて和樹がフォローする。

和樹から『面白い奴』の認定を下された、その人物に、直があまり良い予感を覚えなかったのは、ここだけの話。

「ま、確かにすっげー仲いいよな。いつとも一緒に授業サボってるし」

「……叶湖？」

何気ない和樹の暴露に直が鋭い視線を向ける。それを受けて、叶湖は僅かに肩をすくめた。

今更直も叶湖をどうこうできるとは思っていないハズだ。

「別にテストは真面目に受けていますし、成績もおとじていませんよ」

「とはいえ……俺はお前ならもっと高得点をとれるだろうと思って  
いるんだが？」

「普通にテストを受けているだけじゃ、何も面白くないじゃないですか」

言葉通り、決して順位を落とさない。

Bクラス主席の成績より、1点上回るのみの成績をとり続けてい

る叶湖の、それを恣意的に行っていることを認める科白に、直も和樹も揃ってため息を落としたのだった。

「それで、宮木がどうしたんだよ、黒依」

「いやあ……4時間目に先生に頼まれて叶湖さんを探したんですけど、保健室で同じベッドで眠っているのを見て、僕も頭に血が上ってしまって」

「げほっ……ごほっ、ごほっ」

黒依の言葉に噎せたのは、もちろん直であった。

「叶湖!？」

「何を。和樹さんならとくに不純異性交遊していた年齢だと思えますけど。……とはいえ、寝ていただけですよ。それも、私が寝た後で、彼が私のベッドに勝手に入りこんだだけで……」

叶湖の言葉に直は顔を白くしたり青くしたり赤くしたり忙しく、和樹は和樹で自分のことを思い出したのか、苦笑を浮かべている。

そんな中、黒依は知っていた。いかに、篤が勝手に行動を起こしたであろうとも、警戒心のつよい叶湖がそれに気付き、反対しなかったのであれば、同意があったのと変わらない、ということ。

「あー、にしても、それで仲直りするきっかけになるなんて、黒依はよほど叶湖は好きなんだな。誰にもとられたくないんだらう?」  
未だ口をぱくぱくと開閉させ、言葉を失っている直を気遣い、話を変えようと矛先を黒依へ向ける和樹。  
それで黒依が焦ったり、照れたりすれば和樹の思惑は成功していたのだらう。……が。

「……ええ、愛していますし、誰に渡すこともしませんよ」

相手は黒依。自分の気持ちを隠すつもりなど微塵もないし、むしろ大々的に公言して面と向かって威嚇したい人間である。

堂々と肯定さて、和樹の内心はまさに、『ごちそうさま』な状態である。相変わらず、直はぱくぱくしているわけだし。



「あー、それは……で、付き合ってるわけ？」

とりあえず、兄として一応は聞くべきことを聞いておくことにする。

「いえ、別に」

答えたのは黒依であったが、その隣で叶湖も肯定していた。

「え、なんで？」

「そもそも、『付き合っている』なんて……『別れる』ことが先にあるかもしれないような関係に落ち着こうなんて思いませんよ、落ち着かない。……私も、黒依を手放す気はありませんから。別に、付き合う付き合い合わないなど、関係無い。ただ、私たちは2人であるそれが、昔も今も変わらない、私たちの関係なんですよ」

きよとん、と聞き返した和樹に叶湖が説明する。

妹が持ち、黒依も理解しているらしい、独特の恋愛観は生憎和樹にはちっとも分からなかったが、一般的に『付き合っている』状態は認めていない2人が、しかし、八タから見れば十分に両想いで『付き合っている』状態にあることだけは理解できた。

「あー、なんかわかんねえけど、オシアワセに？」

「ありがとうございます」

十分お似合いな妹カップルに、ついに白旗をあげた和樹と、未だ

言葉を失ったままの直。

そんな兄2人を前にして、叶湖は悠々と笑顔を浮かべていたのだ。  
った。

「おはようございます」

朝、実家に泊まった叶湖がリビングルームへ向かうと、そこには黒依が待っていた。

「……どうしたんですか？」

昨日は食事の後、時間も遅かったことからすぐに自分の家に戻った彼が、しかしその場にいるのに叶湖は僅かに驚いた様子で首をかしげる。

「迎えに来ました。道中で何かあるか分かりませんが、一緒に登校しようと思って。さすがに、お部屋まで伺うのはアナタの御兄弟

が許して下さいませんでしたけど」

当たり前だ、というように視線をあげる、直に黒依はもちろん、  
叶湖も苦笑を浮かべる。

「……そうですか、おはようございます。黒依、朝食は？」

「食べてきました。叶湖さんは召し上がりませんか？」

「朝はとらない主義なので」

叶湖はそれだけというと、手早く冷蔵庫から取り出した、コーヒー  
だけを飲んで荷物を手にとった。

さつさと家を出たかったのは、別に黒依を待たせたく無かったわけ  
ではなく、直の2人を見張るような視線に居心地の悪さを感じた  
ためである。

「ああ、冷たい飲み物は体に毒ですよ。しかもそんな一気に！」

さつさとリビングの出口へ向かう叶湖に、自分もせわしくなく立ち  
上がった黒依が後を追う。

「……アナタ、おせっかいの度合いが増していませんか？」

「気の所為です。もう出られます？ お荷物、持ちますよ」

僅かに眉をひそめた叶湖に、黒依は気にした様子もなく、叶湖の  
荷物をとると、リビングの扉をあけた。

「どうも。……それでは、直さん、和樹さん。今日はここには戻り  
ませんので」

叶湖はそれだけというと、まっすぐ玄関へと向かってドアを開け放  
つ。

兄妹というにはあまりにも他人行儀な挨拶に兄2人は苦笑しつつ、  
しかしその隣にしっかりと寄り添う男を視界に入れて、虚しさでは  
ない、別の気持ちを抱きながら妹を見送くるのだった。



1年生篇？ 幕間（後書き）

読了ありがとうございます。

スクールライフを送る2人の幕間のお話、彩藤家の日常でした。それにしても、規格外ぞろいの彩藤家。長男は随分苦労していることでしょう。

次話から学校を舞台に、関係の代わった2人のお話が広がっていく予定です。  
見守っていただければ幸いです。

それでは

## 1年生篇？ 変化（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（16歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

## 1年生篇？ 変化

「叶湖さん、今日、帰られるのは何時になりますか？」

家を出て、学校までの道のりをゆっくりと並んで歩く。

中学生時代を合わせると3年と少し、毎日歩いた道であったが、その日は何か違っていた。否、違っていていることなど明らかだ。

隣に黒依が居る。その違和感と……それでも、パズルのピースがカチリと填まるように、2人であることに感じる自然さがおかしくて、叶湖はくすりと喉を鳴らす。

そんな叶湖に首をかしげて、しかしくわしく聞くことはせずに、黒依が尋ねた。

「特に予定は。部活の方も問題ありませんから」

叶湖に放課後の予定があるとすれば、それは化学部の用事以外にはありえない。中学時代であれば、ゆとりの勉強を見ることもあったかもしれないが、彼が風紀委員へ入ってからは彼の自由な時間が減ったために、勉強会は少なくなったし、何より、今は勉強内容がほとんど違っていているのだから、勉強会などしようがない。

……もつとも、それでも叶湖が彼の勉強を見れないのかと聞けば、そうではないのだが。

叶湖の返事を聞いて、僅かに黒依が眉を寄せた。……それはそれは、悔しそうに。

「……僕、生徒会の仕事があるんですよ。……こんなことなら、会長なんて断っておけばよかった。アナタとの時間を邪魔されるなんて」

黒依の言葉におかしそうに、それでもどこか満足したように叶湖が微笑む。

「そうですね、アナタも随分変わった。そーいう面倒くさいものに手を出す子ではなかったのに。優等生が板についてしまいました？」  
叶湖の言葉に黒依が苦笑を浮かべた。叶湖が彼のことを『優等生』などと思っていないことは明らかであるのに。

それでも叶湖以外のおおよその生徒が黒依をそうであると信じている。それもまた、黒依にはおかしかったし、何よりつまらなかった。

「優等生、ね。僕をそう呼ぶなんて。とんでもない勘違いですよ」「くす。言えてますよね。本当は、私にイジメられて喜ぶ、被虐趣味の変態さんなのに」

「言ってるじゃないですか。被虐趣味はないですって」「軽口を交わす。そんな、以前では普通であったこと……」。

それでも、この世界に生まれおちてからは歪みが生じてしまったもの。

それが、こつとも自然にできている。その事実には、黒依は改めて自分が叶湖の側に戻れたことを実感した。

「そうですね。なら、私は授業が終わり次第帰るので、アナタはそ



のまま自宅へ戻ってくださいね」

ふと、叶湖の言葉に違和感を感じて八夕と足が止まった。

「……待っていて、下さるつもりだったんですか？」

足を止めてしまった黒依に、叶湖は眉を寄せて自分も足を止め、彼を振り返る。

「便利な下僕がいるのに、どうして自分で荷物を持って、自分で料理をして、その後片づけまでしなくちゃいけないんです？　ウチの家事はずっとアナタの担当でしょう？」

当然のことを言わされたように呆れた顔でいう叶湖に、それでも歪められた眉は呆れだけではなくて、どこか、照れ隠しも混ざっているような……。

嘘に覆い隠されていたハズの叶湖の感情が、今は手にとるように黒依に流れ込んできていた。それは、叶湖が彼に隠すのを辞めたということで。

以前と変わらないように見える、彼女ながらの悪意のこもった会話にも、一度盛大に暴露してしまっただけで開き直った叶湖の優しさが見え隠れしているようで。

それは確かに自分の自惚れではないのだと、黒依は歓喜した。

「叶湖さん……」

感極まったように自分を抱きしめた黒依に、そこまでのことを言っただろうか、と考えながら、叶湖は小さくため息をついて、その頬を爪をたてつつ抓る。

「ま、アナタには家族がいるのでね、あまり遅くまで拘束はしませんよ。……あと、勝手に抱きしめないでください。いいとは言ってませんよ?」

黒依は爪痕のついた頬をさすりながら、目を見開く。

「それは、別に叶湖さんが気にすることでは……」

「……一応、万人に優しくあるのが私ですから、そうもいかないでしょう? アナタの家族には優しくあり続けますよ、……一応ね」

しかし、叶湖の言葉に苦笑だけに留めた。

そういえば、彼女は元から黒依の家族には最大限の気を使っていたように思う。以前はもちろん、黒依を家族に馴染ませようという配慮からのものだったのだろうが、それは2人の関係が変わった今でも変わらないらしい。

それでも、傍から見れば万人に優しくあるのが叶湖で、その唯一の例外……彼女の真の嗜虐性を発揮されるのが自分だけだという事実は、他人からすると黒依が被虐趣味を持っているかのように認識を受けるほど、黒依が受け入れ、また叶湖の本質に近い部分であった。

ので、黒依にはそれを拒否する術を持たなかったのである。

「あ、そうだ、叶湖さん」

ふと、思いついたように黒依が口を開いた。

「なんです？」

「ずっと言えなかつたんですけど」

「……」

叶湖の無言の促しに、黒依はさわやかな笑みで続きを告げた。

「制服姿の叶湖さんて、可憐ですよ。なんだか無防備な感じがして、僕、ずっと好きでしたよ。……いつにもまして、美しく見えません」

黒依の言葉にさすがの叶湖も一瞬啞然として、それから心底呆れたような表情を見せた。

「……なんですか、唐突に。……アナタは、あまり変わりませんね。いつも、白いシャツに黒のスラックスでしたから。ですけど、子供がえりしているようで、見ていて面白かったですけどね。……しかも、アナタ基本は白い服、嫌いなんです」

制服などというカッコリしたものを着こんで、無防備などという表現はおかしいのだが、叶湖もそこを否定することはしなかった。

……彼女自身でも頷ける部分があるように思ったからである。

一般人然とした中、彼女の本质深くに確かに存在する狂気が恐ろしい叶湖。であるから、ある種、正装という外見を通して、しかし一見の穏やかさを發揮するアンバランスが、黒依にとっては無防備さを感じさせていた。

……もっとも、叶湖には『似合っていないのだろうな』くらいの印象しかないのだが、黒依が凡庸な彼女の容姿を鼻屑目で褒めるのはいつものことなので、『美しい』発言も聞き流すだけで終わっている。

「おはよう、黒依くん！」

「おはようございます、白居さん」

学校中……もはや学校外でも有名である黒依と、一般的な認知度はそれほど高くない叶湖との珍しいツーショットに好奇の視線を受けながら教室に入った黒依に声をかけたのは、白居末明であった。

「あのね、今日の生徒会のことなんだけど」

黒依の隣にいる叶湖に僅かに目を見開いて、それでも気丈に声をかける。

「ああ、はい。伺います。……叶湖さん、荷物、机の上でいいですか？」

しかし黒依は、彼女に向き直ることはしないで、一瞬視線だけで彼女に応えると、すぐに身体を叶湖へ向ける。そんな様子に初めて、未明の表情が崩れるが、珍しいツーショットに集中しているクラスの他の生徒たちがそれに気づく様子はない。

ただ1人、叶湖だけが未明に意識を向けたことで彼女より遅れた黒依を振り返ったが為に、その様子を視界に捉えたが、興味すらないようにすぐに、視線をそらせた。

「ええ、適当で」

「今日、授業は？ サボられますか？」

「……さあ。篤は中々に強引なので、連れ出されるかもしれませんね」

「……断って、下さらないんですか？」

周りの注目などないもののように振舞う黒依が一瞬、傷ついたような闇を瞳に過らせ、叶湖はわずかに喉を鳴らして笑う。彼女も、クラスの注目など、意識の外へ追いやっていた。

「どうして私が？ 嫌ならアナタが自力でどうにかすべきでしょう、黒依」

そうして挑戦的に微笑んだ先で、黒依が僅かに諦めたような苦笑で頷く。

「分かりました。……では、お昼は一緒に食べましょう？　叶湖さんの分も作ってきましたから」

料理上手な兄2人を持った所為か、おかげか、自分で料理をする機会がめつきり少なかつた叶湖は、しかし、前世では、彼女の営む喫茶店では有名な料理上手であつた。

その喫茶店は、叶湖の気まぐれでその日のメニューが決まるのであるが、稀に手の込んだ料理をだすのが、叶湖を知る常連客の楽しみの1つになっていた程である。

彼女と同棲していたころは、料理は……というか家事全般が基本、黒依の担当であつた。もつとも、それはとりわけ黒依をこき遣おうとしたわけではなく、叶湖の喫茶店を手伝う以外は職のなかつた黒依であるので、彼が家事を担つてむしろ当然ともいえる。それでも、叶湖が気まぐれを起こして稀に作る料理に、黒依が到底かなわないのは何度も思い知つたことであつた。

そんな叶湖だが、彼女も黒依を拾うまでは自炊していたこともあつて、料理を嫌っているわけではなく、せつかくならば美味しい料理を食べたいとも思っている。

そんなわけで、自立した彼女が弁当を持参していることを、黒依は当然に知っていて、実家に帰つた今日は弁当がないだろうと、わざわざ準備してきたらしかつた。

「気がききますね。……ええ、構いませんよ。場所は追つて連絡し

ますが、私に女性に囲まれて食事を取る趣味はありませんからね？」  
「分かってます。……では」

黒依はそれだけいうと、早々に末明を連れて席を離れた。自分が叶湖以外の女と口を聞くのに、叶湖が気を害すかもしれない、何より彼自身、以前は何も思わなかったそれが、酷く気の進まないことではあったが、それでも、彼女をそのまま叶湖の側においておけなかったのが原因である。

叶湖だって、心底からどうでもいいと思う人間に対し、優しくするのには、それなりの精神力を必要とする。そしてそれ以上に、人の感情に敏感な黒依と叶湖は、末明が叶湖へ向ける敵意にも似た感情を確かに、察知していたのだった。

## 1年生篇？ 変化（後書き）

読了ありがとうございました。

お話は舞台を学園にうつしました。

これからどんな波乱が待ち受けているのか。

できるだけ甘い雰囲気も出しつつ、書いていければいいなあ、と思います。

さて、詳しくは活動報告の方でも書いておりますが、今までの感謝をこめ、いくつか短編を書かせていただきたいと思います。

もしよければ、作品のリクエストなど承っておりますので、活動報告コメなどでご意見いただければ幸いです。

よろしく願います。



1年生篇？ 盲目（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（16歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

宮木 篤：叶湖のクラスメイト。化学部副部长

## 1年生篇？ 盲目

「叶湖　っ!?!」

予鈴が鳴ってしばらく。いつも通り、叶湖にタツクルをかまそうとした篤がその身を固め、バツと勢いよく教室の最前列を振り返った。

「なんで!?!　なんであんな堂々と牽制するわけ!?!　叶湖、もしかして許したの!?!」

隣でわめく篤に叶湖はわずかにこめかみを痛めながら、ため息をつく。

少なくとも、まだ教室が始業前のざわめきに包まれていてよかったと思っただ。

「何か問題が?」

叶湖がいかにも、篤が自分に近づくことを許したとしても、恋人になっただけではないし、これからもそういう関係にならないだろうことはお互いに理解していたハズである。

それを責められ、理由は想像がつくにしても、叶湖は機嫌が悪い笑顔とともに、篤を振り仰いだ。

「そりゃないだろーっ!　ここまでねばって、相談にも乗ったのに、俺の預かりしらないところで、よりを戻すなんてあんまりだ……」

「どーして私がいちいちコトの次第をアナタに説明する必要があるんですか。そもそも、アナタに相談にのってもらった覚えもありません」

記憶にあるのは、面白半分で首をつっこまれたことくらいである。叶湖はため息を1つ、この話はもう終わったとばかりに、視線を前

へ戻した。

ちょうど、担任が教室に入ってきたところで、篤もしぶしぶ追求を諦め、ジト目を向けながら席へと戻る。

叶湖はそんな様子を横目に収めて、いろいろと面倒くさそうだと、最前列でしっかりこちらの動向を気にしている様子の黒依にもため息をついた。

そうして昼休み。

「叶湖さん」

メールで場所でも指定してくるのかと思っていた叶湖は、堂々と教室で声をかけてきた黒依にため息をつきたくなった。

どうやら彼の中での優等生計画は、叶湖に許された段階で白紙に戻っているらしい。

そもそも、彼が優等生になろうとしたきつかけも、叶湖を失った彼が、その不安定な心の拠り所を家族に求めようとした結果、彼の家族が望むだろう息子を演じようとしていたからであるのだから、理解できないわけではない。

もつとも、叶湖もよく知る黒依の家族らは、絵に描いたような優等生を望んでいたのではなく、ただ息子が元気でまっすぐ育つことのみを望んでいたのだろうので、黒依の努力が本当に必要なものはなかったことは、叶湖は容易に想像がついていた。

けれども、それと同じくらい、黒依が『普通の息子』を知らないことも想像がついていたので、叶湖は何も言わず、黒依を見てきただけであった。

それが、心の拠り所を叶湖へ再び落ち着けた途端、『優等生』を投げやりにやっているのであるから、やはり黒依の心はまったくではないものの、彼の家族へは向いていなかったのだろう。

そのことを感じて、叶湖は自らの我慢が無駄だったことに僅かに苛立つものの、黒依の変わらぬ狂喜に歓喜するのだった。

それにしても、叶湖と一緒に行動するようになった途端、人が変わったようにふるまう黒依に、まさか自分に面倒が来ないだろうかなどと考える叶湖。

いくら叶湖や黒依の当事者と、篤や和樹など、その周り数人が、真実黒依が優等生でないことを知っていたところで、それが周りにどれほど伝わるだろうか。

叶湖はそこまで考えて、目の前で柔らかく笑顔を浮かべる従順な犬に、面倒くさい思考を捨てた。

うだうだ考えるのは自分の本質ではないし、そもそも、叶湖に面倒が降りかかる前に、面倒を起こそうとした本人が、この犬にそれ以上の『面倒』を与えられるに違いないのだから。

「行きましょうか」

叶湖は「俺も！」と声をあげる篤をバツサリ、視線だけで切って捨てている黒依に笑顔を向けたのだった。

「黒依くん」

出来上がってしまった2人の空気に物怖じもせず話しかけてきた強者。

「……白居さん」

黒依が僅かに眉を寄せたのを見て、叶湖が内心でため息をつく。

ここで黒依まで機嫌を害してどうするのだ、というのが心の声であつた。

「あの、さつきね、先生から伝えられたことがあつて……」

実を言えば、なんだかんだと理由をつけて、昼休みに黒依を拘束するのは彼女の常套手段であつた。

生徒会の話だと言えば、優等生時代の（……）黒依はまず、断らなかつたし、私的な談話はできないかもしれないが、その分、ほかの生徒の介入を防げる利点もある。

「生徒会のことだから、2人で話したいのだけれど」

言外に、邪魔者はどこかへ行けと、叶湖へ圧力を与えながら、未明が黒依に尋ねる。

もしかしたら内心では、優等生な黒依が、まさか自分の役目を放置するはずなどないと、どこかで確信しているのだろうか。

……で、あれば。叶湖はいつそ憐れみの気持ちを未明に向けるべきなのかもしれない。

頑なに他者を拒絶しているような、叶湖と黒依の空気間に口をは

さんでくれるほど、盲目であるのに、彼女は黒依の何もかも、見えてはいないのだ。

叶湖が心底愛している、その『狂気』でさえも。

で、あるから。

「では、そのことは放課後の生徒会で話しましょう」

「え……？」

彼女は黒依に無残にも切り捨てられ、そのように間抜けな表情を晒すハメになるのだろう。

「生徒会の話は、ちゃんと話し合いの時間がとつてあるんですから、そちらで。僕が暇なときは構いませんけれど、あいにく、用事があるので」

言つて、黒依はあっさりと末明を視界から追い出した。

自分が冷たく接することで、叶湖にいらぬ被害を与えぬよう……と、していた黒依であるのに。相変わらず、穏やかそうな見た目や喋りに反して、気は短いし、自分の興味のないものに見せつける、叶湖に負けず劣らずの嗜虐性は変わりないらしい。

末明の存在など、視界どころか、意識からも追い出してしまっている様子で、黒依が叶湖を振り返った。

「すみません、手間取りましたね」

「……行きましようか」

こんどこそ。叶湖は自らも、未明の存在を意識から弾きだして、黒依に答えた。

そろそろ、他の生徒も気付けばいいのだ。

優等生の皮をかぶった、憧れの『王子さま』は、そのような光の中  
の存在とは、対極にいるような人物なのだ。

とはいえ、その期待値はとても低い。

王子様の正体に気付かない人間にしてみれば、叶湖こそが、まるで王子様を誘惑し、墮落させた魔女のようではないかと。

……真実の性質とは当たらずとも遠からずの評価に、それはそれで面白いかもしれない。



少なくとも、予定調和の約束された平穏な生活よりは、よほど。

どうせ、自分には過保護を増した騎士　　正体は暗殺者だが  
がついているのだし、危険はない。せいぜい、喜劇でも見るような  
気分で、これからを楽しもうか、と。

叶湖は黒依について廊下を歩きながら、一人、上機嫌にほほ笑んだ。

1年生篇？ 盲目（後書き）

読了ありがとうございます。

遅くなりすぎですね、申し訳ありませんでした。  
しかも、短文です。

一応、この次まではお話が決まっているので、次話はできるだけ早くあげたいと思います。  
幕間（と、いうか日常のお話）はあと2話（または3話）で、その次からはまた、イベントが起こってきます。

あまり遅れることのないよう、更新続けていけるよう、がんばりますので、お付き合いくださいなれば幸いです。

1年生篇？ 夕方（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高2。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染、生徒会長

大里ゆとり：叶湖の友人、風紀委員

## 1年生篇？ 夕方

「あれ？ 叶湖？」

放課後、生徒会の集まりに消えた黒依を待ちながら、叶湖は図書室で本を広げていた。

本当なら化学部部室の方が、気を張る必要もなければ、好き勝手にパソコンをいじることのできるのではあるが、それでは生徒会の終わった黒依が迎えに来るのが大変だろうし、なによりイジけてしまった篤が引きこもっているのであきらめた。

そんなわけで、図書室で大して興味もない医学書を物憂げに斜め読みしながら、時間をつぶしていたのであるが、耳慣れた呼び声が出て、叶湖は振り返った。

「1人で居残りなんて、珍しいね」

そこには邪気のない顔できよとん、と首をかしげたゆとりが立っていた。

いまだに、人目があるところでは、きょーちゃん呼びを治さない彼が、呼び捨てで呼んだだけあって、その後ろには自習スペースと背の高い本棚が並んでいるだけで、人の気配は全くなかった。

ひとり暮らしを始めてからというものの、自宅の方がはるかに居心地がよかったし、なによりそもそもが、ゆとりとの勉強会でしか図書室などという場所には訪れなかった叶湖である。

ゆとりの言葉はその通りで、叶湖が図書室に入ったのは高校入学以来、初めてのことであった。

「ええ、今日は人待ちなので」

正直、一緒に帰らずとも、家に帰ればしたいことなど山とある叶湖なのであるが、放逐していた間に、数倍過保護になって帰ってきた飼い犬が、登下校の道ですら叶湖を1人にするのを不安がるので、仕方なく、校内で軟禁状態を甘受している叶湖である。

正直自分も、甘くなっただと思わざるを得ない。

「人待ちって……あの、宮木のハズないし……ってことは、黒依！？」

「そうですね、何か？」

内心で、お前もか……という気分を感じながらも、表面上は穏やかにほほ笑んで見せる。

「……あー、持ってかれた！ ずるいずるいずるいー！」  
「……わめかないでください」

中学生時代は、男っぼさがなく、いじめも受けていたゆとりであるが、さすがにもう高校生。男臭さまでは出ておらず、顔立ちもキレイなままではあるが、声変わりもしているし、どう見ても女には

見えない。

そんな容姿で駄々をこねられても、正直、うすら寒さしか感じない叶湖はあきれた笑顔を浮かべて、ゆとりから視線をずらした。

「なんで？ 僕が叶湖を狙ってるって言ったのに！」

息巻きながら、ゆとりが叶湖の横の席を陣取り、叶湖に詰め寄る。そんな彼が近づいた分だけ、きつちり離れて、叶湖は首をかしげた。

「それは聞きましたが、私はそれに応えるとは言っていませんよ」

「でも、特別はいないって言ってたじゃない！」

「……アナタだって気付いていたでしょうが。喧嘩別れしていた時期だって、昔から変わらず、アレだけは例外ですから」

当時は正直になれなかったが、今ならば言える。黒依が叶湖に捨てられてから、一時も叶湖から心を離すことがなかったように、叶湖もまた、黒依を捨ててから一時も、黒依から心が離れることがなかった。

意地を張って気付かないようにしていたが、ゆとりほどの観察眼があれば、簡単に見抜けるだろうことでもある。おそらく、藪蛇にならないよう、気付いていながらも口を噤んでいたのだろうし、その点については意地を張っていた張本人の叶湖が文句をつけること

でもない。むしろ、当時の自分に見れば、気付かないでいようとしていたところを突かれる方が面倒くさいだろうので、ちょうどいい。

とはいえ、現段階で、叶湖はしっかりと自分の気持ちを実感しているのだから、ここにいたって、知らぬ存ぜぬをゆとりで許す気はなかった。

「……つまらないの。だったら何？ 結局僕も、宮木も、叶湖にただ振り回されてただけってこと？」

「振り回した覚えはありませんが。私はアレとよりを戻さずとも、アナタ方に応える気はないと言っていましたし。なにより、私には篤やアナタの方が不思議でならにんですけれどね」

そう言っつて、本当にどうしてか分からない、といったような表情を浮かべた叶湖に、ゆとりの方が不思議そうに首をかしげる。

「どういう意味さ」

「私に好意を抱いてくださる方は、幸か不幸か、いないわけではな  
いんです。一般人に好かれるような性格をしている覚えはありません  
けれど、どうも、ある一部の方には好かれるようですから。アナ  
タ方のような、ね」

言っつて、叶湖がクスリと笑う。

それにゆとりは、居心地の悪そうな表情を若干浮かべて、叶湖に  
先を促した。

「けれど、そういう人たちは、黒依を前にすると、一斉に彼に一步を譲るんです。類は友を呼ぶ……だからこそ、アレと同程度まで堕ちることを僅かに、けれども確かに、理性が拒否をする」  
「どういうこと？」

怪訝そうに尋ねるゆとりには、叶湖は僅かにほほ笑んで、けれども、その質問に答えることはなかった。

「もう、すぐにでもわかりますよ。アレは、自分の本性を隠す気もない。アレが、私に並ぶ最低の人間だと、きつとアナタも理解します」

言って、叶湖は立ち上がる。小さくついているランプが、わずかに点滅した腕時計に一瞬、視線を向け、今まで読んでいた本を本棚に戻す。

そうして、今まで座っていた席にもう一度戻ってきた叶湖が、鞆を手にし、図書室の入り口までゆっくりと歩みを進めたところで、入り口から入ってきた黒依とはち合わせた。



「終わりました？」

「ええ」

気配で叶湖が近くにいることに気づいていた黒依は、目の前にいた叶湖に驚くこともなく、当然のようにその手から荷物を攫うと、靴箱へ向かって歩き出す。

叶湖が僅かに伺い見た彼女の背後では、怪訝そうな顔で叶湖の後をついてきていたゆとりが、啞然と突っ立っていた。

「それにしても、よく会議の終わったのが分かりましたね。叶湖さんの特技で何か細工でも？」

叶湖のマンシヨンへの道をゆっくり歩きながら、黒依が思い出したように口を開いた。

「一応、世界中の防犯メディアを通して、特定の人物を常に監視し続けられるシステムは持っているんですけれどね。アナタに関しては、防犯装置という装置を避け続けるので、捕えるのはとても大変ですよ。それでも、死角のない場所もありますけれど」

監視カメラを避けるのは、生前からの黒依の癖であった。どうあつても、自分の存在を後に残る形にすたくなかつたらしい。おかげで、彼が行方不明になったときは叶湖がどれだけ焦つたかしのれない。とはいえ、たとえば、360度、どの角度からもカメラがとらえている場所であるとか、入り口すべてを覆う視覚のあるカメラであれば、黒依は避けられない。

カメラが認証するスピード以上で動いて避けることもあるが、人の多い場所であれば、かえって、回避の動作が人目につく可能性もある。

もつとも、どうしても映りたくない時に、映らなくてはならないようなカメラがあるときは、基本的に叶湖がカメラのシステム自体を落としているので、黒依も無理な回避行動をとらなくなった。

「叶湖さんの家の周りは、とても難しいですけどね」

叶湖の自宅マンションはもちろん、彩藤の家にも死角のないようなカメラが設置されている。

叶湖はそのカメラに個人の識別機能を搭載し、黒依の接近時は腕時計に反応があるようにしていた。例の、黒依と叶湖が分かれる原因になった日も、行方不明らしかつた黒依が叶湖の家を訪ねたのを、誰よりも先に察知したのはその所為である。

そのほかにも、叶湖の腕時計には叶湖の扱っている株の売買の機能や、録音・録画機能など、多彩なシステムが備わっており、正直、その手の会社や研究所へ持っていけば、一瞬で叶湖の就職先が決定しそうな装備であった。

とはいえ、叶湖が今日、黒依の接近を察知したのは、別にカメラや防犯システムを利用したのではない。

「パソコンですよ。生徒会の仕事中は、記録や学内での連絡のため、常に生徒会長専用のアカウントで学校のシステムへログインされている。そのアカウントのログアウトで、会議が終わったことは分かれます」

叶湖を待たせていることを知って、黒依が他の雑務などを済ましてくる可能性は皆無であるので、会議の終了とちょうどに帰り支度をはじめれば、だいたい良いタイミングになる、というわけであった。

「なるほど、そういうこともできるんですね……」

「一応、学校のシステムへの侵入は私レベルでなければ不可能なよう、セキュリティ面を強化してありますから、安心してもらって構いませんよ」

双方、すでにいくつか犯罪を犯している身ではあるが、警察に終われる立場でもなし、一見ただの学生であるので、そこまでの予防が必要か否かは不明であるが。

「あ、そういえば」

と、しばらく歩みを進めたところで、思い出したように黒依が立ち止まった。

「何か？」

「今日、泊ってもいいですか？」

「は？」

突然の申し出に、さすがの叶湖もしばし唾然とする。

「アナタ、ご実家は？」

「外泊すると伝えました。まあ、叶湖さんの家だとは言っておりませんけれど、問題ですか？ 叶湖さんだって、ご実家でなくマンシヨンが本当の家のように、僕だって、桐原の家じゃない、アナタのいる家こそが、本当の家なんです……だから」

「……」

平然と言つてのける叶湖に、自分ばかりが気を回すのもばからしくなつて、息ひとつと共に開きなおることにする。

「明日は休みですしね。……せつかくですし、1日ゆっくりしまし  
ようか」

「いいですねー、それ」

そうして、橙に染まった空の落とす暖かい空気の中を、ゆっくり  
と2人の家へ帰るのであった。

1年生篇？ 夕方（後書き）

読了ありがとうございます。

ゆとりが登場しました。

……不憫ですね。すみません。

が、これからなんとか、3人組にもがんばってライバルになってもらおうと考えていますので……なんとか。

今回は、一応、叶湖宅でのお家デートを企画していますが、さて、この2人で甘くなるでしょうか……

がんばりますので、楽しみにしていただけると幸いです。

1年生篇？ 隠家（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（15歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

## 1年生篇？ 隠家

料理をする音がキッチンから聞こえてくる。

トントン、ことこと……。

リズムよく聞こえてくるその音は、それを作り出す主がそれなりに料理の腕があることを如実に伝えていた。

普段は自分1人しか出入りしない家のこと、自らがリビングのソファに腰掛けていても関わらず、キッチンで物音が聞こえるなど、しばらくぶりのことで、無意識のうちに懐かしさがこみ上げた。

「黒依」

「はい？」

軽く、名を呼ぶと、料理の途中であるにもかかわらず、その手を止めて素直に叶湖が腰掛けるソファのそばまでやってきた。

「……邪魔をしましたね」

「あ、いえ」

特に用事があつたわけではなく、ふと思いついて呼んだだけだったのだが、火まで消してやってきた周到さ、というか素直さに、叶湖はつい、笑いをこぼす。

黒依もそれにつられたのか、自らの行動を思い返したようで、軽く笑いをこぼした。

「呼んだだけでした？」

「ええ、まあ。……ああ、一応、鈍ってないのだな、なんて珍しく



も感傷に浸ってしまったのかもしれないね」

言つて、叶湖はふ、と黒依から視線をそらす。

「僕なんて、手際がいいだけで。味の方は、叶湖さんにいつまでたつても足元にも及びませんよ」

そんな叶湖の視線を追いかけて目を合わすと、黒依はそう微笑んで、キッチンへと戻っていつてしまった。

「……どうも、ウチの犬はご主人さまの手料理を食べたくて仕方のないようですねえ」

黒依が去つたリビングで、額に手を当てて呆れたように、叶湖が吐息と共に吐き出す。

小さくつぶやいた声は、しかし確実に黒依の耳には届くだろう。

一定のリズムで奏でられていた包丁が、一際機嫌よく鳴った気がした。

「お仕事、もう始めているんですか？」

ふと気付くと、リビングダイニングのテーブルまで料理を運び終えた黒依が、叶湖の後ろからその手元を見降ろしていた。

「まさか。さすがに家族と密接につながっている状態で、あんな危ないことには手を出しませんよ」

これは裏生徒会の仕事です。と、パソコン画面を黒依へ見えやすいように向ける。

さすが生徒会長。一瞥でその内容をつかんだのか、1つうなづいた後、しかし眉を寄せて表情をしかめた。

「居住すら別の家族に危険が迫るほど危ないことを、以前はしてたんですね」

基本、オンラインでしか活動していない叶湖のこと。黒依が手伝える仕事は少なく、また情報分野においては叶湖も並々ならぬプログラマーもあつたことで、黒依が叶湖の仕事を詳しく知る機会はそう、なかった。

前世で想いが通じ合ってたからというものの、黒依たつての望みで、叶湖が直にクライアントに会わねばならない時などは、ボディガード紛いのことをしたこともあるが、特に何の事件も起こらなければ、ただ、意味もわからないまま、叶湖に同伴しているに過ぎなかった。

「まあ、軌道にのるまではね。パイプが少ないですから、多少危ないこともしくはなくては。もつとも仕事の原因で、趣味より大きな危険にさらされることなど、ほぼないですが」

叶湖の趣味とは、毒薬収集と、その使用を含めた猟奇殺人であった。

身体的にも屈強とは程遠く、身体能力もさほど高くはない。なにより、ひどい痛みを感じれば通常の数倍、数十倍の確率でショック死の危険すらある叶湖のことだ。

しかし、そのターゲットが決して、非力な女子供に偏ることはなく、むしろその逆であったのだから、確かに、彼女の趣味の方がよ、彼女にとっては危険だったのかもしれない。

「それより、頂きましょう？　せつかく作ったものが冷めますよ」

叶湖の話はそこまでだ、と言わんばかりにノートパソコンを折りたたみ、ソファを立ち上がる。黒依はそんな叶湖の姿に1度だけ嘆息し、ダイニングテーブルの椅子をひいた。

「黒依、ちよつと」

洗い物を終えた黒依が、叶湖と入れ替わるようにしてシャワーへ向かってしばらく。

未だ湿ったままの髪の毛から数滴の水滴を落としながら現れた黒依を、叶湖が苦笑して手招く。

「もつとしっかり乾かして来てください。あなたは野良犬か何かですか」

「……飼いだですから、ご主人様がしてくれる……でしょう？」

「……………さあ？」

呆れた様子でつぶやいた叶湖に、黒依が笑顔を向ける。

叶湖はそんな黒依の様子に一瞬、瞠目したが、意地悪そうに笑って小さな小瓶をその鼻先へ押しつけた。

「部屋へ行きましょうか。……私はもう少ししなければならいこ

とがあるので、先に飲んで待っていてください……ね？」

クツリ、と喉を鳴らして叶湖は黒依に微笑みかける。

「これ……は」

確かに彼女は毒薬のコレクターであり、それを使って人の命を脅かす。けれども、黒依に渡されようとしている液体が、決して黒依の命を奪おうとするものではないものと知って、そしてそれが、自分の本能を加速させるものだろうことまで気づいて、叶湖の真意を伺おうとする。

「ああ、心配しなくとも大丈夫です。あなたの理性が以前と違って  
そう、長くは持たないだろうことなど十分分かっていきますから」

言って叶湖は少し離れた台の上を視線で指し示す。

「ああ、なるほど」

そこに置かれた手枷を見て、なるほどいつもの叶湖だと、黒依は  
わずかに苦笑を浮かべた。

「アナタの体の損傷をゼロに、私が欲を満たす方法なんて、そう無い  
じゃないですか。……アナタがちゃんと私を満たすことができ  
ば、私も飲んであげますよ」

言って、叶湖も小さな小瓶を細い指で静かに揺らす。その水面に  
映りこんだ、あやしく光る瞳に灯る熱を確かに感じて、黒依はそれ  
に浮かされる気分で一息に、小瓶の液体を喉へ流し込むのであった。

1年生篇？ 隠家（後書き）

読了ありがとうございます。

ええ……長期間に渡る更新停滞、本当に申し訳ありませんでした。パソコンの故障に、甘い話が書けない私自身の欠点。他、さまざまな要因が重なり、今回の失踪となってしまいました。

が、一応、戻ってきましたので、週1とは言わないまでも、皆様に愛想を尽かされないような間隔でアップしていければ、と思います。これからも、こんな作者を応援していただければ幸いです。

次回、舞台は再び学園へ。

叶湖のあの（・・・）秘密が明るみに出ます！

1年生篇？ 暴走（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（16歳）。化学部部长

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

## 1年生篇？ 暴走

「黒依くんっ……どういう、こと？」

ガタン、と大きな音を立てて椅子が引かれ、顔面を蒼白にした末明が悲鳴をあげて立ち上がった。

その日の生徒会は荒れ狂っていた。

生徒会のメンバーは基本的に、自己推薦ののち生徒会から公認された候補者の中から、全校生徒による投票によって選出される。

一般の学校と違う部分を指せば、やはり生徒会からの公認に、それなりの審査がある点であろうか。生徒会が自治組織としての役割を發揮し、いかにAクラス所属であっても不適任と判断されれば、候補者として選挙活動を行うことはできないのだ。

候補者の選出方法は、自己推薦だけでなく他推も認められており、その中でも最も生徒会からの公認に有利に働くのは、生徒会役員からの推薦であった。

現生徒会役員による自己推薦がほぼ無審査で候補者となれる効力の理由付けとして、生徒会役員からの推薦もまた、ほぼ無審査で候補者となるのが許されるのである。

そしてその日は、来年度生徒会に向けた立候補の締切日であり、



生徒会でも、立候補者について公認・非公認の決定がされつつあった。

その日の分の処理が終わり、まとめに入ろうとした議長を止め、黒依が口を開いた。

そして、その場で黒依は自分が次年度の生徒会へ推薦する人物の名を挙げたのだ。

### 【彩藤叶湖】

黒依が推薦をすると口にしたとき、確かに末明の脳裏によぎった名ではあった。しかし、そうだとは思いたくない心が決して認めようとしなかったもの。

その思いは儚くも打ち砕かれ、その名が黒依の口から告げられる。一瞬、以前の脅しが脳裏によぎり、頭が真っ白になったが、叶湖が推薦されたポストが、現在3年生が着任しており、現役員の座を脅かすわけではないと分かり、少し、心が落ち着く。

その半面、末明の心中には納得できない気持ちが続々にはわき起った。

「何か、問題がありますか？」

「問題って……あの人……彩藤さんは、裏生徒会の会長なのに！常識的に考えて、自治組織の2つを掛け持ちするだなんて、そんなことが許されるわけが……っ！」

末明には似合わず声を荒げる姿に、しかし周りの役員も賛同しているのか、ただ、難しい顔つきで黒依とのやり取りを見守っている。

「学校から禁止されているのは、委員会同士の掛け持ちのハズ。その点、風紀委員と生徒会は委員会の扱いを受けているので掛け持ちは不可能ですが、裏生徒会とはいえ、あれは表向きは化学部という部活動の形式をとっています。形式的には掛け持ちは可能のはずですが？」

「そういう問題じゃなくて……。自治組織という形式をとる以上、組織間の独立は守られるべきだわ……っ」

声を荒げて反対する末明に対し、黒依は至って普段の様子を保ったまま言葉を続ける。その様子から見て取れるのは、強固に揺るぎのない意思のみで、その様子にさらに末明の内心で嵐が荒れ狂うようだった。

「確かに風紀委員と生徒会は校則に従い、それぞれ認められた権利

の範囲外の活動ができない点で、相互に独立は約束されているんでしょうね。しかし、一般的にはその存在が確認すらできない裏生徒会については、その行動を制限するものは特になく、その権限のすべてが裏生徒会長の一存に依っています。すでに、裏生徒会からの独立など守られていないと思いますか？」

そう、微笑んだ黒依の姿に、言い返す言葉をなくした末明が口ごもる。

「会長……。確かに彩藤さんはAクラス所属の優秀な生徒ですが、今まで変わらずその席次は最下位だったと思います。彼女の立場は確かに表には知られていないことですし、それを理由に公認を与えないことはできないかもしれない。けれど、裏生徒会の情報が表に出ていないということは、裏生徒会をまとめる立場にある彼女の力量も知られていないということです。……表から見えるのみの彼女の様子では、生徒会が公認を与えるに足る生徒であるとは到底言えません」

と、今まで黙っていた議長が声をあげた。白居末明とは違い、現在最高学年である落ち着きを見せ、静かに黒依に苦言を呈す。

しかし、そんな様子にも感情を揺らす様子を見せず、黒依は笑顔を変えない。

「……何を言いたいのか、よく分かりませんねえ。現役員以外の候

補者は、せいぜい、クラスで委員をしているとか、今年度の委員で役職についていたとか、その程度。それであれば、表から見ても化学部部长である彼女も十分要件を満たす……と、思いますけれど。まあ、構いません。皆さんが、Aクラス末席の彼女の頭脳に文句があるのであれば、明日から始まるテストの結果を待ちましょうか。幸い、結果が発表された後に公認を出しても間に合います」

「どうしてそこまで彼女にこだわるんですか！」

口を閉じ、議長に視線のみで会議のまとめを促す黒依に、末明が最後にかみついた。

それは生徒会のことのみではない、彼女の知らないところで叶湖と黒依の距離が近づいた、それからの黒依という人間の変化に対する叫びでもあったのかもしれない。

「どうしてこだわってはいけないのですか？ ああ……言い忘れていましたが、もし彼女の公認が為されない場合、僕は自分の立候補を取消します。彼女のいない生徒会で会長をしているくらいなら、彼女の下で化学部部長でもやっていた方がよほど有意義です。……僕が彼女の生徒会入りに拘っていることは認めます。けれど、みなさんもやけに、彼女が生徒会に入らないことに拘っていらっしやるんですね」

「……それで？」

「特に何も。全員無言のままに会議は終わりましたよ」

自宅のソファにゆったりと座り、機嫌がいいとは言えない笑顔で、足元に座り込んだ黒依に視線を移す叶湖に、こればかりは譲らない、と黒依がその目を見つめる。

「嫌、ですか？」

「嫌といえばアナタは引くんですか？」

「アナタの意思に僕が逆うと思っっているんですか？」

黒依の言葉に、目だけで笑っていた叶湖の口端があがる。

「とはいえ、アナタも頑固ですから、私が否といえは本当に、生徒会にも、アナタが今まで築きあげた王子様のキャラクターにも、一瞬で興味など無くして、簡単に砕いてしまっただけでしょうね」

「僕にとっては、既に興味のないものですが。アナタが気にすることでもありません」

確かに、黒依が優等生を演じ、生徒会の役職についたのも、すべて遠回りには叶湖のためであった。叶湖から自立し、彼女の足を引っ張らない……。そのために普通を演じようとした結果であるのだから。

「……いいでしょう」

「え？」

ため息と共に叶湖が吐き出した言葉に黒依は目を見開いた。

「いいですよ。アナタからの推薦を承諾しましょう」

まさか、了承されるとは思っていなかった黒依が目を見開く。

「どうして……？」

「おかしいことを聞きますね。私が気まぐれなことを知っていて、あまり理由を聞くものではありませんよ。気が変わらないとも限らない。……ですが。……私の夢は？」

不意に尋ねられた質問に、黒依は一拍とおかずに答えを返す。

「お嫁さんと世界征服、ですか？」

「ええ。試しに、学園1つ征服してみるのも面白い、でしょう？」

もつとも、裏生徒会長という立場に、生徒会長が黒依であるという事実を踏まえれば、征服など終わっているようなものですが、大々的に表に出るといふ経験も面白いかもしれませぬ」

生徒会など、普通に考えれば叶湖の嫌がりそうなことである。それを受け入れる叶湖の真意に思いが依らず、その理由を聞いても、納得のできない、なんとも微妙な心境が残る。

そんな黒依の表情を見て、叶湖が嘲笑するように笑った。

絶対的な支配者の笑みに、黒依がハツとその顔を見つめる。目が合った。

叶湖の浮かべる笑顔に、黒依ははるか昔、まだ自分が無灯黒依であり、叶湖が嘘々叶湖であった頃を思い出す。

黒依を支配するときの支配者の笑みとはまた違う。

叶湖が絶対の自信を持つ情報操り、かつて世界征服を成し遂げていたともいえる、その圧倒的な力を振りかざす時の、絶対的な強者の笑み。

その君主であり、参謀でもある彼女が、策略を廻らしている。

黒依は自分に戦慄が走るのが分かった。

「それにね？ 私、アナタの名を気安く呼ぶ、あの女が心底から嫌いなんですよ」

言っただ話は終わったとばかりにソファを立ち上がり、自室へ向かう叶湖を黒依が呼び止める。

「今日はもう帰りなさい？ 王子様や、生徒会に興味がないアナタでも、自分の特待生という立場には拘りたいでしょう？ 私を表舞台に立たせるのですから……、今回のテスト、アナタは珍しくやる気にならないかならないかもしれませぬね？」

それから1週間後。

次年度生徒会役員選挙の立候補者の告知を目前にし、定期テストの結果が発表された。

主席は変わらず、桐原黒依。現生徒会長である、学園の王子様が居座ったが、しかし。

その結果発表は2つの嵐を生んだ。

1つは、桐原黒依が中等部時代を通して始めての、全教科満点を獲得したこと。

そして2つ目は、今までAクラス末席であった生徒が、同じく全教科満点で、1度もその席を譲ったことのない主席に、その肩を並べたことであった。



その3日後、生徒会より公式に告知された、次年度生徒会選挙立候補者には、しっかりと噂の生徒の名が記されていた。

## 1年生篇？ 暴走（後書き）

読了ありがとうございます。

……そしてすみませんでした。

あとがきでの謝罪はもはや恒例になってしまいました。

2月に入ったら更新します、と言ってから、もはや1カ月。

2月も半月が終わってしまいました。

と、いうわけで、学園の王子様の暴走と、叶湖の生徒会への乱入でした。

次話の舞台は、生徒会です。

叶湖が生徒会に入ったことにより、どう変化するのか、書きたいですね。

今回は2月中に、今度こそ！

……更新したいです。本当に。

いつも応援ありがとうございます。

皆様の応援があるからこそ、私もここに戻ってこれます。

これからも、生温かく見守ってやってくださいまし。

1年生篇？ 台風（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校1年（16歳）。化学部部长・生徒会書記

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

## 1年生篇？ 台風

叶湖が高校1年生として過ごすのもあと2カ月ほどとなった。

先日の選挙を受け半数のメンバーが新しくなった生徒会役員一同は、新年度に向けたクラブ活動の予算会議が行っていた。

「では、来年度の予算も昨年の予算をベースに編成していくということ、いいでしょうか？」

新しく議長に選ばれた現在の2年生が、半数が年下であるはずの生徒会メンバーを見まわして、自信なさそうに意見を伺う。

その視線を受けた黒依が無意識に視線を動かした。

ふと、自分に送られた視線を感じて叶湖は声を漏らさないようにクスリと笑った。

明らかに公私混同のソレに、しかし叶湖はその問題点を指摘するほど公明正大ではなく。ただ、もはや自分を中心としなければ、何を決めることもできないその様子に、可笑しさと哀れさと相まって、確かに愛らしさを感じていた。

「……つ、毎年の例では、1年前の予算に、特別な活動功績などを加味した上で調整をお行っていましたけれど。何か、別の案はありますか、彩藤さん？」

「……なぜ私なのか分かりませんねえ。まずは会計の方の意見を聞くべきだと思いますけれど？」

どんな理由でか、黒依の動向を常に見ていたらしい末明が、意味深なアイコンタクトに気付いたようで、叶湖に話を降る。

「あら、彩藤さんならいろいろご存知でしょう？ それに、各部活からの活動報告や予算申請の書類を預かるのは彩藤さんのお仕事ですから」

末明の言葉に叶湖はクスリと笑い、それならば、と口を開く。

「予算総額で半額に抑えてもいいんじゃないやありません？」

は？

と、空気が固まった。

ほぼ、すべての部活が少しでも予算を確保しようと申請している中で、まさかの減額、しかも総額で半分になるような減額を提案さ

れるとは誰も思っていなかったのだろう。

「彩藤さん、そりゃあ、申請書類が提出されてすぐで、時間がなかったのは分かるけれど、テキトーに物を言うのはダメだと思いますよ?」

「テキトーではありませんよ」

くすり、と叶湖が今度は声を出して喉を鳴らし1枚の紙を差し出す。

「私としては、まともな収支報告書も書けないような部活に出す予算は1円もないのですけれど。それだと再提出を受ける手間も面倒ですしね。こちらの監査に従って予算を組んだ場合、総額は今期の約半額でしょうね」

叶湖が差し出した1枚の紙には、各部活の予算が簡潔に印刷されていた。

ざつと末明が目を通したところ、現状維持を守れたのは化学部を含む2つ3つの部活のみ。その他の部活についてはいずれも減額。一番酷いところでは、末明の知っている今期の予算よりも1ケタ違うような部活もあった。

「これ……っ。根拠もないこんな紙1枚の通りに予算編成できるわ

けがないでしょう！ しかも1ケタも違う部活があるのに、目に見える実績のない化学部がこの水準？ 他の部活が納得するわけがないでしょう」

「知りませんよ。そんなこと。アナタがこちらの意見を求めたのでこちらはこちらの視点から見た予算を提示したのみ。誰もこの通りにしろ、などと言った覚えはありません。なにより、減額も現状維持も、予算を適正に戻したただけであって、減額が大きい部活は今までが渡し過ぎだった、ということですよ。それから、化学部は文科系ですが、研究機材や材料の額はそれなりですから、自然、諸経費は多くなります。それでも、あまり人数を増やせないという実質的な要請から、少人数の部活のために、それほど法外な予算でもないでしょう？ まあ、詳しいことはこちらをどうぞ」

言って、叶湖は今度は紙の束を差し出した。

「っ！……これ……」

紙の束には各クラブごとの収支報告書の記載と、それに対して赤字で直された、どこで調べたのか分からない実質の収支と思われる数値が記載されている。

「まあ、この学園はそこまで切迫しているわけでもないみたいですが？　そこまで頑張って削減する必要もないでしょうから、今まではチェックも甘かったんでしょね。どのクラブでもある程度の水増しは見つかりましたが、特に後半クラスが中心となっているような部活ではそれが著しい」

叶湖の言葉に末明は絶句したまま動きを見せない。

「……確かに、1度、各クラブの収支と実質を出来る限り照らし合わせた上で、予算を編成しなおす必要はあると見ていました。ちょうど良く、生徒会の重役に2年目の役員が多いし、普段は入って来ない情報もある。……いい機会かもしれませんね」

そんな末明を横目で見やって、黒依が叶湖への賛同を示した。

その後、視線で会計担当の役員へと発言権が渡されるが、新任の会計が裏生徒会と生徒会、一応もつともなことを言っているはずの双方の会長に意見できようはずもなく。

そのまま、第一回目の予算編成会議は終了を迎えた。

「それにしても、驚きました」  
「なにがですか？」



「化学部です。実質が分かりませんから何も言えませんが、確かに必要経費を考えると、あの収支報告は不正がないようです。叶湖さんがよほどお上手なのか、それとも本当に不正がないのか」

学校を出、叶湖のマンションに向かう途中で黒依がぼそりと言葉を漏らす。

その内容に、叶湖はくすくすと喉をならした。

「一見、一番不正がありそうなのに、ですか」

「裏生徒会からの予算申請ですから、ある程度までは生徒会も見て見ぬふりでしょうし、学校側も文句は言えない……でしょう？」

「ええ、その通りです。ですから、化学部は水増しなどという小さな不正を働かずとも、裏生徒会の表を通さない経費として、直接学園側へ請求すればいいのですよ」

叶湖の言葉に、裏生徒会の運営については深くを知らない黒依は、ああ、なるほど、とうなづく。

「それにしても……と、いえば、アナタですけれど」

「はい？」

呆れたような叶湖の言葉に黒依が首をかしげた。

「あまり、暴走するのはお止めなさい。目をつけられては私の迷惑でしょう？」

「……彼女を目ざわりだとおっしゃったのはアナタでしょうに。目に見える理由があれば、アナタも排除しやすい……。違うので？」

確かに、叶湖は白居末明が邪魔である。

しかし、黒依のその言い訳じみた言葉には、1つ息を漏らさざるを得ない。

「アナタが本当に私のためにやってるのなら、ともかく。ただ、アナタは右を向くも、左を向くも、私に従いたいだけでしょう？」

「あの程度の学園、それでも十分でしょう？ 何か問題でも？」

「……まあ、……そうですね、ない……ですか」

当然のように叶湖の言葉を認める黒依に、叶湖はため息1つ。

しかし何も言えなくなって、最後にはいつもの笑顔を浮かべるのであった。

そして、生徒会に吹き荒れる嵐は日々、その規模を膨らみます……。

## 1年生篇？ 台風（後書き）

読了ありがとうございます！！

……長らくお待たせして申し訳ございません。

申し訳なさすぎて、次回予告などできようはずありません。

が、とりあえず、この話で高校1年生篇は終了です。

次話より、お話の舞台は1つ、学年を重ねます。

2年生篇では、女性2人のバトルをメインに扱っていきますので、そういうお話が好きな方は、楽しみにしてくださいませ。

次回はいつ、というと、また破ってしまいそうですが、とりあえず、5月1日はこの作品の1周年なので、何かできればなあ、、、と、希望的観測を申しておきます。

それではまた、次話でお会いしましょう！

## 2年生篇？ 実力（前書き）

### 登場人物

彩藤叶湖：高校2年（16歳）。化学部部长、生徒会書記

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長。

白居末明：叶湖のクラスメイト。生徒会副会長

宮木 篤：叶湖のクラスメイト。化学部副部长

大里ゆとり：風紀委員会、副委員長

3年女子：風紀委員会、会長

## 2年生篇？ 実力

「それでは、本日の自治組織合同集会はここまで、ということだ」

風紀委員長である3年生の先輩が静かに会議の終了をつげた。

自治組織合同集会。その名の通り、由ノ宮学園の自治組織が集まり、今後の学園運営などについて、意思疎通を図るための会議である。

叶湖が2学年へと進学したこの春、この集会にも小さな変化が訪れていた。

「こーんなタルいこと、よくやってんなあ。 ほぼ週1だつてえ？  
信じらんねえ」

「初めてこの集会に顔を出したくせによくおっしやいますね」

「あ、あ？」

「……篤？」

これ見よがしに不平を口にした篤に、最近、その雰囲気は常にま

とわれるようになった棘をモはや隠すつもりもないように鋭い叱責がとぶ。

「すみませんねえ。形式上は同じ自治組織とはいえ、こちらには生徒会や風紀委員と同じように学園の運営を行っていく、というわけではありませんから？」

「でしたら、これまでと同じように裏生徒会は不参加、ということではよかったですね？」

そう。いままで、自治組織合同集会とは名ばかり。昨年までは由ノ宮学園に3つある自治組織はしかし、その内2つしか集会に参加していなかった。

それが何の因果か、今年から裏生徒会が参加するとあって、集会の始った頃はわずかな緊張感すら漂っていたほどだ。

とはいえ、各組織の幹部2名が参加する会議。

生徒会からは、会長である無灯黒依と副会長の白居末明。

風紀委員からは、委員長である3年女子と、副委員長である大里ゆとり。

そして裏生徒会からは、会長の彩藤叶湖と、副会長の宮木篤。と、いうことで、何の因果か、ほぼ叶湖の息がかかっているメンバーである。

逆に、刺々しい緊張感をまとっていたのは、ほぼ末明1人。末明が噛みつきたくなるのも分からないでもない。

「そもそも、話がタルいとおっしゃるなら、裏生徒会から何か行動指針の1つでも提案されてはいかが？ 裏生徒会というだけあつて、学園のことはよくご存知でしょう？ せっかく集会に参加なさつているんですから、ずっと座つてるだけじゃ退屈じゃありません？」

末明の言葉通り、集会が始まってからこれまで一言も口を開くことなく、ただ会議の流れを見守っていた叶湖が、その言葉に、それはキレイな笑顔を浮かべた。

その叶湖の笑顔の意味を知っているあるものは、落ち着きはらった瞳の奥で興味深そうに好奇心の光を閃かせ、またあるものは、やれやれとでも言いたげに肩をあげる、そしてまたあるものは、僅かに困ったように視線の端で末明を映した。

「ええ、それはもう……。あまりにも話の内容に生産性がなかったものですから、つい居眠りしそうになつてしまいましたよ」

叶湖の言葉に末明と、そして風紀委員長が小さく息をのむ音がした。

「昨年通りの予定調和の学園運営をなぞるだけに、これだけの時間をかける必要性はないでしょう？ 話し合いが必要だから、人を集めているのではないので？ 長く続いた組織というものは、どうも慣習に重きをおきすぎる気がするのですけれど。まあ、1から新しいことを考えるのも疲れますしね」

「昨年までの運営方法をとるのは、それが長い慣習の中で最も適していると思われ、いままで続けられてきたからです。楽をしようとしているともとれるような言い方はやめて下さいます?」

「あら、楽をしているのではなかったのですか? ……そのつもりがないのでしたら、そうですね……今までの自治体がただの能無しだったんですかね?」

言ってクスリと喉をならした叶湖に、末明の顔いろが変わった。

今までの生徒会、それは要するに、昨年度も同じ役職を含めた末明と、そして彼女の慕う黒依も入っているのだから当然だ。なんてことを、と言わんばかりの表情に、まるでわざと、その言葉を口にしたように、否、わざと、挑発してみせた叶湖は、ただキレイに微笑んで見せるだけである。

「叶湖さん」

「あら、失礼。まあ、確かに、この程度の学園なら、この程度の運営でも構いませんしね。あえて最適を追究する労力を払う必要もないでしょう。……それならそれで、こんな無駄な時間、潰してしまえばいいものを。否、それも慣習というものですか」

どついつ心づもりか、静かに名前を読んだ黒依に、叶湖はまるで独り言のように呟いた後、笑顔で席を立った。



予想の及ばない突然の動作に、しかし当然のように、篤が従う。「会議は終わりましたよね？ 私たちは失礼するとします。ああ、安心してください。これからも傍聴のために参加はしますから、年度始めに言ったことを、1月経つか経たないかの内に撤回するものでもありませんし、ね」

捨て台詞のように会議室に言葉を落とし、叶湖は静かに部屋を出る。

「マジかよ。たりに」

「あら、では篤は不参加でも構いませんが？」

「冗談。俺も出るにきまつてんだろ」

シン、と静まり返る室内に廊下でいつも通りに会話を繰り広げる裏生徒会役員たちの声がいつまでも聞こえてくる。

「では、そういうことで」

「黒依くん！？ あの2人をこのまま放っておくの！？」

「会議は終わっただんですよね？ 僕も急ぎますから。なにより、自治体である裏生徒会の会議の出席を拒むことは僕たちの権限ではありません。とはいえ、学園運営に表向きに関わらない裏生徒会を積極的に参加させる必要もない。傍聴するだけ、というなら、そのままで構わないでしょう？」

当然、と言いたげに席を立った黒依に末明が悲鳴のような声をあげる。

それに対して、黒依は静かに末明を諭すように、反論のできない正論を並べて、自分もさっさと部屋を出て行った。

「委員長、僕たちも行きましょう？」

「え？ あ、そうですね。それでは、白居さん、失礼しますね」

2人のやり取りを見つめたまま、放心していた風紀委員長と共に、ゆとりも会議室を出る。中に居るものが1人だけになった広い部屋の中で、末明は1人、きつく手を握り締めるのだった。

「そろそろ、始りますかねえ」

「……危険なことは控えてくださいね」

「何言ってるんですか。私が危険を冒しても、そうと気づかれないうちに、私の目の前から危険を排除する。それがアナタの仕事ですよっ。」

「……仰せのままに」

夕日が照らす帰り道。まるですべてが計算づくのように、否、人の1人どころか、学園まるまる1つを、手の平で転がしているかのように、先を見通した真の実力者が、楽しそうに喉を鳴らした。

## 2年生篇？ 実力（後書き）

読了ありがとうございます。

お久しぶりです。生きています。

前回と似たような流れですが、ようするに、2年に進級しても、女の争いが激しくなるばかり、でございます。

さて、これからどう、叶湖と未明が行動を起こしていくか、お楽しみくださいませ。

次回、次々回は舞台を学園から移動させまして、叶湖と黒依、そしてその家族へ視点を移動させていきます。

とても次回の更新日を予告できる状況ではありませんが、近々、更新したいとは思っています。

生温かく見守っていただければ幸いです。

## 2年生篇？ 二人（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校2年（17歳）。化学部部长、生徒会書記

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

## 2年生篇？ 二人

ニユース番組が一斉に日本の梅雨入りを知らせてから数日がたった。梅雨に入ったとはいえ、毎日が雨というわけではない。

晴れ渡った空、とはいえ、ジメジメした暑さで快適とは程遠い日中、叶湖はすっかり夏のものとなった日差しに、その白い肌を晒すようなことはなく、静かに室内で読書にふけていた。

「お仕事はよろしいんですか？」

「こんな日にわざわざ仕事に手をつける必要などないでしょう？」

そもそも、今は情報屋の仕事はしていませんよ。パイプと趣味の情報漁っているだけです」

朝、叶湖の家を訪ねてから、昼食時を覗いてずっとキッチンに籠りっぱなしだった黒依がようやく落ち着いたのか、リビングへ顔を出した。その手に持たれた紅茶のセットに叶湖は今まで読んでいた本を閉じて脇へどける。

仲直りしてからというものの黒依が土曜の朝に叶湖を訪ねるのはもはや恒例のことであった。

あまりないが、珍しく叶湖が眠ったままのときは、すでに渡して

ある合鍵で部屋をあけ、叶湖のために軽食を用意しながら大人しく待っている。もつとも、黒依がたずねるようになって、自炊の機会がぐっと減った叶湖のこと。叶湖が朝早く起きだしていたとしても、黒依のとる行動になんら変化はないのだが。

とはいえ、黒依が同じく朝に叶湖を訪ねた今日は、しかし土曜日ではなく週のご真ん中、平日であった。

もちろん、祝日や祭日であるということもなく、2人そろって2年Aクラスの最前列に2席の空席をつくったというわけである。

「そつえば、お兄さん方は何と？」

「別に兄2人に何かされる歳でもないのですけど。放っておいてはここを訪ねられかねないですね。昨日の内に連絡は済ませてあります」

言いながら、黒依が差し出した紅茶を飲む。あっさりとした癖のない味が口に広がった。

「アナタこそ、ただでさえ、土日にここを訪ねることで反発は大きいでしょうに、平日に学校を休んでまで、となると怒られませんか

した？」

「妹たちは僕より朝早いですし。母は事情を知っていますから」

黒依が自分の手の内に戻ってからというもの、過去、叶湖の中にくすぶるようにしてあった嫉妬心はキレイに霧散していた。どれほど黒依を突き放し、光の中へ押し戻そうとしても、黒依自身がそれを拒んだ。

今に至って、叶湖と居ることを願った黒依が、あの暖かい家庭の中へ本当の意味で戻ることなどできないであろう。それを知った上での安心である。

「それにしても、これで彼女もまた何か仕掛けてくる気になるんでしょうか？」

見せつけるように、絵に描いたような優等生と、授業をサボりはしても、学校自体を休むことなどない学園のドンが、2人そろって欠席しているのである。

その理由はともかく、2人が一緒にいることは容易に察しがつくであろうし、根が優等生である彼女が安易に見過ごせることでもないであろう。

「そろそろではありませんか？ 生徒会での様子を見ていても、だいぶ限界のようです」

「それは楽しみですね。私も彼女から大義名分をもらった方が動き



易いですから」

カップをソーサーに戻した叶湖が1段したの床に座ったままの黒依に視線を向けて、純粋な笑顔を浮かべる。

もともと叶湖の純粋な笑顔の理由まで純粋であることは皆無であったが。

「きっかけは十分すぎるほど、叶湖さんが作っていたようですが？」

黒依に上目遣いににらまれ、クツリと喉をならす。

「気に入らないんですか？」

「いえ？ アナタの望むことですから。僕はアナタが傷つくのを恐れているだけです」

黒依が壊れものにも触れるかのように、おそろおそろ叶湖へと手を伸ばす。触れても？ 唇がかすかに音を作った。

「何を恐れる必要があるんです？ アナタはそのためにも生ぬるい日常まで捨てたのに」

叶湖は黒依の問いに答えず、自ら手を伸ばすことでそれに応える。黒依の手を暖かいぬくもりが包み込んだ。

「犠牲を生めば何か必ず手に入ると思うのは夢物語ですよ。何も手に入らず、すべてを失うことになることの方が多いし、手に入るものの価値だって様々です」

「これは？ 手に入ったものではないのです？」

叶湖の手に誘われ、その頬へと誘われた手にしっかりと伝わる、そのぬくもりと共に、確認のように囁かれた声に、黒依は瞳を閉じる。暖かい何かに抱きとめられた気がした。

「失うのを恐れるなんて、アナタはいつまでたっても臆病のままです  
すね」

「ええ。アナタがいなければ、暗闇の中、ずっと一人で立ち尽くしてしまふ。幼子のようなままです」

知っています、と呟くように言われて、くしゃり、とその髪を撫でられた。

「すみません。せつかくの日なのに、僕が慰められてますね」

「あら、構いませんよ。どーせ、今日のこの日など、所詮、かりそめのものです」

「かりそめでも。アナタが2度目の生を受け、僕と出会って下さるきっかけになった日ですから」

そう。今日、この日は、嘘々叶湖ではない、彩藤叶湖がこの世界で生をうけた、いわゆる誕生日であった。

そのために、黒依と叶湖は学校を休んでまで2人きりで過ごすことを決め、黒依は朝から意気込んで料理をつくっていた。

「それに、今さら黒依からもらえるものなどないのですから、せめて普段は見せずにいる、その心の内くらい見せればいい」

叶湖は相変わらずの泰然とした笑みを浮かべたまま黒依を諭す。

黒依の体も、時間も、想いも。彼の物はすべて自分の物であるという自負があつたし、またそれは黒依の抱くものと全く違っていなかった。

もちろん、黒依が叶湖の誕生日に、自分の時間や労力とは別の、形あるプレゼントを用意していかないわけがなかったが、叶湖にとって、それはとるに足らないものであった。

「僕の心の内など、今も昔も、そしてこれからも、ずっとアナタの色ですよ」

黒依の言葉に叶湖はもう1度、小さく喉を鳴らした。

「知っています」

## 2年生篇？ 二人（後書き）

読了ありがとうございました。

あと1話、閑話的に黒依の姉妹のお話を挟んで、舞台は学園、女の争いに戻ります。

できれば、トントンと進めたいところです。

間をあげずに更新していくつもりでありますので、見守っていただけると幸いです。

2年生篇？ 姉妹（前書き）

登場人物

彩藤叶湖：高校2年（17歳）。化学部部长、生徒会書記

桐原黒依：叶湖の幼馴染。生徒会長

桐原香里：黒依の母。料理教室講師

桐原 茜：中学3年。桐原家長女。

桐原杏里：小学6年。桐原家次女。

## 2年生篇？ 姉妹

「本当に久しぶりねえ……。見ないうちに、すっかりキレイなお嬢さんになっちゃって……。飲み物、何がいいかしら？ さすがにもうオレンジジュースじゃダメよねえ」

香里が幾分かくつきりし始めた目元のしわを寄せて、微笑んだ。「お構いなく」

叶湖が指されたソファに座りながら、微笑んで返す。そのキレイな笑顔から、叶湖の今の機嫌の悪さはよく分かるだろう。

叶湖は、黒依と決別したあの日以来、初めて桐原家を訪れていた。

それというのも、黒依の日常の言動から、叶湖との友好関係を回復させたことを知った香里が、いらぬ気をまわして、叶湖を桐原家での食事に誘ったのが原因であった。

叶湖にしてみれば、文字通り「いらぬ気」であって、そもそも好かぬ人間がいる場。桐原の家ですら、実家にほとんど帰らない叶湖からすれば、実家からほど近い距離に変わりはないのに、とてつもなく遠い距離に隔てられているように感じる。

「ごめんなさいね、茜も杏里も、もうすぐ帰ってくると思うから、

それまでくつろいでいて頂戴ね。前みたいに、自分の家だと思ってくれていいから」

そもそも実家すら自分の家だと思ったことのない叶湖が、桐原の家を自分の家だなんて思うはずもないし、以前も今も、その家でくつろげるはずがない。

そんなことが咄嗟に心によぎった叶湖が機嫌を良くすることはなく、むしろ悪くなった叶湖をかばうように黒依が母親の前に出る。

「母さん、料理の準備があるんでしょう？　ここはもういいですから」

「あらあら、黒依は本当に叶湖ちゃんが大好きねえ。じゃあ、飲み物だけ取りに来てちょうだい？　叶湖ちゃんはゆっくりしていてね？」

「ただいまー」

叶湖が、桐原家の大して変わりない様子を長めながら、黒依ととりとめないのない話をしてしていると、姉妹がそろって帰ってきた。

桐原家の内装で叶湖が覚えているのは、まだ姉妹が小さい頃の様子であった。叶湖が桐原家に頻繁に出入りしていたのは、彼女が小学生に上がる前のことだったからである。

もちろん、叶湖が桐原家に預けられることが少なくなっただけで、黒依と関係を断絶した後のように疎遠な様子ではなかったが、しかし、確実に叶湖が桐原家の内部まで入り込む回数は減少した。小学校に上がった叶湖に過保護な兄2人がようやく、1人での留守番を認めたこともあるが、叶湖が杏里の誕生に、まるで未来を見通すかのようなある種、いやな予感を感じて、桐原家に行くのを嫌がったのも、1つの理由であった。

そうこうするうち、叶湖は2年に進級。自らの城を手に入れると、兄2人の心配など顧みずに、めっきり帰りが遅くなったし、その翌年には杏里の持病が発覚して桐原家が、他人の子を預かれる状況ではなくなった。

で、あるから、たいして変わりはないとはいえ、年齢の上があった姉妹に合わせて、幾分か落ち着いた内装になった桐原家は、叶湖にしてみれば目新しくあったのだ。もっとも、前世で喫茶店マスターをしていた頃からインテリアにこだわりのある叶湖の興味をそそるようなものではなかったが。

「あ………こんにちは」



バタバタと、相変わらずのおてんば具合でリビングに駆けこんで来たのは長女の茜であった。さすがに中学3年。中身がとおに成人を迎えた黒依ほどではないだろうが、いろいろ苦勞の多い桐原家にあつて、精神の成長は早かつたらしく、苦手だからと叶湖を無視するほどの無神経さは備えていなかったらしい。

目に見えてテンションが下降したものの、叶湖を半ば睨みつけるようにして挨拶の言葉を発した彼女に、そういえば、元々こういう小気味いいほどの堂々とした様子はあつたかもしれない、なんて思い返す。

「こんにちは」

叶湖がいつも通りのキレイな笑顔であいさつを返す様子に、苦虫をかみつぶしたような顔をして身をひるがえした様子に、つい喉を鳴らしてしまひながら、叶湖はふと、その背後の影に自然を移す。

「お姉ちゃん、どうかしたの？ …… ああ、お客さん？ と、いうことは、おねーさんが、叶湖さんですか？」

姉と似た、高い声。しかし、姉が小学生が無造作に鳴らす、音楽の鈴であるならば、こちらは、神聖な場で神にささげる鈴りんの音か。静謐を打ち破るような、静かで、しかし聞くものを魅了するかのよくな音色に、叶湖はわずかに表情を崩しそうになって、ゆっくりと瞬きをした。

色白でか細い。見るからにか弱そうな少女がそこにいた。

3歳の時に病気が発覚して以来、入退院を繰り返していた杏里は、もちろん叶湖とほとんど面識がない。しっかりと会ったことがあるのは、彼女がまだ母の腕に抱かれていた赤子の頃であったのだから、叶湖の顔など覚えてはいるはずもない。

わざわざ顔も知らない人間のことを、彼女の前で話題にすることもなかったのか、様子の変わった姉に不思議そうな様子を隠さず、しかし視線はまっすぐに叶湖に注いでいた。

「ええ。初めまして、ではないですけど。顔は覚えていないですよ。うから。叶湖といいます」

「桐原杏里です！」

子供らしく元気に名前をつげる杏里の姿に、しかし同年代とは違う弱弱しさを見てとって、やはり病の気は隠せていないな、などと内心で冷静に分析しながらも、叶湖は笑顔を返した。

「ほらほら、茜も杏里も、荷物を置いたら手を洗って、すぐにテーブルについてちょうだいね。準備も終わったし、お客様はもう長い

間待ってくれてるんだから、これ以上待たせ茶だめよ？」

ふと、キッチンから顔を出した香里に告げられ、姉妹が動き出す。自室へ行くために階段に姿を消した2人を見送って、香里が苦笑を洩らした。

「ごめんなさいね。あの子だったら、まだまだお兄ちゃん子みたい」「茜と叶湖の何らかを気取っているのだろう。親ならば当然だろうので、叶湖はそれにも笑顔で返した。

「気にしてませんから」

叶湖にしては珍しく、笑顔も言葉も、真実、心の内から出たものであった。

「あの、叶湖さんとお兄ちゃんはその……恋人同士なんですか？」  
食事が始まってしばらく。入院続きの室内生活を通して、どういう性格形成が行われたのだろうか？ 少女の一言で、一見和やかだった食事の場が凍った。

もつとも、そうは言っても、黒依も叶湖も気にしていなかったし、ある意味尊敬に値すべき寛容な精神を持つ香里も、ほのぼのと笑って見せたただけであったので、真実凍ったように動きを止めたのは、

そのすぐ上の姉だけであつたのだが。

ちなみに仕事で遅い父が食事の席にいないことは、桐原家では常日づるのことらしい。

「そんなはず……っ」

「あらあら、お兄ちゃんと叶湖ちゃんの問題に、茜が答えちゃダメでしょう?」

声を荒げた茜にとんだ、穏やかながら、しかししつかりと言葉をさえぎる意思のある声に、叶湖は内心でため息をついた。

黒依から聞いた話によれば、この食事は『あらあら、私も久しぶりに叶湖ちゃんと食事がしたいわ』という、香里の1言が発端だったというが、香里の妻として母としての技量を知る叶湖も黒依も、真の狙いがそれだけではないだろうことを予想していた。

そしてその2人の宛てがハズれることはなかったらしく、香里の台詞から察するに、どうやらその目的は、少々ブロン君の姉妹……。特に、来年は高校に進学し、そろそろ年齢的にもその状態が好ましくない、茜に兄離れを誘導することであるのだろう。

ともすれば、自分はあて馬か、と思ってしまうた叶湖のため息も納得ができる。

「ええ、そうですよ」

とはいえ、今さら逃げ帰ることもできない。一応、本性は隠すつもりでいる、桐原家に対してである。叶湖は通常装備の笑顔で杏里に向かってほほ笑んだ。

「すごい」

何がすごいのか。頭はいいらしいが、ねっからの文学少女らしい彼女がどんな妄想を抱いているかは不明だが、彼女が妄想するような夢の溢れる関係では絶対的にならないだろう、ということを確認してしまっている叶湖は、しかし笑顔で首をかしげて見せるだけ。

「なんで……！ お兄ちゃんに酷いことしたアンタが！！ お兄ちゃんもお兄ちゃんだよ！」

「茜？ 僕は酷いことをされた覚えなどありませんが」

「だって！ そいつの所為で、お兄ちゃん……！！」

笑顔を変えない叶湖と、兄のリップルにあこがれの視線を向けた妹に、不利を感じたのか、茜が食事をそっちのけにして牙をむいた。そこそこ賤にはうるさかった香里が口をはさまないことに、とことんまでやらせる気が、と悟った黒依が、こちらもため息を押し殺す。

「僕の大切な人を『そいつ』呼ばわりするのは、いくら妹でも怒り  
ますよ？」

相手が赤の他人で、ここが一般家庭の団欒の場でなければ、即、  
殺されているレベルだ。そんな自分の幸運に気付くはずもない茜は、  
しかし兄の叱責の言葉に、瞬時に勢いを無くす。

もっとも、それほど危険な黒依より、しかしさらに危険であるの  
が叶湖だという、危険の察知レベルでは性格であることに、再度感  
嘆するほど、叶湖は穏やかにその争いを傍観していた。

「お姉ちゃん、どうしたの？ どうして怒ってるの？」

「杏里！ アンタは知らないから……！ この女が、お兄ちゃんに  
どんだけ酷いことしたか……！ お兄ちゃんはずっとだまされてる  
のよ！」

人畜無害の王子様が、悪い魔女に騙されている。ハタから見れば  
その通りかもしれない。しかし、その王子様こそが、実は、人畜無  
害の皮をかぶった、魔女の下僕であつたら、一体どうするのだから。  
か。

兄に騙されていると訴える少女が、実はその兄に騙されている事実を、自覚するときは来るのだろうか……。

結局、茜は自分の言いたいことを捲し立てると、逃げるように食事の場を離れてしまった。これにはさすがに、アテの外れた香里が注意の言葉を飛ばしたが、忙しく部屋に引きこもってしまった茜に届くことはなかった。

結局香里の狙いもはずれ、茜の兄離れは持ち越しとなってしまい、最後に黒幕から、ごめんなさいね、と軽い謝罪を受けたものの、故意あつて仕組まれたことに対しての謝罪に、もはやため息も出ず。結局、疲労を感じただけの食事会に、叶湖にとって桐原家は鬼門であるのかもしれない、などという考えが頭をよぎったのは、ここだけの話。

## 2年生篇？ 姉妹（後書き）

読了ありがとうございます。

またまた、遅くなってすみません。

前に書いた通り、桐原の姉妹の話でありました。

正直、叶湖の真のライバルは、白居未明ではなく、この妹2人だと思っております。

この姉妹との最終決戦の場もいつか設けたいものです。

その前に、次話からはいよいよ、2年生篇も佳境に入り、白居未明との決戦です。

更新、早めを目指して頑張りますので、どうぞ暖かく見守ってやってくださいませ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1732/>

---

私と犬（アナタ）の世界で

2011年9月19日10時03分発行